
ぼくの時

西崎皓之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくの時

【Nコード】

N9726K

【作者名】

西崎皓之

【あらすじ】

大学生になったぼく。

その道をつかって学校に通うことにした。
なぜ？

始まりはそこからだった。

不思議なサークル「超研」の人々の交流を通して、変化していくぼく。

地方から学校に通うために、上京したぼくの周りで起こる出来事を、

ぼくが伝える真実のこととは。

「ぼくの時」シリーズ第一作、その道。

第一章 その道

第一章 その道

どうしてその道を歩いて通おうとしたのか、いま考えても理由は明確にはならない。それらしきことがあって、ひとつひとつは多くの理由を含んでいるんだけど、結局は決め手にはならない。なぜ彼、彼女を選んだのか、なんて聞かれて、理由を得々と説明していく人がいたら、少し疑ってみたほうがいいのと、同じことだ。

とにかく、何日か考えてそう決めたのだった。

でも、どうしてもと訊かれたら、おいおい道すがら明らかになっていくのかもしれない、と告げるだろう。実際、自分もそのことは知りたいと思っているんだから。でも、そのためには多くのことを説明しなくてはならない。それをぼくは怖れるんだ。たとえば彼女の笑顔がどれほどすばらしいかってことを聞いて、あなたは楽しいのだろうか。ぼくにとつてとても重要なことであっても、あなたにとつてはなんの興味もないことかもしれない。

ぼくはそんなことを思つて、その道に歩を進めていたような気がする。自問自答みたいな感じかな。要するに、ああでもない、こうでもないという頭のなかをぐるぐる回転させていたんだ。ぼくは十九才で、そしてその道はどこまでも続いていて、視線の上のほうにぼくの学校があつた。

大きな通りの、アーケードのある商店街を横に入ると、もうそこは生活道路で車もほとんど走らなかつた。道沿いは小さな工場や民家で、鉢植えなんかが並べられたりしていた。どこか閑散としていて、大きな物音も聞こえることがない。ときおりインクやら薬品の

においが漂ってくる。それなのに、人がいないような、あるいは息を潜めて隠れているのか、そんなような感じさえ抱かせる。

確かに午前中そこを歩いている人は、ぼく以外ほとんどいなかった。別に出会いと交流を求めているわけではないので、それはそれで都合だった。人にあえば警戒や気まずさや親近感を表すわけだから、ある種対応に困ることもある。無視するのかあいさつするのか、自分は怪しいものではないと、相手に何気なく伝えるにはコツがいる。

多くの人は何かに追いかけているものだが、幸いにしてぼくには時間と体力が与えられていた。急ぐでもなく、ある程度の速度で周りを見回しながらぼくは歩いていった。

東京の春は突然やってくるわけではない。気がつけば春になっていた、とも違う。ひそかに着々と準備が進められ、知らない間に、そのただ中にいるにも係わらず、意識したときにはもう過ぎ去っているのだ。だから春の特徴は、兆しの中にある、とぼくは結論付けた。温められた南の風が潮の香りのように漂いはじめたら、それはもう嵐の前兆だ。黄砂まじりの埃とともに、あつというまに雨風が通り過ぎる。冷氣とのせめぎ合いを制して気温の上昇が土を緩ませ、桜の花が咲くころ冷たい風が戻ってくる。それが入学式の季節だった。

その渦中にいれば多くのことに気づかないものだ。対応するのに手一杯で、余計なことは考えていられない。そういうのを生きていくっていうんだろうか。その中に、自分というものがあるのかもしれない。処理をしなくてはいけない問題が山積みで、それを片づけているうちに人生を終えるなんて、その人にとって最高の生き方なんだろうな。歴史上の人物なんてみんなそんな感じだよな。

ほかの事は結局、初夏になって考えた春のことのようなものなんだ。懐かしがったり、反省したってもう過ぎ去った季節のことなんだ。だから常に精一杯生きたかつて、自分に聞いてみるしかできな

いんだ。でも、後悔とともにいくらか感傷的になるのはしかたないかもしれない。

人は嘘をつく。

たぶん人が言葉を持ったときから嘘をついているのだろう。嘘つきは泥棒の始まりというから、そのときからもう泥棒もいたに違いない。嘘をつかなくなったり、泥棒をしなくなるのは文化なのだろう。

えっ、本当に文化の進歩なのだろうか。どこか胡散臭い。少なくとも私は人を殺さない、というのに似てる。それは一つの倫理だけど少し無力だ。しかしそれが精一杯の内容なのだろう。少なくともそのようにしか生きていけない。完璧なんてもとより望みもしないし、できるわけでもない。それなのに、そんな幻想になんで囚われてしまうのだろうか。歩きながらは、それほど込み入ったことは考えられない。だからぐるぐると同じところを廻っていたりする。ときどき啓示のようにひらめきが降りてきたりするのだが、たぶん、それって結論を急いでいるだけなのだろう。

中学の卒業記念に、ずうっと好きだった女の子とデートをした。たぶんとても緊張していたのだと思う。自分でも何かありえないことを話していたような気がする。とてもこれではダメだ、と話しながら考えていた。気分は高揚しているはずなのに、気持ちがなえてくるのだ。ある意味もう目的は達してしまっていたのかもしれない。一番うれしかったのが、好きだった女の子をデートに誘い、了解してもらったことだったから。それだけで舞い上がった。あこがれていた人で、ほとんど声もかけられなかった。勇気を奮ってなにか話したとしても、自分で照れてしまい逃げるように別れてしまっていた。

いま思い出したのだけど、彼女の家へ電話をしたのだった。そうしなければ約束が取り付けられない。

最初に男の人が出てきた。父親だったかもしれない。

「中学の同級生ですけれども、亜里抄さんおられますか」

たぶん準備していた言葉を伝えた。

微妙な間があつて、電話が取り次がれた。

すべては順調に進んでいるようだ。

「今度の日曜日に会いたいんだけど、空いてるかなあ」

自分では明るく闊達に、そんなこと大したことじゃないんだ、とでも言わんばかりに。

あるいは緊張しまくりで、

「ご都合どうでしょうか」

とか訊いたかもしれない。覚えていない。

とにかく一瞬、息を吞んでから、

「いいわ」

と、かすれがちだけど明るい返事をもらえた。

電話の声は、遠くから眺めていた彼女にふさわしい声に聞こえた。いつも彼女はしなやかな肢体で舞うように歩いていた。そして弾けるように笑うと、自然にカールしているまつげが震えて大きな目がすぼまった。

眺めているだけで幸せだった。でも彼女はおしゃべりな女の子ではなかった。ときどき遠くを見るような目をしていた。その目にどんなものが映っていたのだろう。ぼくの想像はそこまでで、彼女の内面に入っていくことはなかった。いま考えればわかるけど、ぼくは本物の彼女とは怖くて向き合えなかったんだ。

どうすれば良かったのだろう。

じっさい付き合うことを望んでさえいなかったのかもしれない。

結局、告白も交際の申し込みもすることがなく別れてしまった。文字通り、別れてそれから一度も会ったことがない。苦いどこか儚い思い出だった。

大通りを横に入って、高い塀で囲まれた学校の敷地に一度も曲がらずに突き当たる。途中考え事していると橋を渡ったことにも気づかない。下を覗かなければ見えないほど上流から谷は深いし、何よりも幅が短かった。知らぬ間に通り過ぎた川が、神田川であることは後で知った。

突き当たって、そこを右に少し折れると木の門がある。大きな門は閉まっていたが、横の通用門は当然のように開いていて、監視している人もいなかった。少なくともぼくは一度も呼び止められたことがなかった。

入ると左手は馬の厩舎になっていて、その暗がりで動いている気配やイナナキが聞こえても、こちら側へ姿を見せることはなかった。ゆっくり佇んでいるのは二、三頭のヤギだ。道端の草を食んで怪訝そうにこちらを見ている。寄ってこないところを見るとどこかに繋がれているのかもしれない。さかんに動くのは鶏で柵の中で首をせわしく上下に揺すっていた。陽光の中、ひどくのどかでほつとする。それがこの道を通う一つの理由だった。実家の郊外ではこんな風景をよく見たものだった。

正面の坂道を登り、深い林を抜ければ南校舎の裏手に出る。その脇を通って大講堂まで、駅を出てから三十五分。通学の車両に乗っているより長い時間で、電車の一駅を歩いたことになる。初乗りになるその分の料金の節約だし、運動不足の解消にもなる。これで理由が二つ追加できた。

くたびれた訳でもないが大講堂の前のベンチに腰を下ろして、ぼんやり広場を眺めていた。春休み中の校内は、のんびりとしていた。ベニヤ板に模造紙を貼り、なにか書いている人たちがいて、こんこん叩いている音が聞こえたり、運動着の団体が体操をしたり、結構人はいるみたいだ。高校への通学は地下鉄の駅から山の上の公園を越えて行かなければならなかったから、足の筋肉をぱんぱんにしても二十分はかかった。それに比べれば楽なものだ。慣れていたというのが四番目の理由になる。

「あのう」

と不意に呼びかけられ驚いて振り返った。

小柄で小太り、まげを結ったらそのまま相撲取りといった感じの女の人が、頬を赤くして立っていた。とても善良そうだが、なぜか宗教の勧誘を、自己啓発のために、無理やりしているような気がした。

はにかみながら自己紹介をして、

「チヨウ研に入りませんか」

と、やはり思ったように勧誘を始めた。ただサークルだった。ぼくが学校に入って、初めて会話をしたのがこの守屋さんだ。

「チヨウ研って何ですか」

取りあえず先輩らしのおとなしく訊いた。

彼女はそれを聞いて、待ってました、という感じで説明を始めた。要するに超・能力や超・現象みたいな超えてるものを研究する会らしい。彼女は副会長でぼくを見込んで声を掛けたのだと言った。嘘をついているようには思えなかったし、ぼくは高校のときは運動部だったけれど、本格的に運動を続けていく気はなかった。同好会のようなところで仲良くやっていくつもりもなかった。文科系のサークルにでもと、考えていたので選択肢としては有りかもしれないと思ったけど、すぐにという話でもなかった。

「考えさせてくださいよ」

とぼくは言って、名前と所属を名乗った。軍人の識別表みたいだな。

「とにかく、どこかのサークルに所属すれば役に立つわ、会の部屋に遊びにきてね」

と、守屋さんは云って立ち去った。親切な人みたいだった。

それから毎日のように学校に通って、構内を歩きまわった。校舎の方に近づかなければ、ほとんど人に会わなかった。何やら細い土

の道が林の中を続いているだけなので、歩いている人がいない。左手の道を行けば、馬場の上に出ることがわかった。そのまま進めば少し開けたところに池があった。湧き水があるらしい。奥は深い林になっていて、入ることができない。それからさらに上っていくとサークルやら部室が並んでいるプレハブがあった。とてもきれいはいえない。近づくのは遠慮したい感じだった。動物の糞みたい。縄張りを表すためにわざと臭いや汚れを落とさない意思がみえた。中に入ってしまったら、それはそれで落ち着いたりするのだろうか。今は勇気が少し足りない。

またひとつ理由が見つかった。

ぼくはあまり人混みが好きじゃないんだ。駅や電車で、もみくちゃにされるのは避けたかった。どうしても嫌だ、ってわけじゃないけど、なんとかやり過ごしたいことは誰にもあるものだ。できるなら、そうしたくはない。消極的ではあるが、意外と頑固な意志になりうる。

たとえばリーダー的な人がいて、そういう人って、うまく根回しをしたりして、みんなの意見みたいな顔して自分の考えを押し付けてくるんだ。その人がどうしてもそうしたいなら、それはそれで賛成したって構わないのだけど、やっぱりだとしても、そうだよな、みたいに言われると反発したくなるんだ。

どうしても嫌ってわけじゃないけど、あんまりそうしたくないんだ。自分の意思があるわけではないんだけどね。

何か食べようか、みたいになって四、五人で頭に食事の献立を浮かべるとする。一人どうしてもカレーが食べたい人がいるんだ。彼はすぐ欲望が強いわけだから弱肉強食の世界では、ボスになるわけだ。そういう人って何故か、みんなにカレーを食べさせたがるんだ。はっきり言って、それが嫌なんだ。いろんなメニューのあるところへ行ったら別々に食べたって構わない。でもそれだけが目的じゃない気がするし。

まずみんなの意見を聞けよ、というのが一つ。でも彼はカレーを食べたいんだ。それだったら、自分はカレーを食べる、とまず言うべきだ。ほかの連中がうどん、といえば自分だけそれを食べればいい。最悪ぼくならそうする。

でも彼はカレーをみんなに食べさせたいんだ。彼にとってそれが必要なことなんだ。さらに言うならそれが彼にとっての正義なんだ。ちよつと大袈裟かな。

それで今、思い出したけれど、とても恥ずかしい気がして、どうしてあんなことしたのかなあ、って今でもはつきりしないけど、それとも関連するかもしれない出来事がある。中学二年生の時のことだ。

クラスの級長を選ぶか、生徒会の役員のクラス代表を選ぶか、とにかく選挙することになった。そのときのルールは担任から説明があつたのだけど、まず立候補者を募る。やりたい奴が手を挙げる、ということだ。そしてそいつを応援なり推薦する者を決めて、二人一組で競うらしい。

どういう教育的配慮でそうなるのかわからないが、少し禿げかけた数学の教師らしくない提案だった。どのクラスでもそういうやり方が採用されたのかもしれない。

誰も手を挙げなかった。

そついうときは、いつもみたいに無記名の投票になる。

そつすれば岩瀬が当選するだろう。結構そついうのが好きそうなのに、黙って担がれるのを待っているなんて、卑怯な気がした。彼が適任だと多くの者が考えているのだろうか。よくわからないがそうでもないような気がした。でもこのままでは彼が自動的に当選するだろう。岩瀬は勉強もできたし、明るい感じの好少年だ。

でもぼくは、イジメとは少し違うのだろうが、結構彼にからかわれていた。うつとうしいし、構うなよと、腹を立ててもいた。そんなこともあって少し悪戯心を起こした。

手を挙げた。全然そんなことに興味も関心もなかったけど。

クラスがどよめいて、沈黙した。

なにか違う展開だな、とだれもが思った、はずだ。そういうこと
って、人生にはかなりあるよね。ぼくは自分が皆にどう思われているか
知りはしなかったけど、こういうところで手を挙げるタイプでは
ないのは知っていた。

「ほかに誰かいらないか」

教師は言って、あたりを見回した。

動きも声もなかった。

「では、推薦者はいらないか」

そんなことを考えていなかった。推薦者がいなかったら、ご破算に
なるのか。何も変わらないのか、って思った。

しばらくして佐藤が手を挙げた。

三角のおにぎりを逆さにしたような顔をした、別に目立つような
奴でも、親しくしていたわけでもなかった。

「推薦します」

それだけ言った。

「では、決まりだな」

そういうルールだった。

推薦されて立候補するのではなく、立候補してから応援がつくの
だった。一人以上いれば成立した。ばかげたルールだった。自発性
やら自立性を目指していたのだろうか。

その昔は担任が級長を指名していたのだろう。

どんな考えがあって佐藤がぼくを応援したのかわからなかった。
それから級長としてぼくが何をしたのかも忘れてしまった。そして
しばらくたって佐藤にその時のことを訊いた。

「忘れたよ、その時はそうすべきだと思ったんだ」

それが、彼の答えだった。

多くの理由があったか、それとも理由なんて別になくて、瞬時に
決定されるのが行動の意味で、それによって、リアクションが連鎖

していくんだ。

思いもしなかったことだけど、そのあと岩瀬と仲良くなったんだ。彼には彼の事情があったというわけだった。

それからしばらく経って起こった出来事で、対をなして恥ずかしい体験は音楽室事件だ。発端は始業時間前にあった。ここからは記憶の中で微妙なんだけど、たぶんぼくが黒板に悪戯書きをしたんだ。それ自体は他愛もないもので、ぼくはそれを消すことさえ忘れていた、としか後で考えると思えない。

書いたという記憶は残っているのだけど、書いている自分の記憶がないんだ。弁解ではないが、ほとんど意図もなく、悪いことをしているという意識もなかったのだろう。

でも若くはない音楽教師はそう受け取らなかった。悪意を感じたのか、挑戦と受け取ったのか憤然と怒り出したのだった。

「書いた者は名乗り出る」と言う。

誰もが息を飲んでいる。

これまた弁解じみているが、あまりの怒りの激しさにびっくりしてしまって、すくんでいたというのが実際のところだろう。

「では名乗り出る者が出るまで授業は行わない」

と言って、職員室に戻ってしまった。

「びっくりしたなあ」

という声があつて、その後の教室は、そのまま休み時間の雰囲気になつてしまった。各自が中断していた遊びを始めたのだった。

心落ち着かないのがぼくだった。

本当にそのとき自分がやったと思っていなくて、教師が言い出した時も、あれっ、みたいな感じだったんだけど、その後、そうだ、あれは自分の仕業だ、と考え始めた。

そうすると罪悪感とか、ばつの悪さや、誤魔化せないかな、みたいな考えさえ次々と起こって、どうしよう、どうしよう、と煩悶していた。誰かがぼくのやっていることを見ていたかもしれないのに、

それを言い立てる者もいなくて、だいたい皆がこの事態にあまり興味を持っていなかった。何かが起こるとすれば、教師の方からだと感じていたんだろう。

自分のせいで、授業が止まっているのにも気が引けて、誰にも相談せず、名乗り出ることにした。ぼくが教室を出ていくのにも、みんな関心を払わなかった。

職員室に行き、まっすぐ音楽教師の前に立って、私がやりました、と言った。

なんだか泣きそうになった。

音楽教師は怒っていなかった。

ぼくが教室に戻った後、すぐに現れて何もなかったように授業を始めた。説明は何もなかった。

たぶん教師は誤解したのだと思う。

ぼくがクラスの代表のようにして名乗り出たことにしたんだ。教師の意図はわからない。そのことにそんなに興味がないのかもしれない。でも、それで納得できたんだ。ぼくも自分のやらなくてはならないことをした。大した罰はなかったけど、ぼくにとっては、それで十分だった。

第二章 母の死

第二章 母の死

学校は春の行事を連日続けていた。

ぼくはそれに参加したり、しなかったりしたが、その道を通って毎日通うことは続けていた。そして相変わらずその途中、ぼんやり考え事をしていた。散歩なら周りの景色を楽しみながら進んでいくのだろうが、通学となると目的地があるので、歩き方も違ったものになる。その微妙な速度感が思考にスピードを与えていた。

たとえば着いたら何をしようとかは考えなかった。それは着いてから考えた。そうでなくて要するに役に立たないことを考えていたのだ。

以前、嘘について考えていたけど、あれって何だったんだろうと思いついたりした。

赤ん坊がいらないいらないばーを喜ぶのはどうしてか、誰かが解説していたけど、顔の前に手を置くと赤ん坊は顔が消えたと感じるのだけれど、それがまた急に現れるので、驚いたり安心してうれしがるらしい。手が隠している顔を想像できないんだよね。

現実と非現実の問題。言葉の発達とともに、いないいないばーを喜ばなくなるような気がする。想像力の誕生かな。嘘って想像したものじゃないのかな。夢に似ている。悪意とは次元の別のもののよう気がするな。確かなことって、どこかにあるのだろうか。

心の弱さが人に嘘をつかせる。矜持や虚栄心、現実からの逃避。

現実を認めることが、改善の一步であることは皆知っているはずなのに。より良く生きることが義務ではないけど、少なくともそうありたいと願うことは否定できない。

ひどい中傷を受けてめげてしまう人がいる。反発して戦う、ということさえできなくなってしまう。あるいは戦う顔がみえなかったり、あまりに数が多かったりして反撃が届かない。

そんな人が死にたいと思い、実際そうしようとするとき、そしてそうしてしまったとき、どんな言葉がかけられるのだろうか。その人が嘘で自分を守り、それで生きていけるとしたら、それを非難することができるのだろうか。

一生そうしてしまえば、正気ではいられない。ただ寒い冬の間だけでもひと時の嘘の生活を認めよう。あとは人間の生命力に賭けるしかない。もっと自然な治癒力を信じるべきだ。

世界が終わってしまえば、すべてが終わってしまう。

人間善意だけでは生きてはいけない。ではなくて、善意の人は、えてして気づかず人を傷つける。法律用語では、善意とは無知のことをいう。悪意とは事情を知っていること。多くのことを理解しなくてはならない。分かり合うことが一番の方法になる。

悪意を理解する一番の簡単なやり方は、もともと人間は悪意の塊だと考えることだ。人が人としての歩みを始めたとき、自然から悪意を貰ったのだろう。

人は自然の鬼っ子になる。

動物には悪意も善意もない。フェイントもない。逆に、いかに欺くかが対人競技の基本になる。純粹に人が走ったり、投げたり泳いだりするときの競技に駆け引きは少ない。多くはよりよい記録が目的になる。そのほうが、より動物的に見えないか。人が動物であることは幸せであるに違いない。

おそらく人が農業や牧畜を始めたとき、人は自然から離れた。あの文明の消滅はいつも人がその環境を壊してしまうことにある。

さて、悪意の話だ。

邪悪な心という。その化身が悪魔なのだろう。人の心には常に悪魔が潜んでいる。それを手なずけて現さないことが文化であるのだろう。そのための辛い道のりを人類は歩いてきたし、今も歩いている。その未来はといえば、かなり悲観的ではあるが少しずつでも進歩していると考えたいところだ。

悪意はなくならない。

人が人としてあるために悪意は生まれたのだし、そのために人は未来を信じることができるのだろう。邪悪な心を克服するために人は生きていると思いたい。あるいは邪悪な心を鎮めたまま生きたい。心の平穏を人はどこに見つけるのだろう。死刑囚に信仰を促すのは欺瞞ではないのだろうか。

宗教家はそうせざるを得ない。受け入れる人なのだから。そういう意味で宗教は麻薬である、というのだろう。

しかし痛がつて死んでいく人に医者も麻薬を与える。痛みを除くことが治療と認められるからだ。解決は永久に引き伸ばされている。心の平穏をどこに見出すか、の問いに多くの人は日常と答えるのではないだろうか。愛する家族や友人、近親者に囲まれた穏やかな安定した生活。それ支えているものがひどくあやふやなものとも知らずに。それでも人はタフに生きていける。日常が安定していなくても。多くの災害の現場で見出せる光景だ。不幸はよりましになりうる、と信じることだ。嘆きは嘆きとして、悔いは悔いとして前へ進むべきだ。そうとしか生きていけないのだから。感謝や希望を持ちながら。

母におまえは理屈が多いのだよと言われたことがあったかもしれない。屁理屈とまでは言われなかった気がする。いま思うと仲間は求めていたけれど、かなり一人ぼっちの子供だったのか、支えてくれるしつかりとしたものをいつも探していた。ズボンで右足からかか、左かで言い合い意地になって傷ついていくのに耐えられなか

ったのだ。食べるのがアイスクリームか、かき氷かで人格を否定されたみたいに言われたくない。どこか向きになっていく性分だった。

母は世間体を気にしすぎると、その頃は思っていた。ぼくは空っぽの自分に思い至らず、人にどう思われたっていいじゃないか、と考えていた。結局自分ではかつこつけているくせに、人には格好つけるなよと言っていたのと同じだった。

だいぶ経ってからだけど、父親に対する口のきき方が悪いと怒られたことがある。自分の夫をないがしろにするな、と聞こえた。ぼく自身の心理の中では悪意はないことはわかっている。馴れてございになったかもしれない。親愛の現われとは理解されなかったらしい。

伏線がある。

母に避けられているのではないか、と感ずることがあった。たぶん母にはそんな他意もないはずなんだろうが、ぼくには、友達とか父の身内とかに会わせたくないと感じている、と思えるのだ。

自分の息子を恥じていたのかもしれない。あるいは面倒を避けたのかもしれない。ぼくとしては大した想像もしなかったし、どちらでいいことだから随意にという感じだった。

たしかその時はだれか来ていて、挨拶ぐらいはしたと思うが、早々退散したくて用件だけ伝えて去ったのが気に召さなかったようだ。

云うことを聞かない子だったらしく母にはよく叩かれた。考えるとなうなのだけれど、はっきりした記憶は少ない。タイルの壁の部屋と、ぶたれる前のほんの瞬間の困惑がイメージとして残っている。痛みも恐怖もなかった。物覚えのいい子ではない、というより反復して思い出さなかったのだろう。

楽しい事でもなし忘れてしまった方がいい。かといって楽しいことも覚えていない。車にはねられボンネットの上に乗っかって助かったという記憶はあるが、それは後から話を聞いてその時想像したイ

メージのような気がする。

幼稚園で喧嘩をしてそのまま家に帰ってきて、口惜しかったのか祖父の腕に噛み付いていたという記憶も掘りごたつのある古い家の思い出と一緒にどこかで合成されたようだ。

当時ヒステリーは流行り言葉だった。家庭の事情が浮気問題を暗示しているような、子供の使う半端な意味で母はヒステリーだった。たぶん言葉には出さなかったが、そうだと思っていた。

自分の思い通りにならないことに腹を立てるのだろうか、子供には当たり前だけれど、分かってやっている事と訳のわからないことがある。怒られるのはそれを教えてくれる機会なのだけれど、母は混乱してしまうようだった。子はかまってもらいたいのだから、叩かれても放っておかれるよりましなことは分かっている。

母は忙しかったのだと思う。たいてい大人は忙しいものだけれど、人以上に気を張っていたと思う。だから余裕がなかった、時間にも気持ちにも。

姉から電話がきたとき、嫌な感じがした。

心臓が大きく一回どくつと鳴って、かさかさって打ち出した。もともと用がある時しか掛かってこないから、何かの用事ではあったのだけれど。

冬の日はずっと早く落ち、暗くなってからもうしばらく経っていた。

「お母さんが大変なの、すぐ来てくれる」

どこか間延びして、実は相当慌てているとわかる声だった。

「わかった。すぐ行く」

自分でも意外に感じるほど、しっかりした声が出た。緊急を要することはすぐ分かった。

事情を聞いているより、駆け付けてしまう方が良いと判断した。少なくとも母に何かが起こったのだ。

落ち着かなくては、と考え、考え、家へ急いだ。

何が起こったのだろう、と想像することを避けているので、頭の

中が膨らんでいくようだった。そして今度は頭の右のうしろのほうで、かさかさ、かさかさと何かが鳴り始めた。

出先から二十分ぐらいで実家に戻った。灯りは点いているのだけど、どこかぼんやりとした感じがしていた。

声をかけて玄関を上がると、奥の方で声がする。ばたばたと駆け上がると、姉が出てきて、

「お母さん危ないの」

と、顔をしわくちやにして言った。

驚いて、その肩ごしに中をのぞくと、救急隊員らしい人が二人で応急手当をしている。母は毛布を掛けられ横たわっていた。

「風呂場で倒れたの」と姉は言う。

風呂からあがってこないのに父が気づいたらしい。少し時間がかりすぎるので風呂場をのぞいてみると、母親が倒れていた。あわてて、姉を呼んで二人で引き上げたらしい。風呂の湯を飲んでいようで、その時点でもう呼吸がなかったと云う。

すぐに救急車を呼ぶと、意外と早く来たらしい。

それでいま人工呼吸やら、心臓マッサージなどの応急処置を始めたところだった。

母が死ぬとは考えられなかった。手当てをしたら、息を吹き返すと思っていた。

どのぐらい時間が経ったのだろうか。耳鳴りのように、かさかさとかだましている音があった。

妹と入れ替わりに父が戻ってきて、その話を椅子に座って聞いていたときだった。父は動転して舌の回りが悪いので、何度か聞きなおさなければならなかった。

「お母さんを病院に運ぶの」と、姉が戻ってきて云った。

「だれかついて行きますか」と、救急隊員が聞くので、

「私が行きます」と、急いではくは答えた

担架が運び込まれ、隊員は掛け声をかけながら、母をゆつくりと救急車に乗せていった。ぼくは後ろから付いて行つて、乗り入れるとき母の手を触ったが、まだ温かった。それでそのまま、担架と一緒に乗ろうとしたら、止められて助手席に座らされた。

母はそれほど遠くない総合病院の救急室に運び込まれ、ぼくはそのままついて行って、正面から部屋に入った。医師が隊員に事情を確認して、心臓に電気ショックを与えた。

ボタンと母が揺れ、静寂が広がった。そしてまたボタンと。

どのぐらい続けたのだろう。

「だめですね。家族の方を呼んでください」

と医師が言ったとき、ぼくに気づいたみたいで部屋を出された。

そのころには母の脚は紫色に変わっていた。

それからすぐ、待っていた姉や父や叔母と一緒に部屋に入るよう言われた。

「手を尽くしましたが、もう処置をやめてもよろしいですね」

と、医師は皆を見回して確認した。

体も色が変わってしまい、母が死んでいくのが誰にもわかった。

「ご臨終です。午後九時四十二分」

姉が泣き出し、嗚咽が止まらなかった。

皆、泣いていた。ぼくも目が潤んでいた。

それから遺体安置室で待つように言われた。

しばらくすると、葬儀社の人に来て、これからの段取りが説明され、その通り進行していった。死の悲しみはなにやら怪しげな儀式の中に埋もれていった。

実際、母は死んだんだろう。

もう声をかけても返事もないし、笑顔をかえすこともない。

でも、死を実感することはできない。何かしなくてはいけないことを、仕残してしまったような気がしていた。とても大事なことを言い残してしまった気がした。誰かが母の命を奪っていったような

気がしていた。

なぜ死んだんだ、と暗い声がこだましていた。

そのとき、不謹慎かもしれないが、

「今日ママンが死んだ」

という書き出しのフレーズが浮かんできた。

あの主人公は夏の太陽にせい、そのあと殺人を犯してしまうんじゃないかったのかな。今は冬だし、そんな気分にもならないな。別離。次に浮かんだ言葉だった。永遠のわかれ。魂があるかないかはわからないが、母はもう大好きなお菓子を食べることができない。水泳もゲームもカラオケもやることができない。

もう少しの間だけでも、生きていてもらいたかった。母は自分で驚いているのじゃないだろうか。こんなに早く逝ってしまふことを、
明るい人だったから、あはは、と笑って、

「やっっちゃったね」と、言うかもしれない。

風呂場で発作を起こしたらしい、脳なのか心臓なのか。今となつては、どちらでもいいことだ。その前にはスイミング教室に行っていたらしい。少なくとも、死ぬまで元気にしていたんだ。

「事故なんだ」と、ぼくは思おうとしていた。そうしたほうがなぜか理解しやすいように思えた。どんな事がよかったのだから、悪かったのか、もう本当にどうでもいいことだった。

母はもう生きていないんだ。

それだけが確かなことで、あとのことはどうでも良かった。

人が集まってきたが、ぼくはできるだけ黙って、頷いていた。そうしないと、何か叫びだしそうになるからだ。「異邦人」の主人公も何か叫んでいたんだ。不条理なんてどこにあるんだ。

取りとめもなく、読経の間、やけになって考えていた。

右後頭部の、かさかさという音は鳴り続けている。

そうだ、死は確実に個に訪れる。逃れられない死。類としての人間は行き続ける。個が死滅するまで。それはそれでそれだけのこと

だ。地球の運命さえもそれだけのことだ。だからどうなんだ。大言言がなんだ。多くの偶然の積み重ねでこの世は成り立っている。しよっぱなが成り行きなんだ。サイは投げられた。さあ、どうする。後はなるようにしかならなかった。

確かなことは、もう母が動かないということだった。

それからしばらく、かさかさ、という音はおさまらなかった。そしてその間に、葬式、火葬、法要、納骨と行事が続いた。ぼくは黙って、言われた通りに静かに従っていた。何かで心が揺れてしまうと、感情が爆発しそうになるからだった。だから静かに、静かに心を鎮めていた。

自分を責める時もあるが、どこか被害者気分で、母が亡くなったのは誰かのせいだ、と思ったりする。母が理不尽に若くして逝ってしまったから、理不尽な思いで誰かを恨んだ。そんな考えは、ほんのちよつと浮かんだだけなのだが、自分がそんな風に感じるのに驚いたりした。

やり場のない思いの、収まる場所が見つからないのだ。

さらにその間、大学受験をして、合格して入学した。

その上、学校に通うため東京の叔母の家に、アパートが見つかるまで、とりあえず居候することになった。多くのことがバタバタと決まって、自分ではできるだけ、余分なことをしないよう気を付けた。頭の隅でかさかさ、と変な音が鳴っている間だけでも。

それがずっと続くとは思わなかったから。

上京して、通学するようになって、ぱたつと音は消えた。

だから、ぼくが歩いて通うようになった一番の理由は、時間がほしかったからなのかもしれない。

第三章 「超研」

第三章 「超研」

高橋さんを見かけたのは、新入生歓迎のサークルブースのなかだった。

もちろんそのときは名前も知らなかった。ひどく個性的な人だなと思った。受付の机を前に男の人と、二人で座っていたけれど、高橋さんは表を呆然と眺めていた。なにか考えていたのかもしれないが、ずいぶん無防備にしているのだな、と感心した。ふつうの女の子ってもっと周りを気にしているもんだ。独特の五分わけで、硬そうな髪を後ろで結んでいた。ぼくの中では、卑弥呼とあだ名がすぐついた。あまり凹凸のない顔つきで、化粧つ気のない顔はすこし陰気には見えたけど、はにかんで笑うと、すごく可愛いのはあとで知った。ただそのときは、目が離れているな、って変な印象を持った。以後そんな印象を持ったことがないから、勘違いなのかもしれない。薄く色のついたワイシャツに黄色い厚手のトレーナー、下はジーンズだった。こんな子も超研にいるんだ、と興味を惹かれたのは事実だった。

どうしようか、迷ったけど、テントのほうへ近づいて行った。そのときちょうど奥の方から守屋さんが現れ、ぼくと目が合ってしまった。「まあ」みたいな口の格好をして、声は出ていなかったと思う。そのままぼくの方へ寄ってきた。ぼくも、観念したみたいな感じになって、中へ連行されるように誘い込まれた。

当然、よく来てくれたわね、と守屋さんは言って、ぼくと、高橋

さんと、黒ぶちめがねをかけた二キビ跡の男、吉田を紹介してくれた。ひどく手なれた感じだった。守屋さんは四年生で、卒業したら高校の教師になると、あとで言っていた。高橋さんは二年生で守屋さんと同じ国文科の学生だった。

吉田は、挨拶したらそのまま本の続きを読み始めた。高橋さんは、特徴のある、はにかみ笑顔をしてぼくを見ていた。ぼくは薄手の綿のコートにチノパンツ、ウォーキング用の革靴を履いている。ぼくもなんだかずっと高橋さんを見ていたのかもしれない。

それに気づいて、「靈魂とか信じていないのですけど」

と、言って失敗したなと感じた。これでは、入部の許可を求めているようだ。守屋さんはまたしても待つていましたと言わんばかりに、説明を始めた。

「私たちは宗教団体でもなんでもないんだし、信じるとか信じないはどちらでもいいの。最初から信じている人は、それなりの経験があったわけだし、超常現象を懐疑的に見ていったって構わないのよ。要するに変な先入観を持たないで、素直に調べていけばいいの。科学で実証できないことって一杯あるものよ」

「はあ、そうですか」

と、ぼくは元氣なく言つて、なにげなく高橋さんの方を見た。高橋さんは立ったままぼくらの話を聞いていたわけだし、何か言ってもよかった。でもまた、あのはにかみ笑顔をただけだった。まあ、それはそれでよかった。ぼくは遠くを見るように二人を見比べていた。

「テレビの番組の検証をするから後で参加してみない」

と言つて守屋さんは、せかせかとテントを出て行くとしていた。「では、よろしくね」

「じゃあ、部室で」

と言つたのは吉田だった。なんだかびっくりして振り向くところらを見て、

「缶コーヒーあるけど」

と机の下の方からごそごと、取り出してきて渡した。これではめでたく、超研の部員になったようだ。学部とかどこに住んでるとかみたいな情報を交換した。吉田は古株みたいだけど、新入生だった。口の前でちょこちょこしゃべるから軽薄に見えるけど、かなり物知りみたいだ、いろんな意味で。

高橋さんはおつとりと話す。早く話すのは苦手みたいだった。吉田がからかって、照れて笑うだけだった。どこか超越してる。こういう人って、怒るとどうなるのだろう、と意地悪な想像をした。部員は三十名ほどいると言う。ただ、それは活動費の関係の公称人数で、つねに会に参加しているのは十名ほどらしい。高橋さんも、そのぐらいの人しか知らないと言っていた。だいぶゆるい結合みただ。そういうものなのかもしれない。高校のころは、運動部だったせいなのか、参加しなければ、休部か退部になったから大違いだ。後になつて、部室で「きみだーれ」みたいに見ている人が何人かいた。だいたい先輩でときどき、一年に数回、部室に顔を出すようだった。

なんとなく、雰囲気はわかってきた。

その男の人が入ってきたのに気づかなかった。それだけ話に熱中していたのか、その人の影が薄いのか、実際は映画スターのような風貌なのだけど、あまり存在を主張してこない。すうーと移動する。色白で細みな、背は飛びぬけて高くはないが、モデル系のハンサムだった。

「こんにちは」

と、高橋さんがあいさつした。ちょっと感じが違う。吉田とぼくで会釈した。

「君たち新入生」

と訊くので、高橋さんが紹介してくれた。彼は「超研」の会長で四年生の山本さんといった。やっぱり会長かな。守屋さんは相撲取りはかわいそうなので「こけし」にした。当然高橋さんは卑弥呼。あだ名をつけるのはぼくの趣味だった。

「そろそろ部室も片付くだろうから、ここを仕舞って移動しようか」
会長はぼくたちを呼びにここへ来たのだ。持っていくのは折りたたみのいすと缶コーヒの箱だけだった。

卑弥呼は会長を意識している。ともいえるが、卑弥呼はだれをも意識している。そして、意識していないときはだれをも意識していないのだろう。

吉田はぼくにずっと話しかけていた。さっきはずっと本を読んでいた。熱中するタイプ、あるいはマイペース。はたまた不安なのかもしれない。彼の態度からは想像しにくい、かなり周りを気にするのか。

確かに少し不安はある。悪の巣窟に踏み込む感覚だ。そこで何が待っているのか。

「部室は行ったことあるの」と、ぼくは訊いた。

「散らかってたので、今日片付けたらしいよ」

これで返事になってるのだろうか、微妙。でも再度確かめるほどではないと思って黙っていた。そうしたら吉田も黙って、そのまま部室に着いた。先を歩いていた二人が戸を開け、入って行ったのでぼくも続いた。

大きな机を挟んで、六、七人が座っている。守屋さんともう一人が奥で何かしていた。会長はぼくたちを座らせ、守屋さんたちにも座るように言って、みんなが座り終えると、

「では、研究会を始めます」

と宣言した。それから自分は持ってきたいすに座った。すると、守屋さんが立って、

「新入会員が二名来ています」と、ぼくらを紹介して、

「ではこれからビデオを見てもらいます。その後これについて討議をします。そのとき簡単な自己紹介をしてください。まあ、顔合わせみたいなものですから」と言ってスイッチを入れた。

テレビ番組の録画のようだった。遠隔透視や犯罪捜査に協力する超能力者、はたまた災害の予言をする人、そういう人たちの特集だ

った。どこまでが事実なのか、だいたいぼくは懷疑主義者だから、テレビそのものにも疑問を持っていた。きっと編集されたり、スポンサーの意向が入ったり、やらせ、誘導。なんでもありだ。報道ですら、偏向があるんじゃないかと思っていた。

三十分ぐらい皆おとなしく、雑談もしないで観ていた。

「じゃ、止めて。意見を聞いているのか」

会長が言って、守屋さんがビデオを止めた。目で促されて、向かいの手前の人から話すようだった。かなり長髪で、どこかミュージシャン系の男の人が口を開いた。

「平尾です。よろしく。まあ、有名どこのエピソードだけど、可もなく不可もなくかな。予言の証拠を残そうというのは、目新しいけど、確率の問題だね、それは分からない」

「どうなのかしらね」

と、口を挟んだのは、隣に座っていた、女のひとだった。ほんとに女の人で、化粧といい、服装といい、この部屋では不釣り合いだけど、たとえばホテルのロビーだったら、決まっていたに違いない。

「ああ、吉沢です」

こちらの方を見て言った。これは新入会員歓迎会なのかもしれない。

「あんな予知夢を毎日見てたら、参らないかしら」

本当にげんなりしたように付け加えた。

次の番は高橋さんだった。

「みなさん、こんにちば。高橋です」

吉沢さんに比べたら、少女のようだった。

「私は犯罪捜査に協力した話に興味があります。どう見えてくるのか不思議ですよ」

「それは被害者から情報を得るのじゃないかしら」
守屋さんだった。

「イタコみたいに、死んだ人の話を聞くのよ」

本気にそう思っているのだろうか。超能力捜査官はフィクションの世界にしかないのじゃないのか。そのとき、会長がパンフを配り始めた。会長は、配り終わると、抜粋して読んでいった。

「遅れましたー」

と入ってきたのは、かなり老けた印象の、（なぜなんだろう）男の人だった。その後、ベレー帽をかぶった高校生と思われるような、ひどく若い女の子が続いた。

「部屋の前でウロウロしてたから連れてきたよ」

とその男の人が言って、ずかずかと奥に進んでいって、こけしと卑弥呼の間に腰を下ろした。

女の子はきよるきよると見回していたけど、これも手前のベンチに、ということはぼくの隣に座った。

「それでは…」と、会長はなにもなかったように話の続きを始めた。「…以前付き合っていた子なんだけど、交通事故で、かなり厳しいという話を聞いた後、その子に街で何度も会った。そんなことありえないし、いや、いやと考えるのだけど、それも不思議と、ある一定距離以上は近づかないんだ。どういことかと言うと、近づこうとすると見失っちゃった。その距離なんだよ。それが、こつちとあつちなのかな、とも思うんだよ。もちろんそれをいろいろに解釈はできるんだけど、たとえば、錯覚ということはあるのは分かるでも納得しないんだな」

会長の話には、かなり思い入れがありそうだった。

「虫の知らせみたいのもありますよね。胸騒ぎみたいのがあって、実際友だちなんですけど、あれ、みたいに感じる 때가あって、しばらく会っていないから訪ねてみるかって出かけていたら、鍵がかかったまんまなんです。チャイムならしても、ああいうときって不思議ですよ。変だ、ってすぐ感じるんですよ。状況的にいえば友だちの家を訪ねて、呼び鈴鳴らしたら誰も出ない、ということであれば、じゃまた今度となるはずなんだけど、絶対いる、みたいな胸騒ぎ。悪い予感もして、結局的中しちゃってますけど、管理人さん

と。その後の話はしたくないんです……」

貴婦人はかなりさばけた感じで体験談を手を振りながら話した。指揮してるみたいだ。

体験になってしまうと、その人の問題のようで、傍から何とも言えない雰囲気になってしまう。錯覚だよ、と言われても——って感じだよ。多くの人がその手の体験をしてることになるよね。

思い出したように「こけし」が

「あ、斎藤さん」

と、立ってさっき来た女の子を紹介した。

その子はピクって立って、

「遅れてすいません。斎藤です、よろしく」

それから自分の説明を始めた。どこに所属して、どこ出身で、どこに住んでいる。

たぶんそういうことは大事なことなんだろう。ミュージシャンが何か言ったが良くわからなかった。合いの手をいれただけなのかもしれない。

奥に座った人は木村さんで、ぼそぼそと自己紹介した。この人は完ぺきに「長老」だよ。

「このなかで、超現象を信じてる代表は私と守屋さんだから文句のある人はどんどん突っ込んでください」と、にこやかにあいさつした。

それまできよろきよろしながらも黙っていた吉田が、高校生（実際は違う）の方を見ながら、立ちあがった。それから周りを見回して、

「吉田です。今日は歓迎会ありがとうございます」

えっ、代表？

まあ、ぼくは柄じゃないし、気後れするわけじゃないんだけど、無口というか、あまり社交的でないというか、初対面で親しく口をきくっていうのは得意じゃなかった。よく言えばシャイっていうことなんだ。さすが顔を赤くするってことはなかったけど。なにか殻

のようなものがあって、それを打ち破れない。自分でも克服したいとは思っているんだ。でも他人のことは信じられない、というか、打ち解けないんだな、これが。格好つけすぎで、身構えているのかもしれないな。でも、ミュージシャンのように、成り切っちゃう勇氣もない。あれはあれで恥ずかしい。だからどっちつかずで彼女もできない。要するに自意識過剰なんだよ。自分ではそんなにみてくれにこだわっているのじゃないんだけだな。

吉田の話は上の空で全然違うことを考えていた。

「仲良くやっていきたいので、よろしくお願いします」

吉田はうまく、まとめて話を終えた。けっこう、やるな、吉田。得点ゲット。だって、高校生はかなり可愛い感じだったから。最後に彼女の方に顔を向けてから座った。

ぼくは、まともに高校生の顔を見ていない。隣に座っているからわざとらしく振り向かなければ正面には向かない。なんだか左肩の上の方で彼女を感じているようだった。

それから、二人組の凸凹コンビがやってきた。会長はどこから出てきたのか、緑色の簡単なスツールを二人に勧めて、自分の横に座らせた。背の低い筋肉質でひげの濃い人が宮沢で、ひよろりとして背の高い男が秋山だった。ぼくにはひどく不思議なのだけど、それから彼らに何度も会うが、一人のときを見たことがない。たぶんすごく仲がいいんだらうけど、男女間なら許せる気がするが、（許すとか別にそんな資格ないけど）でも反対に、手をつないでないのを良しとするのだらうか。

そういう気分って、確かにあることはある。安心感や信頼感が基になっているんだらうけど、凭れあっている感覚が心地いいんだらうなって、思う。たとえば、貴婦人とミュージシャンは恋人ではないだろう。それは、セクシャルな関係はあったかもしれない。でも、親密な関係が見られない。もたれていない。（ように見える）そういうのは恋人とは云わないような気がする。

ぼくは恋人を求めている。でも、すごく怖いんだ。

二人組は二人で遊んでいる。黙ったまんま手を動かしたり首を動かしたりしている。小学生みたいにいるさい。自覚してるみたいで、会長が目をやると動きを止める。いつもそうなので会長はわざと自分のそばに座らせたのかもしれない。守屋さんの促されて小さい方が話し始めた。縄文人って感じだよな。大きい方は完璧に野球のファーストタイプ。左利きなら、なおいいよ。「ファースト」と「縄文人」じゃ釣り合いがとれないか。縄文人のセカンドだ。

「人間は太古から死者の霊を弔う、ということをしていました。それゆえ、それが最初の宗教だともいわれています。それで、この霊を信じるか信じないのかが一つの境になる、と私は思っんですよ。ただ、日が東から昇ると表現したから天動説を信じていることにはならないように、そんなに神経質になることはないですよ。初詣や墓参りに行ったところで、迷信を信じているとか非科学的とか言われることはない。日本において許容されている常識がある。あるいはある地方で。それを文化というのではないのかな、そんな風に私は思うのですが」

ひどくまともなことを云ってるのでびっくりした。でも、相変わらずファーストは足でちょっかいを出している。それを見るとひどく疲れてくる。

少し伸びをしたら高校生に触れたようだった。断じて意識的にではない。

ふつつに、高校生は、なあに、という感じで振り向いた。ベレー帽というよりハンチング帽を深くかぶっているみたい。髪をアップにしているだけでショートってわけじゃないのかもしれない。

やっぱり美人だな。派手な装いはしていないけど、決まってる。彼女はぼくを一瞥して、興味なさそうに前に向き直った。さっきから気になってるのは長老とミュージシャンが、立て続けにタバコを吸って部屋中がもうもうとしてきたことだった。貴婦人に目と手で合図をして窓を少し開けてもらった。

外は暗くなろうとしている。そのぶん裸電球が明るく思えてきた。人里離れた、山小屋にでもいるようだった。外はしんとして、物音も聞こえない。お腹すいてきたな、と急に思った。

「最近、都市伝説とか興味あるんですよ」と、ファーストが話している。

「フリーメイソンの陰謀とか、面白いですよ。どこまで本当かなとか思いますけど」

なるほど、そっちの方が。ぼくにはフリーメイソンとロータリークラブの区別もつかないけれど。

すべての人に「体験」があるようだった。

それは、その人も否定することができないのだ。本当だったら、そんな記憶は消してしまった方がいい。でも、戻ってきてしまう、そんな記憶なんだ。

高校生はUFOを見たと言う。それは圧倒的で、眼前に飛び込んできたそうだ。玄関を出て、外を見たとき光に目がくらみ、その時はつきりと上空に円盤が見えたと、茫然とその物体を見送ったんだと。

元来、神秘体験というのはそういうものだろう。それがなくては悟りは開けないらしい。解脱とは、そういうことを指すんだろう。でもぼくには関係ない、そんな経験もないし、これから先もそんな経験をしたくもない。

夜になって、腹もすいてきたらしく、みんなで駅前の居酒屋へ行った。適当に頼んで、ある程度腹にたまるようにした。先輩たちは軽く酒を飲み、我々はウーロン茶とか飲んでいたけど、吉田はがんばりビールを飲みだした。

別にかまわないけど、ちょっと心配。長老は、やっぱり休学とかして、つごう十年近く在籍してるらしい。どうりで老けてると思った。考えてみると不思議に誰も帰るとか言わないで付いてきたんだなー、これってなーに。

もう各々で話し始めていて、大声が飛び交っていた。ほとんど部屋にいたまま座っていたのに移動する人も出てきた。高校生は長老と話をしていた。ぼくは、長老と席を代わって卑弥呼の隣に来た。彼女はサワーを飲んで少し赤い顔をしていたけど、相変わらずあまいな笑みを浮かべていた。

（それって、けっこう和むんだよねー）

「あなたって無口ね」

「えーえ、そうでもないけどなー」

「だって何か話した？」

「そういえば、何も言っていないかな。」

「全然苦にならないし、気にもしなかった」

「それって、変ってるよ」

「でも、不思議体験とかもないし……」

「そういう問題じゃない気がするなー」

何が問題なんだろう、ぼくが打ち解けてないのだろうか。そんなことはないな、自分でわかる。それじゃ、卑弥呼は何を言ってるんだろう。言葉じゃなくて親和力だよな、卑弥呼はいつも和ましてくるんだ。

「わたしはね、不思議な話が好きなの。聞いてるとワクワクしてくるんだ」

へえ、卑弥呼の方が不思議だけどな。どうしたらこんな人になれるのだろうか。

「わたし、この間、一人で神宮のパワースポットへ行ってきたのよ。その後、テレビに取り上げられたらしくて、行列していると云うけど、私が行ったときはふつうに七、八人かな。静かに佇んで、井戸の写真とかほんと音も立てずに撮っていたのよ」

ふーん。なんとなく想像は出来るけどな。

「たぶん、それ夕方でしょう？」

「ええー、どうしてわかるの」

「そんなの勘ですよ」

「そうなんだ。わたしは全然だめなの。うちのマンションにエレベーターが二基あるんだけど、ボタン押してどちらかの前で待っているんだけど、必ず逆の方にくるのよねー」

「それって、ある意味凄いですよね」

「だから母はわたしのことを二択の女王と呼ぶのよ」

「なんだか、楽しそうだなー」

マイナスの札ばかり集めると大逆転のカードゲームってなかったっけ。ぼくもウーロンハイを頼んだ。卑弥呼も飲んでるし、みんなくつろいだ感じになっていた。堀りごたつふうで、足も伸ばせるし、大きなテーブルでお互いの顔も見える。

向かい側で相変わらず二人組が突っつき合っている。少し離れたので気にならなくなった。グループができて、ぼくは卑弥呼とこけし。会長は貴婦人とミュージシャン。長老を囲んで、高校生と吉田ええーっ、吉田って制服みたいな感じなんだよな。暗い紺の上着来てるし、ズボンも折り目ついてるようだし。それでいて、あまり清潔そうにもみえないんだな、これが。ニキビ跡に黒ぶちの細い眼鏡、短い髪。口を尖らして、話しながら舌を踊らせる。やはり制服だな、それも海上保安庁とかの感じ。「海保」に決めよう。

こけしは会計の担当のようだ。ほかの会員のこともあるので、参加者は自費で千五百円、残りは会から出しますので楽しんでくださいーい、みたいなことを言っていた。それでは先に徴収しますので、用意してください。

そのあと、かなりの量の食べ物も出てきて、小皿に分けて食べた。宴もたけなわ、かな。絶頂は下りの始め、ひとしきりつまんだら、貴婦人が帰る、と云うのでミュージシャンが送っていくことになった。

「それじゃ、私も」と、高校生も帰り支度を始めた。

「そう」と、会長が云って、

「じゃあ、頼んだよ」と、ミュージシャンに声をかけた。残った者は、なにか一息ついて、前の話題に戻った。

「そう、本物に出会ったことはないけど、絶対いるはずなのよ。私だって誰かれ信じたりして騙されるのなんかいやよ」

こけしが力説していた。書物によれば、優秀な霊能力者は存在するとのことだ。ただ今見かけるのはインチキが多いということ。宗教的な悟りを開いた人の話。千日修行。肉体を苛めることによって覚醒される何か、というのは想像しやすい。そこから、過激な新興宗教までの距離は、短いかもしれないし、果てしないのかもしれない。

考えと行動の間には溝がある。思いと言葉の間にもだ。なんなくそこを飛び越える人もいるし、その手前で立ち止まっている人もいる。ギリギリのところでは生きている人もいるし、決して近づかずに一生を過ごす人もいる。思いを言葉にして、考えを行動に移せたら良かったのに、と。そのことで後悔するのだけは厭だ。後悔しないように生きたいと、ぼくは漠然と考えていた。

こけしのお話を聞いていたら、そんなふうに来てきたんだ。ぼくは人生を単純に考えていたし、単純に生きたいと思っていた。こけしはいい人だけど、自分を縛っているなにかがあるな。それは、どこからきてるのかな。今はわからない。でも、いつかわかると信じよう。

絶対の壁があるんだよ、と云う人はいる。でも壁に穴があるかもしれないし、実際風でくずれるかもしれない。決まったふうに言うのは止めてくれ。それが、ぼくの精一杯の主張かな。

長老が会長と話し始めたので、海保が寄ってきて、
「あの子、かわいいよね」と、小声で云う。とうぜん高校生のことだろうけど、なぜ、ぼくに訊く。

軽く同意を求めているだけなんだろうけど。

口ごもっていると、

「しっかりしてるし、ここ入ってよかったな」

そうか、そうか。

「ぼく、酔っちゃったんで帰ります」と、皆に挨拶して行ってしまった。なにかこう、とことんマイペースの奴だな。まあ、ちょっと嫌味だけど悪い奴じゃない、気はした。

ぼくは卑弥呼といることで、くつろいだ感じではあったが、そろそろ時間も遅くなったので、お開きになった。

店を出てそろそろ歩きになって、駅の方に向かって行っただ。

さて、どうしようかな。三々五々別れたので、駅前に一人残されて考えた。その道を歩いて帰ろう。ひどく暗く感じたのは、坂道の木が街路灯を遮っているからなんだ。気候もいいし、歩くのにはちょうどいいかな。いつものようにぼんやり考えながら行っただ。というより、人と接触して興奮した神経を鎮めてる感じかな。

夜風が気持よくて、幸せな気分になった。卑弥呼や高校生の話してる顔がスナップ写真のように浮かんできて、カシツ、カシツとシヤッター音が聞こえる。いけない、いけない。夢に見そうだ。黒板消しで拭くように浮かんだ映像を消していく。それが車のワイパーのようになって、（待ってくれ）それじゃ早すぎる。坂道が急で小走りになってしまう。

降り切ってしまうばいつもの道に出てきた。遠くまで街路灯が続いて、道案内をしているようだった。

第四章 部室

第四章 部室

四月も終わろうとしていた。みんなが上着を一枚ずつ脱いでいく季節だった。ぼくは、あの日から超研の部室に、毎日のように顔を出すようになっていた。その分、大講堂の講義には出席しなくなった。ただ演習と語学の教室だけは通っていた。

部室の主は長老だった。彼は授業に出ないのか、学校に来た時はここが図書館にいた。図書館では、たばこが吸えないから、調べ物を済ませれば、戻ってきて本を読んでいた。片手で本を支えページをめくり、もう片方の指でタバコを挟んでいた。手前の奥の席が指定席で、大きめの灰皿は午後には一杯になった。壁にもたれたり、机にかぶさったり、没頭しながらもよく動いた。そして、思い出したようにぼくに話しかけた。

髪は長めで、痩せていて暗い色の薄手のセーターに土色の上着を着ていた。最初見たときと変わってはいない。こげ茶のコーデウロイのパンツ。うつすら無精ひげ、まったくのおっさんだった。でもそれほど不潔っぽくはない。

学校には慣れたかいか、学食はなにがいいとか、そのとき浮かんだことばを投げ出すだけだった。

ぼくがまともに話せるとは思っていないんだ。まあ、その方が余計なことを訊かれたり、詮索されたりするよりはましだった。だから、二人だけで部室に何時間かいても、お互い気づまりすることもない。

煙いだけだった。ぼくは部屋に入るとすぐ窓を全開にした。初めは開けていいですか、とか開けますよとか、言っていたけど、それとも言わずに黙って窓を全開するようになった。長老は全然意識していないみたいだった。自分では煙たくないのだろう。窓は閉まっていたり、少し開いていたりしたけど、全開したからといって、嫌そうな顔をすることもなかった。寒いときは、もうほとんどないけど、それから風が強いときとかは、すぐに細めにした。

ようするに、窓の開閉はぼくの役目になった。それで、ぼくの座る位置も決まった。窓側の手前から二番目、最初の日、貴婦人が座っていた席だ。そういえば、あれから彼女を見かけていないな。

それで、ぼくは何をしていたかというところ、全く長老と同じだった。違いは、タバコの代わりにコーヒを飲んでいることだけかな。お互いに相手の読んでいる本には干渉しなかった。誰かほかの人が来ると、みんなで読んでいる本の話はしたけど。

それに長老は、あー、とか、あ、う、とか、よくひとりごとを言った。それも意識してないようだった。気がつくと、ぼくが初めてそこにいたかのように、にこにこした愛想のいい顔で、食事にでも行こうかとか、お茶でも飲もうかとか言うのだった。

部屋のカギは簡単な数字を組み合わせるタイプのだから、部員だったら誰でも開けられた。御苦労だった。596番。苦労して入っても持つていく物はほとんどない。私物はないから、椅子ぐらいかな。ロッカーらしきものの中はガラクタばかりだ。そういえば掃除道具が入っていたか。

あと、意外だけど「野球部」の二人はよく顔を出した。授業が別々なので、ここで待ち合わせて、どこかへ出かけたり、次の授業まで時間をつぶしたり、相変わらず、じゃれ合っていた。スキンシップなのかなあ、恋人が手をつないだり、腕を組んだりするのと同じなのだろう。結論的にいえば、彼らは愛し合っている。

別にそのことに興味はないけど、そうとでも思わなきゃ、耐えら

れない。それであれば許そう。傍目も気にせず、いちゃついている男女はよく見かけるから。それを怒ったり、文句を言ったりするのは、カッコよくない。何もせずに見ていれば、カッコ悪いのはそっちの方だ。おめでとう、仲良くやってくれ！ ちよっと、妬いているようにみえても、そんなこと全然ないからね。前にもいったけど、ぼくは単純に生きようと決めているんだから。

たとえば、高校生と海保がそんなことになったとしたら、ああ、考えてもイヤだけど、ぜったい妬くよ。態度、行動は同じでも、はつきり妬いていると宣言するよ。その可能性は少ないと思うけどねでも、ぼくは今ただ、見守っているだけなんだ。これはぼくの性格で変えられないんだ。ぼくはぼくのスタイルでしか行動できないんだ。それを認めてくれ、なんて思っただけ。まあ、なるようになるさ。

それとは別なんだけど、そのころから気付き始めていたんだ。超研のメンバーは何か、過去といつたらいんだかわからないけど、心にイワクがついているんじゃないだろうか？ みんな明るくて幸せそうなんだけど、まあ、カッコよくいうと影がある、というかなあ。ふっと、笑いの後に間があるような微妙な感じなんだよな。

女の人は、用がなければ、部室にはこない。超研にとっての用とは何か？ まあ、そんな構えなくてもいいんだけど、要するに週一回のミーティング。水曜の放課後、集まって雑談する。まあ、近況報告みたいなものだ。ぼくらがやってもらった、会員の紹介とか、参考図書の紹介。意見発表、体験談。おおむねいつも同じだけど、繰り返しは少ない。

活動は会員の勧誘、これは自治会から出る補助金に絡んでいる。一律のと、会員数があるからだ、という事を知った。文化祭の発表、これは義務のようだ。まあ、活動している証拠提出。あと夏休みの合宿。何か考えてみると、自分たちが強制的に取られている自治会費を分配しているんだよね。

会長は自治会の役員でもあるらしい。それに、もう就活は終わり、上場企業に内定しているらしい。これは、海保情報。その手ことは、やたら詳しい。情報の収集と、信憑性には秀でていると自慢していた。海保でインテリジェンスでもすればいいのに。意外と狙っていたりして。彼は法科だけど勉強できると聞いているし。

女の人たちが溜まっている場所は知っている。学食から少し入ったところにあるオープン形式の会館、要するに、外に面していて据え付けのテーブルとイスの置いてある所。そこで、お茶を頼むかすればずっと粘れる。雨が降っていなければ、外の方が断然気持ちがいい。海保はそっちの方に入り浸りだった。

会長は、どちらにも顔を出す。かれは、映画スターみたいにハンサムだし、人当たりがよくて如才がない。

頭がよくて、行動力もある。だから一流企業に入社できるんだろう。ぼくは、また嘘だ、といわれるかもしれないが、そのことが、うらやましいとは思わない。そういう基準はどこまでいっても、止まるところがない。

降りてしまっているとも、興味がないともいえる。

それとは別に会長は好きだ。そのことを、会長自身そんな大したことだとは思ってないはずだ。そんなこと思っていたら、就職しても大したことはできない。たぶん会長は挫折を知っているんだろう。ぼくの勘なんだけど。

ミュージシャンは監督と呼ばれてるみたいだ。映画、野球、現場、工事。どの監督かわからないけど、ミュージシャン長いから、監督就任。おめでとう！それで、それは、こけしが名付け親みたいだ。けっこうこけしはみんなのあだ名を考えているって。海保情報。

その日、ぼくたち二人は、天気の良い校内を、並んで部室に向かっていた。途中、海保は身振り交じりで、いろいろぼくに教えてくれている。それで呼び名のことになって、

「ぼくって何て呼ばれている」と、何げなく訊いたんだ。そのときはあんまり意味はなかった。

「ぼくだよ」と、海保は即答した。

「ぼく！」

そういわれたときは、ひどいショックを受けた。比較するのは不謹慎だが、思い出したのは母が亡くなったときのことだ。ただあのときは感情を押し殺そうと準備していた。パンチを食らいそうなボクサーみたいに。

そして腹筋に力を入れて、かつ精神を飛ばしていた。拷問に耐えるスパイみたいにだ。

でも今回は不意打ちだ。スナイパーの弾丸は真横から飛んできた。ぼくは、固まってしまい体中が熱くなるのがわかった。

よく、顔が赤くなったり、青くなったりとか表現するけど、まさに今のぼくがその通りだった。

過呼吸って言葉が浮かんた。口に両手をやって包んでから息を二、三回吸った。

このおまじないが利いたのか、落ち着いてきた。

「えー、ぼくってなーに？」

できるだけ普通に聞こえるように話した。通じたとは思わないが、海保は無頓着に言った。

「守屋さんなんか、いつも言ってるよ。さっきも、ぼくに予定訊いとして、って言ってたよ」

「そのぼくが、ぼくなんだね」

「そうだ、きみがぼくなんだよ」

全然笑いもしないで海保は話してた。反対にぼくのほうが笑っちゃった。

「おかしいね」

ショックは収まっていた。ぼくの特徴はすぐ納得しちゃうことなのかな？

じつは海保はほかの事に頭を取られていたんだ。要するに、高校生にデート（一緒にどこか行くことかな）を、なにげなく会話の途中に挟んだら、みんなでどこか行きましようよ、ということになっ

て、連休にピクニックへ行くプランが突如浮上したのだった。そして、そのメンバーを海保は考えていたんだ。

それも、たまたま「こけし」が聞きつけ、まず、卑弥呼とぼくに声が掛かった。男女三人ずつになったほうがいいと海保は踏んだ。

海保は情報通で、かつ策士だった。（今のところは、彼への価値評価は含んでいない）

彼の頭の中は、高校生と仲良くなりたいたいという考えで埋まっていた。彼は、どうしたら彼女に好かれるかを一生懸命考えている。たぶんそれを愛というのだろう。少し邪mana感じはするけど、彼は本気みたいだ。

ぼくにもすぐわかったけど、彼はもう一人に長老を狙っていた。でも、あんまり親しくないのも、ぼくから声をかけてもらいたいんだ。こけしに頼むにはリスクがありすぎるらしい、説明してくれなかったけど。ぼくだってそんな親しくない。いつも顔は合わせてるけど。

それが、相性のいい証拠だと海保は言っていた。

海保は、なんか生真面目な顔で話していたけど、ぼくは頭は上の空だった。実を言うと、その場はやり過ぎたものの、そのころになって、ぼくのダメージは、ボディーブローのように効いてきたんだ。

確かに自分のことを自分で言うとき、一人称に「ぼく」をぼくは使うな。「わたし」と言ったら何か変な感じだ。「おれ」というのは、小さいときは使ったかもしれないけど、ものごころ付いてから、（えっ、これっていつなんだろう）使った記憶はない。

人からぼくなんて言われたのは、だいたいそのころだよ。ぼくちゃんの坊はぼくとは違うんだろうな。どちらにしても子供に使われることがあるよね。でもいつも、ぼくは頻繁にぼくといってる覚えはないんだけどなあ。だからイメージなんだよね。

シヨック！

こけしの頭の中であって、みんなも納得するかもしれない、ぼく

って、どんなキャラクターなんだ。うーん、課題。

まあ、それはそれとして、とにかく高尾山へ行くことになった。ただ、海保の目論みは失敗に終わり、会長が行くことになった。長老は連休に田舎に帰る予定があっただ。その結果、会の主催で行くことになって、

「野球部」のでこぼこコンビも参加することになった。それに、女子の先輩。

長老が、図書館に行っちゃってしまい、ぼく一人残っているとき、がらっと勢いよく戸を開けて、入ってきた。

身体にバネがあるような、元気のいい人だった。

「あれ、だれもいないの」

ぼくの顔を見ながら、そういつてから、ボードに貼ってあった張り紙見つけて、私も行くと、付け加えたのだった。それから胸のポケットからボールペンを取り出して、紙に何か書いた。たぶん自分の名前だな。

「じゃ、よろしくね」

また振り向くと出て行って、勢いよく戸を閉めた。ぼくは茫然として戸を見ていた。そこにその人の影が張りついてるみたいに。

第五章 高尾山

第五章 高尾山

新宿駅東口、交番横、八時集合、八時半出発。

学生は時間を守らない。守らなくてはいけない理由が良く分かっているからだ。このスケジュールを見て、八時には誰も来ない。ふつつ、八時半ごろから人が集まり、人がそろるのが九時、出発は九時二十分と読まないと、ツアコンはできない。（ツアコンになる必要はないけど）

べつに一刻を争うわけでもないし、遅れたから不都合であることもない。だいたい用のある人はいないのだから。時間を押して行けばいい話だし、極端に言えば次の日になったっていい。さすが、女子はそうもいかないだろうけれど…

でも、ぼくは八時には新宿に着いていた。（これって、ふつうの所ではすごくふつうのことなんだけど）交番と集合場所と、誰もいないのを確認し付近を歩いた。まあ、新宿が珍しいということもあったけれど、時間つぶしかな。

集合場所で待っているのは、ぼくの美学には反した。

でも十五分ぐらいして戻った。卑弥呼とこけしが来ていて、こけしはご立腹だった。あいさつしたけど、口をちよつとすぼめただけだった。八時集合なのに誰も来ないのどういうことなの、って顔してた。何も言わなかったけど、いらいらモードがめらめらと燃えている。

卑弥呼は相変わらずだ。ぼくが来たら花壇の淵に腰かけた。ぼく

も隣に座った。

「天気、よさそうですね」

「そうね、よかった」

短く会話して前を見ていた。どちらかといえば、太めのジーンズに薄い色のシャツ、暗めのブルゾン。いつも同じ印象だね、卑弥呼は。今日は底の厚い靴はいてる。こけしはまず、登山帽が似合ってる。ベージュ系で統一して、相変わらず、頬が赤い。登山用のリュックを背負ってれば、かなりの山に登れそうだ。

会長が来て、こけしは落ち着いたみたいだ。ようやく腰を下ろした。高校生と女の人、（菅原さんとわかった）が相次いでやってきた。

「ごめんなさい」

と、高校生はみんなに謝ってた。

「一本乗り遅れちゃって」

え、えっ、その格好、っていうほどぼくには強烈だった。すごく短いひらひらのスカート、ひだ襷入ってるし。下には黒いタイツ、ちよつと厚めの。なんとか、って云うんだよね、忘れちゃたけど。脚きれいなんだな、膝まっすぐだし。青い薄手のトレーナーに、靴はグレーのズック、リボンついてる。

なんだか、ため息でる。時計を見たら九時少し前だった。ゆっくりと、海保登場。どっかで見てたようにだ。

（絶対先に来ていた）

一番遅れてきたのは野球部の二人だ。お互い突っつきあいながら。「そろつたら行こうよ」

と、ファーストが言った。

彼は、たぶん昨日の服をそのまま着ているだろう。細めのパンツにカーキ色のトレンチコート、しょぼくれた探偵みたいだ。通勤用の革靴はいてるし。その実、外見と中身が全然違うんだよね。セカンドは作業着タイプ。いつもジャンパー着てる。

会長が、本当のツアーコンダクターみたいに行程を説明して、みんなを先導していく。私鉄で行く方が早くて、安いらしい。新宿の地下街を歩く。一人では迷うかも。シルバーのウインドブレーカーにブーツタイプのトレッキングシューズ。やっぱり会長は決まっている。

休日の午前中の構内は空いている方なんだろうが、電車がちょうど発車するところで、慌ててみんな乗りこんだ。そのままベルが鳴って出発した。

固まるでもなく、離れるでもなく、ばらばらっと広がって後部の車両に収まった。電車の中で、真剣な話ができるのは恋人同士ぐらいのものだ。当たり障りのない、聞こえても聞こえなくてもいい話を野球部がしていた。

まだみんなエンジンがかからない感じだった。騒音の中、大声で話すエネルギーが足りてないのだ。どこかまだ眠ってる。浮きつきはしているんだが、セーブしてる感じがな。海保はやっぱり高校生の隣に陣取り、何か話しかけていた。

ぼくは吊革にもたれて、目をつぶった。

「きみって、足速いでしょう？」

ん。ぼくに訊いてるんだよね。

目を開けて振り向くと女の人がいた。

「はい、でも県大会では予選までですよ」

確かに遅くはないけど、選手じゃない。

「そう、もうやってないんだ」

「もともと、陸上やってたわけじゃないし……」

「まあ、そんな気はしたけど」

えっ、どういう意味？

「菅原さんはどうなんですか？」

とりあえず、振ってみる。

「わたしは現役、でも大会にでるとかじゃないけど。ジョガーって

「いうやつ」

「あー、そうか。ぼくは歩くだけですよ」

「じゃ、ちょうどいいじゃん、ピクニック」

目いっぱい明るい笑顔だな。たぶんからかわれたみたいだけど、気にしなかった。ぼくの今履いているウォーキングシューズは、正規品で、清水の舞台から飛び降りるつもりで購入したんだ。（表現、古いなあ）

高校生のときは、そのメーカーの廉価品だけど、シューズを履いていた。少しこだわりがある。

ジョガーの人と同じマークだ。気づいていたのかな。

でも山道では、ジョグシューズは底が柔らかすぎる。

ぼんやりと、ぼくはそんなことを考えていたけど、電車は穏やかな日差しの中、快調に進んでいた。いく駅かに停まり、何度か人が乗り降りして、一時間もたたないうちに高尾山口という駅に着いた。思ったより早く到着した気がした。遠くに感じていただけなのだろうか。

これから歩きだすという。リフトやケーブルカーはあるらしいが、若者は経費節減、体力勝負。一時間半で頂上に到着らしい。そんだけ、と思うか、そんな、と思うかはその人次第。

覚悟を決めて歩きだした。ただ、ぼくの考えは狂っていた。まず、山道は全部舗装されていた。それに、かなりの人だ。原宿と変わらない。

それでも、坂道は坂道だった。遅れる人が出てきたので20分くらいして休憩。少し汗も出てきたが、停まると涼しい。道を外れれば山は深い。青葉が出て色鮮やかだった。当然二人組は遅れている。洩れ聞けば、きのうは飲みすぎたようだ。まあ、急ぐ気もないらしい。それは、高校生も同じだった。

これはペースの問題なんだな。別にぼくらは急いでいるわけではない。それについて行こうかな、と思ってるのが卑弥呼とこけし。

会長が先導で、ぼくとジョガーが並んでいる。海保は高校生に付いている。それはそれで役には立ってる。しんがりは重要な任務だ。野球部は放っておいてもいい。いったい、何が目的なのだろう。二人で映画でも観ていればいいじゃないか。そうも云いたくなる、彼らを見てると。

でも、ぼくは彼らに敵対的であつたわけじゃない。それは少し気に障るけど、直接不満を言ったり非難したことなんかない。実際、話す機会もあんまりないんだ。だから遠目で、彼らを見ていたのに過ぎないんだ。

会長が野球部に一緒に歩くよう勧めた。それで、こけしと卑弥呼が先頭になった。ジョガーは駅の所で待ってるから、と先に行ってしまった。そこまで二、三十分らしい。ぼくは、一瞬どうしようかと思ったけど、卑弥呼と並んで行くことにした。ペースはかなりゆっくりになつて、ほとんど一団になつていた。

「あの人変わってるわよね」

こけしが、バタバタと歩きながら云つた。ジョガーのことだな。

彼女は七分の細いパンツにＴシャツ、ジャケットという格好で、飛ぶように行つてしまった。

「いつも走ってる」

うーん、なんとも言いようがない。ぼくにあえて答は求めているようだった。卑弥呼はこの手の話に口を挟まない。なにか云われれば、あのあいまいな笑みを浮かべるだけだ。きっと、こけしも、ただ言つてみたただけなんだ

「確かに」

と云つたのはセカンドだった。みんな一斉に振り向いた。彼は髭も濃いいけど、声も低くしびい。

「いつも駆けてる」

ファーストは会長と並んでる。その前を高校生と海保が歩いていった。駅までの道はかなり急だった。息が上がりそうになりながらも、

やり過ごす、ほとんど平らな道になった。これが、リフトやケールカーの料金なのだ、と妙に納得した。後で聞いたらケールの勾配は日本一であるらしい。いつの間にか先頭に立っていて、遠くで手を振っているジョガーが見えた。

近寄りながら、ひとり言のように呟いた。

「けっこう、きつかった」

膝を伸ばしながら歩いていった。ジョガーはぼくの言葉には反応しないで、遠くを見ていた。展望台の前だった。

ようやく落ち着いたらしく、息を整えながらみんな歩いてきて、そこに集まった。見渡せば、山々に町のパノラマが広がっている。

「上に上がるとレストランがあつて、その無料展望台がスポットなんだ」

会長がみんなを見回して言った。

「夜景が素晴らしいんだけど、みな迷うらしいよ」

なんかよく分からないけど、会長に従って歩き始めた。確かにここに夜来ようとしたら、一度にはこれない気がした。迷う、というのはわかる気がする。

三階になるのだろうか、すごく広いスペースが展望台になっていた。あんだけ人がいたのに、ここにはまばらな人しかいない。絶景というのだろうか、夜景ゼったい素晴らしいだろうなと、思う。

彼女と二人でこんな景色を眺められたら、なんて素敵なんだろう。きつと、会長はその経験があるんだな。会長の彼女は、いなくなっただよな。どこかへ行ってしまったのか、亡くなったのかかわからないけど。ええっ、なんて言っていたのかな。町で彼女に似た人を見かけるだったっけ。

ピンと来たんだよね、会長は恋人を失ったって。それが、ひどい痛手になっている。

「彼女と来たかったな、みたいに考えてるんでしょ」

いつの間にか隣に来て、ジョガーがからかった。

「いいな、とは思っけど彼女いませんし」

「やっぱりね。そんな感じするよ」

へー、そうですか。ぼくは、無視して周りを見渡した。卑弥呼がぼつんと、一人だったので寄って行った。

「会長って、彼女いないんですか」

卑弥呼はぼくを見て、にこつと笑った。

まさか、それはないよね。わたし、私みたいな感じだったから、びっくりした。ぼくは、彼女の眼が離せなくなっていた。目を少し押し開いて、無言で問いかける。

それから、目を流して会長を見るふりをする。パツと目を戻して、彼女の目を見た。それから、うん、と口を引き締める。彼女は、目蓋を一度ゆっくり閉じて、目を逸らした。

それって、はい、でも今は話したくない、って云う意味なのか。見当違いだったりするからなー。

そのまま、彼女の見ている方を眺めた。あれって、新宿。砂浜にうち上げられた砕けた貝殻のように、青い空の下に、広がっている高層ビル群。小さいけど、確固として妙に現実感がある。ちよつと卑弥呼のこと忘れて見入ってしまった。

「やっぱり、すごいね。夜、来たらよけい感動するだろうな」

卑弥呼の方に声をかけてみた。

そのとき、「行くよー」って海保が呼んだ。

海保の手提げの中には食料と飲み物が入ってるはずだ。山頂に着いたら宴会かな。会長もなにか下げてるし、いままで気付かなかったけど、そんな気がしてきた。

ファーストはペットボトルの水を飲んでる。少しお腹もすいてきたな。出かける前に、こけしが水筒の麦茶をくれた。

しゅっぱーつ。

これから観光のメイン、いままでは眠気を覚ます準備運動。門をくぐれば、高尾山薬王院の参道になる。赤い燈籠がずっと続いている。両側は新緑の木々が並んでいた。たぶんその奥は深い森にな

っているのだろう。

緩やかな坂をだらだらと上りきると、さっきの門とは違ってどっしりとした門が現れた。みな一団となって、わいわい云いながら進んでいく。

大きな声を出しているのはファーストだった。出だしの坂のときは、青い顔をしていたが、今はだいぶ元気が出てきたらしい。きのうの酒の話をしているようだ。みんな大きな声で笑った。

ぼくは先頭になって、ジョガーと並んでいる。彼女はあっちへ行ったりこっちへ来たり、たしかに飛び回っている。道は広いので、ぼくらも広がっていた。門のところは階段になっていて、行き違う人がいる。外国の人も多いな。日本の山は神聖なものと思われていて、そのものを信仰したり、そこに籠って修行をすることによって、靈験を得る修験道が仏教と結びついて発展している。もちろん高尾山もそのうちのひとつで、本堂には薬師如来と飯縄大権現が安置されている。まさに神仏混淆、このほうが落ち着く気もする。高尾山薬王院は成田山新勝寺、川崎大師平間寺と並んで真言宗智山派の三大本山になっている。

でも、この「いづな」権現はなかなかの曲者だ。

イイツナはキツネの一種。北国にいて、全長14～26cm、尾長1.6～3.5cm、体重6～25g。雌は雄よりやや小さい。夏は背側が茶色で腹側が白色。冬は全身純白になる。ご多分にもれず絶滅危惧種。

もちろん、ぼくは見たことはない。

ただ聞いたことはある。「いづな使い」こっちでいえばキツネつきかな。でも、いづなは家に住みつくらしい。別名は管狐。関東にはオサキがいるのでこちらには少ない。西日本には犬神がいるし、住み分けをしているようだね。

霊能者や信州の飯綱使いなどが持つていて、飯綱を操作して、予言などを行うのと同時に、依頼者の憎むべき人間に飯綱を飛ばして憑け、病気にさせるなどの悪いこともするらしい。昔は管狐を持つ

てるとされる家は「くだもち」「クダ使い」とか呼ばれて忌み嫌われた。管狐はオサキが勝手に行動するのに対し、主人の「使う」という意図のもとに管狐が動くことが特徴。管狐は主人の意思に応じて他家から品物を調達する。味噌が好きで、これに憑かれると人は味噌ばかり食べるようになり、病気の人は食欲が出て、憑かれると管狐の思いを話すようになる。管狐に竹管から出してほしいとせがまれて竹管から出すと、持ち主の近隣に、農作物を不作にする、病人を出す、機の子を悪くするなどの悪事を働く。

また、天狗に使われていて、これを飼い慣らすことができれば、大金持ちになることができるといわれている。

さて、飯縄権現とは、信濃国上水内郡の飯縄山（飯綱山）に対する山岳信仰が発祥と考えられる神仏習合の神である。

多くの場合、白狐に乗った剣と索を持つ烏天狗形で表される。白狐には蛇が巻きつくことがある。一般に戦勝の神として信仰され、特に上杉謙信の兜の前立が飯縄権現像であるのは有名だ。

うーん、歴史があるな。

ぼくは、烏天狗を睨みながら考えていた。

競走してたわけじゃないけど、ジョッガーと先頭を歩いていて、気付いたらもうみんなは後ろの方になったので、待つことにした。それで、烏天狗とご対面。この権現堂は色鮮やかで、けっこう派手だよ。狛犬みたいに烏天狗は腰に手をやって辺りを睥睨している。ぼくも、腕を組んでその前に立っていた。むかし天狗ちよつと怖かったな。鼻でつかくて、尖っているし、団扇で飛ばされたり、子供はさらわれたりした。

ぼくの実家は長野だけど町だったし、家には仏壇も神棚もなかった。それは郊外の祖父母の家へ行けば、墓参りとか正月とか夏休みとかに、目にはするものだったけど。あんまり拝んだりしたことなかったな。

父親の兄が早く亡くなったということは聞いていた。その人はぼくに似ているらしくて、仏壇の中の写真は、ぼくが見ても似てるかなと思うけど、祖母はよくその話をした。

ぼくが東京へ行くんだと話したら、もちろん誰かから、前に聞いていたんだろうけど、少し涙目だったけど、神妙な顔をして、頑張るんだよ、と手を握ってくれた。

それで、田舎の辻には道祖神というのかな、いろんな石の神さまが祀られていた。そこはいつも誰かが掃除してるみたいで、きれいだったし、野花が飾られてたりした。由来とか由緒とか知らないけど、たぶん村の人を守っているんだと思う。

ようやく、みんなようやく到着。ちょっと休憩だね。あとも少しで頂上だから。顔が上気してる感じ。高校生は色白、赤ん坊みたいなほっぺだね。

あ、そうだ。

思い出したけど、卑弥呼と会長付き合ってるのかな。

こけしも知らないんだよね。感じでわかる。隠してるわけじゃないだろうから、そんなに進展してないんじゃないかな。

こうやって眺めてたら、気付かなかったけどみんなバッグ持ってるんだね。野球部でもセカンドバッグみたいの持ってるし、会長はツアコンバッグかな、四角ながつちりしたやつ。海保はでかいスポーツ用。こけしは大きめなショルダー、女の人にはポシェットみたいなやつ。

何も持っていないのぼくだけだ。通学するする時でも、

ぼくは書類袋みたいなのに詰めて、最小限の荷物しか持っていないかなかったし、今日も必要なものはパンツのポケットにみんな入れてきた。忘れるといけないからいつも数えるんだ。ハンカチ、携帯、財布、キーホルダー。基本四つで、今日はちっちゃなデジカメ。とりあえず、気にいった風景、撮っておこうかなって。

それを、海保に見つかって、記念写真、撮ってよってなった。嫌

なんだよね。ぜったい誰か目つぶってたとか、横向いたとか、うまく写ってないとか言うし、そんな技術、自分にないし、あつたとしてもそのためにはけっこう準備がいるんだよ。そんなにじっとしての絶対イヤなくせして、うまくできてないと文句いうんだよね。でもしょうがないから、天狗の前に並んでパチリ。

人の邪魔にならないように横からまた撮った。そしたらジヨガーが撮ろうかって云うから、大丈夫、タイマーつけて三枚連射でパチリ。これで駄目なら諦めてよ。

あとはワイワイ言いながら最後の坂を上って行つた。奥の院は不動さんなんだね。今いる伯母の家の近くにも大きなお不動がある。あんまり信心深くないんだけど、神社やお寺行くの好きなんだよね。姉に変な趣味とか云われるけど、今日みたいな感じさ、どつかの山行ったりして、樹があつて、古い社や堂があればそれでいいんだ。教えとか、救いとか、ご利益なんかは、あんまり関心ないんだけど、それを信じてた人たちや寺社の栄枯盛衰というかな、歴史には興味があるんだ。

ま、たしかに漫画やゲームの影響もあるんだけど、歴史が好きになつたから、単純にそれを専攻することにした。父親は何も言わなかったが、伯母の旦那によると、いま居候しているところの主人、かれは大手の建築会社の副部長で、何の部かは知らないけど、いつも高級そうなスーツを着て出社する。

伯母にそのことで、ぼくのことを、せいぜい小役人だな、って言つたんだって。超シヨック。

見返してやろう、みたいな気はないけど、こけしが言つた、ぼくちゃんと双壁のパンチだな。副部長が、どれだけのものか知らないし、小役人が悪いとも思わないけど、そういうことの基準があることも理解しておかなくてはいけないよね。まあ、これから誰かが嫌というほどわからしてくれるのかもしれないけど。

ところどころの案内板や、もらったパンフに書いてあったんだけど、江戸の市民にとってお参りは今でいう観光旅行なんだね。メツカの巡礼みたいに伊勢参りは特別な行事になる。それに富士山信仰と不動参り。倶利伽羅紋々じゃないけど、絶大の人氣があつたね。江戸っ子の氣性に合っていたのかな。

とうちゃーく。

最後の坂を登りきれば頂上だった。かなり広い、それに人一杯。デイズニールランドのショーの後みたいな感じかな。人はあっち行ったりこっち行ったり、その中でたくさんのベンチと、広場があつて、そこにシートを敷いて宴会だ。

頂上つてあんまり見晴らしよくないんだよね。目線の所に樹があつたりするんだ。まあ、みんなずるずると座つて一休憩。座りながら荷物を開けて広げ始めた。

ビール、ビールとセカンドが言っている。野球部にはこの楽しみがあつたね。

えっ、だれがクーラーボックス持っていたんだ。

冷えたビールがーダースぐらい出てきた。それに紙パックの日本酒と焼酎。ジュースにお茶、氷。おつまみ、おにぎりに稲荷寿司。ここらへんはコンビニ寄つてたからね、だいたい想像はできた。

ビールは会長の秘密のバッグに入っていたらしい。簡易カップにそれぞれ注いで、かんぱーい。楽しくなるね、ウキウキしてくる。

みんな一息入れてわいわい話し始めた。ぼくはビールに混じつてた缶酎ハイもらつて飲んだ。だいたいいつも端っこ座るよね、それであんまり動かない。隣にジョガーが来てつまみとか取ってくれ。ちよつと届きにくくはあるんだけど、親切だな。なに飲んでんだろう。それになにか考え事してるみたい。ちよつと姉みたいな感じなんだよね。すぐからかうし、上から目線っていうの、そんなに不愉快じゃないけど。芯から嫌味じゃないの伝わるし、たぶん照れ屋なんだと思う。

考えると男女逆転じゃない、ぼくはそんなにヤワじゃないけどな。
「なんか、付いてる」

ジョガーが訝るように訊く。

うん、横顔見すぎてた。じっと見てたわけじゃないけど。

「いや」

洒落たことでも言い返そうとしたけど、口ごもってしまった。

「君のお母さん最近亡くなったでしょ」

何なに、そのこと誰にも言っていないよ。

「君の肩こしに見えていたから」

え、えっ。どういうこと。

急に頭の奥でからんからん、と何かが鳴り出した。

まず、落ち着かなくてはいけないな。

ぼくはジョガーの顔をボーッと見ながら、ほとんど思考停止になったいた。

からん、からんと、ゆっくり、砂漠を渡る風のように、遠くの方

で、なにか鳴っている。

「きみのこと、よろしくって言ってたよ」

これって、当たり前前の展開なの。

「……」

「驚かした？」

ぼくは、正気に返ったみたいに手に持っていた缶を口に運んだ。

なんだか今まで飲んでいた飲み物と違う味がする。ジョガーに気の利いたことなんか一生言えないような気がした。

「そんなタイプと違うよ」

ちよつと弱弱しく、ぼくは抗議した。母はぼくが小さい時は世話焼きぽかったかもしれないけど、中学に入ってから、ぼくが避けていたというか、ほとんど会話らしいこともしないし、どうなったんだろ。

照れみたいのもあるし、構わないで、みたいな感じかな。別にけんかしてるわけじゃないけど、疎遠というとおかしいし、同居している家族なんだから。いま考えれば、絶対自分の方が変なんだけど、当時はそれが当たり前のように思っていた。

母の方も、どう扱ったらいいかわからない、みたいな感じで、ときどき、あんたの家政婦じゃないんだから、みたいなことは言っていたけど。愛情の交換って、ひどく薄かったな。まあ、それは後悔してることもあるんだけど。

「親だもの……」

ジョガーは最後まで言わないで、ぼくの肩の上の方を見た。この子ってちよつと変だね。嫌いじゃないけど。

「母のこと知ってるの」

「ううん、途中からかなー、行っちゃたよ」

「そうか、ぼくには見えないけどね」

「私は、ちよつと目がいいんだ。アフリカの狩人みたいにね」

ああ、それで飛ぶように走っているのか。

音はすぐ止まった。

それから、ぼくは高校の文化祭のとき、クラスで新宗教の研究発表をした話をした。話題はなんでもよかったけど、ジョガーと話があったんだ。彼女の目を見て、手を振ったり、頭を掻いたりして、ぼくは話し続けたんだ。すごく気持ち良かったな。ジョガーも楽しんで、聞いていてくれたような気はしたんだ。

それは、ある宗教団体の青年部の幹部だという子が、石川君だけど、宗教について、特に新宗教をテーマにしようと提案したんだ。カルトに対する好奇心や懷疑やら、入り混じった関心を多くのものが持っていて、クラスでそれを取り上げることにした。日本の宗教の歴史の中で、新宗教を考えてみよう、青年部のいいなりにならないためにも、みんなかなり熱心に調べたり、質問に行ったりした。

神社系の信者数は9500万人になると届けられていた。これが日本で一番の宗教なんだろう。数字は正確さを欠くとしてもダントツの一位であることに間違いはない。日本全国に八万の神社がある初めて知ったけどその頂点は伊勢の神宮であるそうだと。教科書でこの神宮は天皇家の神社と習った気がしたんだけど、変ったんだね。敗戦によって国家の宗教だったのが廃止されたんだよ。それでふうの宗教法人、神社本庁になった。

ぼくなんか、この宗教が一番わかりにくい。天皇や国との関係もはっきりしないし、核持ち込みじゃないけど、秘密にしておこうみたいなことがありそうだし。一神教に対抗して日本の良さみたいな感じで、八百万の神を持ち上げるけど、明治以降、原理主義みたいな神道になって行ったんじゃないかって。それをまた懐かしがってる人もいて、神の国みたいなことを言う政治家もいるんだ。

「それで、その石川君はどうしたの？」

そうか、青年部は影が薄くなっちゃって、大した指導力は発揮できなかったんだ。一応、宗教的関心を喚起したということ自分で納得したのかもしれない。ごり押ししても無駄みたいな、判断力はあったから。浮いちゃうのもまずいしね。

そのあとは、柳沢君の独壇場だったな。

「かれは、剣道部の主将で、強面なんだけど教会の日曜学校へ行っていて、ボランティアでいろんな活動をしているんだ。結局、最後は彼の音頭でアフリカの子供に薬を、みたいなことになっちゃたよ」

「チャリティーか」

「偽善のようでも、抗えないものがあるよね」

「困ってる人、助けたい気持ち、みな持つてるから」

うーん、そこにも宗教の芽ってあるんだろうな。宗教って手あかにまみれちゃってて、純粋な気持ちが濁っちゃうんだよね。女の人に騙され続けて女性不信になるような感じ、経験ないけど。騙すほ

うも、騙される方も何か汚れているような感じだね。自分だけ、清純みたいな気はないけどさ。

ぼくは、ちょっと休憩で辺りを眺めていた。みんなリラックスして開放的になってる。お酒のせいもあるかもしれないけど、明るくて声も大きくなる。でも、天気の良い野外は空に響いていくだけだ。一団になって、声が大きいのファーストだけど、車座っていうの輪になって座ってる。ぼくとジョガー、会長と卑弥呼が横にずれてる感じ。

卑弥呼、会長と話してるね。あんなにいつもは顔が輝いてないよ。いい表情だな。

セカンドが振り向いてジョガーに何か言ってる。

「あっち、行こう」

と、ジョガーが言って二人で輪に加わった。

セカンドとこけしの間はもともと開いていたので、その間へ収まった。高校生は長い脚をきれいに畳んで横座りしている。向かいのファーストの話を聞いている感じかな。海保は隣に陣取ってるけど、話してるのはこけしとだった。

横のグループから音楽が流れてきて、ひどい喧噪のなかにいるようになった。景気がいい感じではあるんだけど。ぼくは、フラフラ立ちあがって、靴を履いて歩きだした。確か来る途中にトイレ見た記憶があった。

女子の方はかなり並んでいた。土産物屋や食堂も何軒あるから、山頂というよりは、町の中の公園と考えたらいいのだろうか。あとで、蕎麦でも食べようってファースト言っていたね。まだ日は高いけど、暮れるのはあつという間だから。

ここ来たことあるかもしれない。突然、そんな気がしてきた。もやもやとして、根拠はないんだけど、情報としても記憶に残っているわけではないけど、何かこの情景が、デジャヴュのように感じられる。

じっさい誰かと一緒に、当然家族と旅行にでも来たのだろうか。それなら姉や父に聞けばわかるかもしれない。

自分の写ったアルバムの風景としても記憶にはない。

まあ、確信はないけど、似たような景色もあるはずだし。それと間違えてるかもしれない。昇仙峡とか。あそこには二度目だったんだけど、思いだせなくて、姉に、ここに似たところあったよね、みたいに聞いたら、前に一緒に来たじゃない、って云われてもピンとなくて、なんかの拍子に記憶が甦ってきたんだ。馬車だったかな。それは絶対見た覚えがあった。

記憶なんてそんなもんだ。小さい時の記憶は思いださないと忘れちゃうんだ。何度か思い出し、そのたびに確認していくと、その記憶は定着する。たとえば、怖い思いをする。それは、ちよつと経っても覚えてるんだ。だからそれをまた確認する。ああ、怖かったなでも、思い出すときに話を作っちゃうことがある。記憶が薄れちゃうから、その時感じたことを記憶に混ぜちゃうんだ。だから、事実と記憶とはだんだん離れて行ってしまう。正確に言えば、そういう場合もある、ということなんだろうけど。男の人と女の人の記憶のメカニクスが違うという記事読んだことあるし。これは、ぼくの考えだけど、歴史的事実なんかでも同じことだね。事実とは何か、みたいな命題にもなる。

そんなこと思いながら戻ってきたら、みんな片づけ始めてる。遅くならないうちに帰ろう、ということになったみたい。

新宿について、飲み直した、とファーストは騒いでる。高校生と意気投合したかな。得意の陰謀論始めてたし。

どうかناとは思っけど、けっこう面白いんだよね。真実を突いてるんじゃないかと思わせる節もあるんだ。節穴という言葉もあるけど。

帰り道は下りだし、のんびり歩いているようでも、来た道だし、すごく早く着いたような気がした。帰り道って予測つくだけ安心するのか。ジョガーは、やはり先行っちゃった。ぼくは海保と並ん

で最後を歩いていた。

女の方はまとまって、会長の後に付いている。その後、野球部。

「なにか、きつかけ掴めたの」

ぼくは、からかう調子にならないよう、気をつけながら海保に訊いた。

第六章 超研の人々

超研の人々

窓際の広いガラス戸を開ければ、狭いベランダになっていて、洗濯ものが干せるスペースがある。そこにアンダーウェアを吊るしながら下を覗けば、線路が見える。レールを挟んで、赤茶色の敷石が帯になって続いている。駅はここからは陰になって見えない。鉄道ファンなら喜ぶのだろうか。そうでもないのかな。とにかくここに決めた一番の理由は家賃が安かったからだ。

連休が終わって、部屋探しを始めた。それにアルバイトも。もとと伯母のところは、当座ということだから身の回りのものの以外、荷物も運んでいなかった。スーツケース一つで上京した。連休中に一度帰省して荷物をまとめて送れるようにしてきた。ワンルームマンションというのかな、住まいを決めたら送るよう姉に頼んできた。といっても、段ボール数箱で所帯染みたものはほとんどない。冷蔵庫を買わなくてはならないだろう。あとはパソコンと寝具一式を送ってくるからそれですべて間に合うはずだった。コインランドリーもコンビニも近くにあった。東京都内なんだから当たり前かな。

初めての一人生活。念願というほどではなかったが、望んでいた生活ではある。人との接触は得意ではないけれど、ストレスになるほどでもなく、伯母の家でも居心地の悪さはそれほど、意識はしなかった。でも解放感は全然違う。この気持ちよさは手放したくないものだった。一人で声を上げたり、逆立ちをしてみた。下着姿でいられる。好きな時に風呂に入って、冷えたビール飲みながら外眺めてたら最高だね。

その生活のためにバイトを始めることになった。本好きだったから、本屋の仕事。物事は簡単に考えることにしていた。週三日。夕方から閉店まで。最初はこんなところかな。面接もあつけないほど簡単だった。店長は履歴書見て、時給とシフトの説明して、いつからできると言った。では、明日から。それで決まりだった。

連休の後、ぼくは引越してバイトを始めたわけだけど、ぼくの生活はそれほど変わったわけではない。ただあの道は通らなくなった。学校を挟んで反対側へ引越したからだ。それにバイトはさらに先の、一駅向こうだったから通る必要がまるでなくなった。それと通学時間が大幅に短縮されたので、部室にいる時間はほとんど変わらなかった。バイトのせいで起きる時間は少し遅くなったけど、そのぶん近いから行く負担は同じだった。そのまま引きこもりそうになるけど、これは大事な習慣だった。生活のリズムといていいのかな、それにそこへ行けば誰かに会えた。そのころにはかなり「超研」に馴染んで、仲間意識があつたから。それも必要なことだった。

ただ、長老が戻ってこなかった。音信不通というわけではないが、向こうに用ができたみたいだった。それで、ぼくが部室の主になつてしまった。相変わらず女子の訪問は少ないけれど、そのぶん男子の頻度は増している。野球部はよく来るし、海保も学校に来れば一度は顔を出していた。海保は高校生のことは諦めていないけど、進展はなさそうだった。

「長い目で考えるよ、卒業までだって四年もある。機会があるかもしれない。今は友達でもね」

それが、とりあえずの海保の結論だった。まあ、至極まともというか、現実的にはそうだろう、とぼくにも思えた。ただ海保の危なかしさは本命は彼女だけど、当面他の子でもみたいなどころが見えるんだよ。それにそれを悪いとも思っていないみたいだし。いいとか悪いとかじゃないのかもしれないけど、どうなんだろう、その人の

考えなんだよね、きつと。ぼくはまだ、その手前をうろろしてるのかもしれない。そこが、「ぼく」の渾名の所以か、と自分で卑下した振りをしてみたりする。実際そんなふうには思っていないけど、進展があつたのは卑弥呼だろう。

最近、学内で会長と歩いてるのを見かける。暖かくなったせいもあるんだろうけど、着るものが軽く明るくなつていく。ダボダボのジーンズもやめて、すっきりした綿パンになった。髪型も少し変わったかな、相変わらず真ん中分けではあるんだけど、髪が少なくなつて軽くブラウン入ったかな。遠くからでもはにかみ笑顔が素敵だ。会長は微妙だよね。もともとハンサムでそういう人って、極端な意地悪か、すごく優しいか別れるけど会長は超やさしいタイプだから、いつもにこやかだけど、面影が端正すぎるせいなのか、寂しく見えるときがあるんだよね。

ちよつと距離を置いているって云うのかな、誰にでも、そういうスタンスではあるんだけど。まあ、いい関係で交際したのは間違いないね。いいカップルだと思うけど。

ジョガーは週に一、二度顔を出すけど長居はしない。部屋好きじゃないみたい。

「表、行こうよ。気持ちいいよ」

と、誘いに来るのだ。そうすれば、読みかけの本をしまつて一緒に、だいたい図書館の前のベンチに出かける。確かに天気の際は木々を渡つて涼しげなそよ風が流れて、伸びをして空を眺める。これってぼくたちのデートなんだろうか。でもあんまりジョガーに女性を意識しない。姉みたいな感じがするからかな。二人で遠く眺めながら、ぼそぼそ話したりする。

「彼氏いないの？」

これって常套手段かな。ぼく自身は単なる興味からんだけど。いつか彼女いないの、みたいに聞かれたお返し。

「うーん、秘密」

そうか、秘密か、と思つて振り向いたらジョガーと目が合った。すぐく、唐突なんだけど、キスしたいナみたいと思った。目から口に視線が移ったの感づかれたよね。そしたらジョガーは背中の方に首傾けた。ぼくとしたら、余計身体が近づいてきたわけでどぎまぎした。

ここで一歩進めば、たとえば肩に手を掛けたりすることでもいいんだけど、何か出来たら何かが変わる。

やあつ、止まっちゃつて、身体が動かない。

「だめ、だめ」

ジョガーが前に向き直つて言った。

それで息を吐いたら、何とか元に戻つた。指が動いた。

やっぱ、だめだよ。心の中で呟いた。

きつとジョガーには聞こえているんだ。

「また、なにか見えたの」

ぼくはジョガーに訊いた。

「キューピッド」

「あの羽の生えた、恋の矢持つてる？」

「そう、ウインクしてた」

「それで、その心は」

もう自棄になった。

「なんだろ」

「へえ、きみにもわからないことあるんだ」

ジョガーは、ちよつと目を見張つて、

「怒つたの？」

と訊いた。ぼくは怯んでしまつて、また口ごもつた。

「いやあ、そんなことないけど」

とにかくどちらにも矢は放たれなかつたんだ。警戒信号ぐらいかな。ウインクなんだから。

そのあと何もなかつたように世間話をした。その中に会長のことが出た。ぼくが聞いたんだか、亡くなつた彼女のことだ。知ってる

の、みたいな感じだと思う。

ジョガーは珍しく慎重な口ぶりだった。迷ってはいないけど、言葉を選んでるようにみえた。

「あれは、一昨年のやはり今頃かな。桜が終わって、新緑が眩しくなってくるころ。雨が降り始めた朝だった。後で聞いたけど、雨の降り始めて、砂やほこりが湿って一番タイヤが滑りやすくなるんだって。曲がり角を減速しきれなかった自家用車のタイヤが流れて信号待ちしていた一団の中に突っ込んだのよ。その真ん中にいたのが彼女だった。それはひどい有様だったらしいの。聞いただけでもむかむかしてきそうだった。それを会長は目撃しちゃったのね。ひどいショックだった」

ジョガーはしばらく目を瞑った。なんだか苦しそうだ。

「待ち合わせ場所のちょうど向かい側の横断歩道だったの。会長には見えていて手をふったら、彼女も気づいて手を挙げかけた瞬間だったの、横から車が飛び込んできた。そのまま彼女は飛ばされて即死だったらしい。苦しまなくてよかったけど、姿が無残だった。車は石柱にぶつかって大破、運転手も即死だったらしい。死んだのは三人、重軽傷者が五人の重大事故になった」

ジョガーは今度は、遠くから眺めている目つきになった。

「会長は駆けつけたけど、手が出せなかったようよ。茫然と立ちすくんでいたんだ。一目見て死んでいるのが分かったほど変わり果てた姿だった。それが二重にショックなの。何もできなかった、彼女を守れなかった自分と、抱きかかえて嘆くことができない自分に腹が立っているの。そこは修羅場では大騒ぎ。彼女の身体に自分の上着を掛けて立ち去ったようよ。それからしばらく会長の姿が消えたの。家族には心配するなと言が残して」

「絵里、彼女の名前だけど、絵里は私が高校のときの同級生で親友だったの。学祭に来てくれたとき、会長に紹介したのも私よ。彼女はすぐに舞いあがって恋をしたのね。運命の人に出会ったと言ったりして、ヴィジュアル的にもお似合いのカップルだった。なんの問

題もなかった。運命が悪戯をしたのね。悲しいことよ。会長も自分の分身を見つけたと確信したはずだから」

「あとで会長がいなくなつたと聞いても私は心配はしなかった。自分が動揺していることを人に見せたくなかったただけだから。それに彼女の記憶を一人で確かめていただけだったから。それがたぶん彼の彼女への弔いだった。追悼の仕方だったの。旅の間、彼には彼女がずっと付いていたわ。でも、それと彼の生活とは違う。彼女を忘れることはできないけど、彼女なしで生きていかなくてはいけないことを彼はそのとき決意したはずよ。そのための旅でもあったの。彼女と一緒に行こうと約束をしていた土地での彼女との決別。それができなければ、彼は死を選ばなくてはならない。それは彼女を喜ばすことには決してならない。それはわかつていたの」

ジョガーは話し足りない感じだったけど、とりあえずって風に話をやめた。切ない気持ちで、ぼくはもう胸が張り裂けそうになっていた。ちよつと喉が詰まる感じだった。悲しい話は聞いていても辛い。二人とも可哀そうだ。ぼくは、なんにも言えなかった。なんだから遠くの方を見ていたけど、焦点は全然定まらなかった。

しばらく二人黙っていた。

風がゆっくり流れて、白っぽい風景が揺れていた。

下を向いたらようやく目の焦点が合つて、アリが動いていた。どこからかまた現れて、手に何か抱えている。よく見るとアリの行列だった。ベンチの奥の方に巣があるみたいだった。

「行こうか」

とぼくは言つて、立ちあがつた。

「よかつたらまた話の続き聞かせよ。今日はもう手いっぱいだ」

ジョガーも頷きながら立ちあがつて、二人でとぼと歩き始めた。日、長くなつたナ。冬の間ならもう暗くなっている時刻だった。あ、そうだ。今日バイトの日だった。

改札の所でいつも別れて徒歩で行くけど、遅れるといけけないので、

バイト先まで一駅電車乗ることにした。

ジョガーの方の電車が先に来て、ジリジリとベルが鳴って、乗りこむジョガーに手を振った。少し沈んでいる彼女見るの初めてみたいで、なんだか心が動いた。抱きしめたいみたいな欲求が起きていた。これってぼくのツボかもしれないナ、彼女がすごくいとおしく思えてきた。

ぼくが勤めている書店は駅ビルや駅前に小・中規模なショップを展開しているチーン店だった。一度も本店とか行ったことないけど、コンピュータでつながってる。問屋、取次っていうんだけど、そこにも繋がっている。その繋がりが形に表れているのがレジだった。レジはもともお金の受け渡しとその記録、販売データが集まるところだけど、人や商品の管理までしている。検品や発注の端末がそこにくっついていていからだった。まあ、近距離の通信機能なんだけどね。

ぼくの仕事は音声付きの自動販売機に似ている。

「いらっしやいませ」

「ありがとうございます」

商業用ことばがあることを知った。聞いたことはあったんだ、後で考えると、でも日常で使うことはない。たとえば、畏まりましたとか、承りますとか。接客のマニュアルがあって、その通りにやることが基本だ。まあ、経営的には当然だよな。それがいいことだと決定されているわけだから。だから従業員としては口癖になるみたいに慣れておかなければならない。店でもやらされ、帰ってからも練習しろってことだから、夢にまで出てきそうだ。

こんばんは、こちらでございますか、……円でございます。……円預かりします、お返しは……円です。ありがとうございます。忙しくなると、レジに入ってから帰るまですうーっとそれを繰り返していなければならぬ。無我夢中って感じかな。

暇なときは本の整理をする。雑誌売り場なんてひどい状態になっ

ている。まあ、棚に詰めすぎてることもあるけど、元の場所に雑誌を戻すことがないから、最初から並びなおした方が早いくらいだ。それにずっしり重いやら、一番いやなのは紙で指を切ったりすること。すごく痛い。女の子なんかは軍手したりしてるもんね。品物は朝来るからぼくらは検品とかはやらない。ただ、検収したままで陳列し残したものがあつたりすると、店長の手伝いをして並べたりする。店長は黙々と自分の仕事をこなしていくタイプで、あまり余計なことを言わないから助かる。小言ブツブツ言われたらけっこう傷つくから。

店長に社員二人で、あとはみんなアルバイト、パート。夕方にはもう帰っちゃうけど、ひどくベテランのパートの人とかいるみたい。おはようございます、というのが、出社の時の挨拶。夜なものに変だとは思うけど、もう定着しているみたい。ロッカーで着替えて、レジに行つてタイムをスキャンする。自分の名札にバーコード付いてるんだ。なんかそんなの不思議。実家の方のバイト先タイムカード、ガシャだったから。

久しぶりに監督が部室に顔を出した。髪がすつきりして、もうミュージシャンぽくなかった。創作の動画、撮るんだって。映画監督だったんだ。いいキャストあつたら出てよ、みたいなこと云つてた。まあ、誰にでも声かけてるのだろうが。そうか、貴婦人はそっちつながりか。

やはり、主演の女優だつて。納得。

「ポルノじゃないですよね？」

恐るおそる訊いた。

「必要があれば、それだけを目的にしてはいないけど」

それが、何か。みたいな感じだった。

不思議少女は触手が動くみたい。感性が豊かだし、それが表情に出るんだって。

うーん、それはわかる気がする。貴婦人はどうなんだろう。

「セックスはどうしてもテーマなんだよ。それなくしてはこの年代を表現できない。それに肉体なくしては映画にならない。肉声の言葉でイメージを膨らませることはできるし、試したこともある。そういうのだけじゃないってことさ」

語りだすと止まらないみたい。熱く、なってくる。

「超研のメンバーを集めてキャスティングして一本映画撮ってみようか。シナリオ考えておくよ」

なんで、ぼくにその話してるんだろう。たぶんたまたまなんだ。

今思いついたのかもしれない。なんか、やっぱり監督は自分で納得してるみたいだ。

「はあ」と、ぼくは一応、先輩だし頷いておいた。

いや止めてくださいよ、とぼくは言えないけど、海保なら、しらっと云うだろうな。そんな気がふとした。

そんなことのあった日、バイト先のレジの前に高校生が立っていた。

こういうとこで見ても高校生は群を抜いている。気の利いたスカウトがいれば声を絶対掛けるよね。もしかしたらそういうこと結構あるのかもしれない。監督それ目当てかなと、ちらっと思った。

手に持っていたファッション雑誌、カウンターに置きながら財布探してたのかな、顔あげたとき目が合った。いらしゃ、ぐらいで声が止まった。

「あ、あつ」

と、高校生は声を上げたけど、本当にびっくりしたのはぼくの方だった。偶然だよね、こういうの縁があるっていうのかな、シンクロニシティ…

いろんな言葉が頭を巡った。すごく嬉しかった。

とりあえずレジの作業は続けながら、声をかけた。

「ここら辺来るの？」

聞いていた住まいの場所とは違ったから。

「うーん。越したの」

「えー、そうなんだ」

なんとなく、閃いて、

「今度、近くで会おうか？」と訊いた。

「連絡して。じゃーねえ」

と、手をばたばた振って高校生は出て行った。

「ありがとうございました」

ぼくは、後ろ姿に声をかけた。一度も掛けたことなかったけど、連絡網みたいな感じで携帯の番号は聞いていた。

仕事終わって歩いて戻ってくる。明治通りを逸れて支線に入ると、途端に暗くはなるけど、街路灯やら周りの灯りで夜道という感じではない。ただ道幅は狭くなる。どこで脇道に入るかは、その日の気分だ。どちらにしても、あの道のようにぼんやりとはしてられない。

安全と云う事を考える。海外で女の人が一人で旅行していて事件に会ったりする。それは不幸なことで同情はするけど、ぼくは怖くてできない。それはぼくが一度も事件に遭遇してないからなのかもしれない。危ないところには近づきたくない。危険と好奇心とを秤にかけて結局尻込みするタイプだ。だからと言って、この道をびくびくして歩いていたわけではない。少し用心していた、っていうところかな。今の住まいがなぜ安いかと云うと、前の道路は車が通れないからだ。今はもう建築基準法とかで、建てられないはずだけど、そんなに古くは感じない。たぶん無許可で改築してるんだと思う。

正味二十分ぐらいで着く。でも考え事はできない。

部屋に入るとほっとする。厳密には違いかもしれないが安全を確保した気がする。服を脱いですぐシャワーを浴びる。温いのから始まって最後かなり熱めの湯を浴びて出てくる。さっぱりして気持ちがいい。こんなことでも幸せと感じる。今日は冷蔵庫から冷たいお茶を出して、グラスに注ぐ。ビールのときもあるけど、いつもじゃ

ない。

中学のときバスタオル型、ローブ派みたいな話があつて、半々だったりした。ぼくはバスタオル腰巻き派つてとこかな。体育の教師がそれはしてはいけない、とかなりマジめに言っていたけど、あれつてなんだつたんだらう。授業に身が入らないで、自分の草野球の試合の調整ばかりしていた人だつたけど。すぐくグラマーな教育実習の先生が来て、ひどく鼻を伸ばしてたな。それは生徒の方も大興奮だつたけど。

あれ、なんだつてこのこと思い出したんだらう。

テレビはないし、新聞もとつてないけど、インターネットの回線つないだからパソコンのスイッチを入れる。ワッツナウつて感じかな。ついでにネットラジオで音楽を流す。防音されてないんで音量は小さめに、と不動産屋に念を押されていた。それなりに世界は動いているようだ。

なんにでも、スゴいこだわりはない。ユルいのかな。最後きて、もうダメみたいになるとしたら、まわりは驚くよね。そのパターンあるかも。自分抜きで進められた話、あとで拒否するみたいな。

何も言わなかったから納得してるんだと思つたと、女の子に言われたような記憶がある。何のときか忘れたけど。大体はそのままずるずる行く。

実を言うと、高校生のこと考えないようにしていたんだ。頭の片隅にはあるんだけど、そのままそこに置いておこうつて感じかな。妄想しだすとマズい。

きのうはカーテンも閉めず、そのまま眠つたみたいで、目が覚めた時は窓は明るかった。どういうわけなんだか電車の音はほとんど気にならないんだけど、微妙に揺れるので、電車が通過してるのがわかる。それも始発とか朝の早い時間帯だけだ。位置的には下の方を線路が二本通っている。最初は驚いたけど、三、四日

したら慣れた。それよりも生活音というのか、水洗の音やテレビの音がかなり響く。ただ単身の人が多いせいか人声はしない。どちらかといえば、ひっそりとみんなが暮らしている感じだった。右隣は二十代の女の会社員ふう。左は三十過ぎの男の人。夜いるのは分かる感じ、でも外で会うことは頻繁ではない。会っても会釈するぐらいかな、話したことはほとんどない。

洗顔したりしたあと、窓を開けて、簡単に掃除片付けしてから、買っておいしたパンとコーヒーで食事。サッシの窓開けるとさすがうるさいので早々に閉める。ネットでメールやニュース、ブログ見てから出かける。

今日は唯一、一限に必修の語学入ってるので、早めに出てきた。

クラスは七割が女の子で居心地は良くない。あんまり馴染めないから終わればすぐ部室に急ぐ。最近は携帯のジャヤーに、お茶かコーヒー持参だった。鍵が開いていて、誰か来てると思いながら入ると、長老が所定の位置に座って本を読んでいた。

「久しぶりです」

と、ぼくはあいさつした。連休前からだから、かれこれひと月になるのか。

長老はやあ、と云って手を挙げた。そして、そのまま目を本に落としたので、ぼくも少し窓を開けて、椅子に座った。すぐ本を読む気にはならなくて、ぼんやりしてたんだと思う。別に何も考えずに目の片隅には長老がいたけど、気にならないというのかな、ひどく落ち着いた感じだった。それからジャヤーからコーヒー注いで飲んだ。もちろん長老はタバコをくわえている。ぼくは腕を組んで宙を眺めていた。この二カ月のことが焦点定まらないまま浮かんでるみたい。それからぼくも読みかけの本を読みだした。

かなり時間経ったのかな、戸が開いて会長が顔を出した。あ、そうだ今日は定例会の日だ。連休後は二週間に一回になっていた。長老は会長と話し始めた。家業を継ぐので学校をやめると云うことらしい。夏休み前に引き上げる。そんなことをぼそぼそ話していた。

「そうですか、それは残念ですが、そういう決断の時期でもあるということですね」

会長はそう言うのと、ではまた、と出て行った。

長老は見送りながら、またいつものように、ぼくに初めて気づいたみたいに、

「食事でも行くか」と、尋ねた。

高尾山へ行ってから初めての定例会だった。

あの時は、新宿へ着いたら飲みなおそう、とファーストは張り切っていたんだけど、みんななんか疲れたね、みたいな雰囲気になって、まあ、それでも去りがたしということでファミレスへ繰り出した。

お腹どうかな、と言いながらもそれぞれ注文を始めた。

ビール頼んだのファーストと海保だけだった。あとは食後のデザート的な注文だった。みんなお酒飲んだ後のけだるい感じで、口数も少なかったけど、元気なのはファーストと比較的こけしかな。二人でほとんど話してた。ある作家の陰謀論だった。世界は少数のグループによって牛耳られていて、それに人々は操られているという話だ。

日本がアメリカに支配されているというのは事実なんだろう。それが比喩的であるのか、暗示的なのか、それともある部分なのか、比較的多くの部分なのかはわからない。

経済的にもアメリカがくしゃみをすれば、日本が風邪をひくみたいなことは少しあるのだろう。いつからだ、といえば、そういう議論は聞いたことはないけど、戦争に負けてからというのだろうか。じゃ、その前はとうしたんだというのは歴史の話なんだが、そこには興味がないらしい。

いつも世界は出来たものとして始まっているんだ。神がすべてを創造した話と似ている。アメリカには進化論を教えるのをためらっている州があるという。人々はまだ宗教を必要とするし、そのため

に戦争をしている。

「与那国島は、沖縄返還のとき、アメリカが防空識別権をそのままにしていたために島の東側は台湾が持つということになっているのよ。日本の国なのに」

「そんなこといったら、まあ極論ではあるけど東京の管制権はアメリカの横田基地がもつてることになるんじゃないのかな」

「それとはちよつと違うと思う」

こけしは結構がんばっていた。

監督くるのかな、と思っていたけどまだ来ない。こないような気がしてきた。女子たちも集まってきて、いつもとは様子が違う。ぼくは窓際の席は動かない。ぼくの奥に野球部を押し込めた。

あとは四月のときと同じかな。やはり自分の指定席であるよね。役割とか、性格とか、いろんな要素絡まってね。ジョガーは一度もこの会に参加したことない。あのあと一度顔出したけど。なんか理由あるのかな。わからない。

「じゃ、始めようか」

と、会長が言って、立ちあがった。

「秋山くんのリクエストで陰謀論やってみましょうか。少しまとめておきましたから配ります」

ファーストって秋山っていったんだね、忘れてたよ。

かなりお勉強会みたいになって、本来そういうものなのかもしれないけど、活発な意見というより課題を与えられて次回発表みたいな感じになった。歴史上の陰謀、あるいはその噂のある事件について。9・11事件と「テロ戦争」。ロスチャイルドとロックフェラ

対象を限定してその事実性を検証する、ことにしか意義はないことを確認した。

それでそのテーマは終わって、こけしから夏休みの活動で、パワ

ー スポット体験合宿の提案があった。

良ければ日程を詰めます、ということ、全員が賛成した。

長老から来月、学校をやめるので超研にも出席できないという報告があった。では、送別会をかねてこれから飲み会ということにすぐに決まった。それで前回の居酒屋へ行った。みんなに親和性があった、坦々と和やかに進んでいた。

実はきょう新入会員が一人来ていた。こけしが連れてきたみたい。坂崎と言っていたかな、一番手前だから、ぼくの前に座ったことになる。目立たない、おとなしそうな感じの男子だった。でも意外とはつきり自己紹介していた。

部室でぼくは、ちらちらという感じで高校生を見ることになった。ちようど視界に入るか入らないかの境だったから。今日は髪を下げていた。少し大人っぽく見えるかな。赤いカチューシャですつきり留めて、白い襟の広いシャツを着ている。上着の肩につやのある髪がかかっている。この間、偶然あったことを素振りにも出さなかった。ぼくの記憶違いかな、みたいに思わせるほどだった。

あれ、どうしてだろう。そんな日が経ってないから、まだ連絡はしていない。次の日にでもした方がよかったのかな。そういうところ、マメじゃないというか、照れちゃうというか、構えちゃうのかな。変なくせかもしれない。

それじゃ、いつ連絡するつもりだったんだろう、と自分に尋ねてみる。だめだ、延びたそばみだいになっちゃう。

ぼくは決意する。今日、必ず会う日を確認する。

ああ、緊張してきた。

あるときぼくはこう思ったんだ。急に引越しが決まるなんて普通じゃない。なにかが起きたんだ。だからぼくに何かができるかもしれない、少なくともその話を聞くべきだ、ってね。彼女もそう言った以上話したいはずなんだ。だって誰もそのことを知らないんだから。まだ大っぴらになっていない話なんだ。

居酒屋へ行く途中、なにげなく話すことにした。着いたら難しい、その後はわからないから。だからうまく間合いを取って近づいた。他の人には気づかれたくない。

でも、そんなこと無理だ。海保は高校生の横、陣取ってるし。だから携帯なんだ。頭ぐらぐらしてきた。なにやってんだろ。けっきよく、そのまま高校生追い越しちゃった。

でも小声で、「きょう電話するよ」って言った。

高校生、頭、動かしたから聞こえたかも知れなかった。

今日の主役はもちろん長老だ。みんなに促されてスピーチというのか、ともかく話し始めた。こけしと卑弥呼の間に座っていた。両手に花かな。

「みなさんも知つての通り、私は一度学校をやめようと思い、九州の実家へ戻ろうとしたのですが、最後、自分を試してみたくなったのです。甘い考えかもしれませんが、私は自分で稼いだことがなかった。アルバイトもしたことがなかった。半分親をだまして、司法試験を受けるからお金をもらっていました。もちろん実家の家業はあるのですが、そこで若旦那、三代目と言われるのはわかっていました。そこから逃げられるのか、逃げてどうなるのか、もちろん私に実力があれば、自分で人生を切り開ければ、それはそれで親も納得したかもしれません。だが、どっちつかずで、それこそ負け犬のように、田舎へ戻ることに私自身が納得しなかった。実際はただ、町工場に勤めただけです。それも事務職でした。本当にやっていく気があるのか、面接のときに何度も確認されました。私なりの覚悟は伝わったのか担当の部長は私を採用してくれました。そして彼の下で働くことになりました」

「携帯電話の部品の製造と修理をしていました。下の作業場には二十数名の工員とそれもほとんどパートの女子でしたが、階上の一角

で私は仕事をしていました。手とり足とり工程や機械の説明を受けることから、会社全体の経理、庶務的なこと全般、部長の下には女の社員が二人しかいませんでしたので、ほとんど雑務、下との交渉ごとをやらされることになりました。仕事の段取りを理解したときには、部長は外回りに出るようになりました。ひどく忙しかつたけど、やりがいがありました。あつという間に一年が過ぎました。部長も期待してくれて、ここで一生を終えてもいいかななんて考えていました」

「そう、今ごろの季節です。私は会社で倒れたのです。心臓の周りで何か破裂したのです。すぐ救急車で運ばれ、そして専門の病院が近かったおかげで、今ここにいますのですが、たぶん一度死んだんだと思います。まあ、心臓は止まりましたが、死んではいなかった、といってもいいかな」

長老はここで一度顔をあげた。今まで自分の手を見ながら話していたけど、聞き取りにくいことは全然なかった。みんな飲みものとか手にしてたけど、しんとした感じだった。反対に遠いところで騒ぎ声が起こっていた。みんなが聞いているのを確認したみたいな感じで、長老はまた話し始めた。

「不思議な体験でした。記憶の中で、しばらく眠っていたと思います。それがどのくらいの時間なのかは全然見当が付きません。暗い中で目を覚ましました。幽体離脱という言葉があると思いますが、身体から魂とっていいのか、意識が離れていき、自分の姿を上の方から見つめているものです。よく聞くので自分の状態がそうであるのじゃないかと思いました。しかし、そんな感じではありません。ただ、痛みとか身体が普通感じる皮膚の意識がありません。暗くて目は見えませんが、しっかり目を開けている状態、もちろん筋肉の意識はありません。音だけは聞こえます。やはり身体からは分離しているような、等身大だけど、身体が透けているような感じです。

自分の意思で動くことはできません」

「しばらくそうしていました。起きていましたが寝ているような状態です。次に覚醒したときは、光の中を飛んでいました。羽のように、重さは感じませんが、空中を漂っていました。風ではなく磁石で操られているような気がしました。明るい光の中にきれいな色の花が咲き乱れていました。大きな樹が見えます。なんじやもんじやの木、広げた枝の中へ吸い込まれました。そのとき、ひんやりとした気を感じました。前では光が乱舞しています。少し暗くなった木の内部で私は自分が木に同化したのを感じました。全部ではないが、私は木でした、木の一部でした。大地とつながった自分を意識しました。どのくらい時間が経ったのでしょうか、私は自分で目を開けました。自分が自分の身体とともにありました、ひどく幸せな気分でした。

これが私の臨死体験です」

長老は話をひとまず引き取って、おいしそうにビールを飲んだ。みんなも、なんだかお互いの顔を眺めて飲み物に手を出した。野球部も神妙にしている。まあ、ここでこちょこちょ、やってたら気がおかしい。

会長がやはりみんなの顔を見まわしてから、

「貴重なお話ありがとうございます。私が一年の時はもう木村さんは学校にいらっしやらないでしたし、戻られてからも詳しい経緯はお聞きませんでしたから、まったくそのような体験をなされたとは知りませんでした。少し質問をさせてもらっていいですか」

長老はグラスを置いて手を広げた。

「木と一体化したというのが、ひどく特徴的であると思われるのですが、それについてはどんな感想を持たれていますか」

「そうですね、確かに他の人の体験にはあまり出てこないですね。木自体はよく登場しますけれどね。それは後で調べていて気付きました。ただその時はそれが特別だとは意識していませんでした」

「そうでしょうね、聞き方がわるかったですね。それでは角度を変えて、光と言うのはまぶしいものなのですか」

「暗がりでは光をあてられたら眩しくて目があけてられません、もっと全体に光が渡っている感じですね。空全体が光っているというのでしょうか、地上からも光が反射して、とにかく明るいですね。だから光というより明るさと言っていると思います」

「なるほど、暖かさとか、涼しさのようなものは感じられるのですか」

「意識しませんでした。木の中に入った時はひんやりとした気を感じました。だからその前は暖かったんだろうと、類推はできますが」

「わかりました、私からは以上です」

会長は、腰を下ろした。長老は当然座ったままだった。

「身体の具合はどうなんですか」

と、こけしが訊いた。

「目が見えるようになって、びっくりしたよ。ひどく身体がやせてしまったし、髪は真っ白になっていた。肌はぱさぱさ、血の気が通ってないようだった。大手術だったらしい。腹には縦に切開の跡がある。でも、一命を取り留めて、二月もしたら元に戻ったよ、身体的にはね、ただ頭の方がうまく適応できないんだ。一年ぐらいは正常ではなかったね。そのとき田舎に帰るよう説得されたけど、わがままいって東京に残らせてもらった。通院しなければいけないものもあるのだけれど、何とか自分で片をつけなくてはいけないというような気がしていたのだ」

「どんな状態なんです」

「一言でいえばショック反応だね。」

急に自分が倒れるのではないかという恐怖が常に頭の片隅にある。気が付くと、動作が止まっているのだね。考えているわけではないのだけれど、意識が飛んで茫然としていることが多い」

「臨死体験の影響はありましたか」

「それについて考えるようにはなつたけれど、直接影響されたようなことはないような気がする。ただ、靈感というのか感受性は鋭くなったね。まったくの不信心で靈魂の存在なども否定していたけれど、いまでは存在してもいいのではないかと考えるようになった。それで守屋さんとも話があうわけだ」

「木村さんの体験は肉体を離れて靈魂になった体験と捉えていいんですか」

こけしはかなり突っ込んできてる。

「そこがね、気分的にはそうです、と断定したいのだけど、厳密に言うとうだろう、と考えるね。意識を主にすれば、仮死の状態になつてまだ意識があるとすればそれは靈魂であるといえるのだけど、夢を見ていたのだ強弁されれば、夢ではないがそれに近いものかなと認めなくてはならない。これは、カウンセリングで何回も医者と話したことです。自分が考えやすいように理解しろというのが結論なのです。それで私の結論は靈は存在するです。その方が自分で楽なのですよ」

「そうですか、わかりました。もっと強い主張かと思いましたか」

こけしはちよつと、がっかりした感じで口を噤んだ。

「でも、がちがちの唯物論者である私に、そう思わせるだけの体験であつたことは間違いありません」

長老はまわりを見回し、誰も何も言わないのでグラスにビールを注いだ。長老は瓶ビール派だ。みんなジョッキの生を好んでるけど、ぼくは今日は初めからサワーにした。

「ちよつといいですか」

と、ぼくは手を挙げてしまった。長老はこちらを向いた。少し恥ずかしい。

「音が聞こえていた、と言っていましたけどどんな音が聞こえていましたか」

「私の場合それはブーンというような、何かが振動しているような

音だね。気圧が変わったりすると耳の奥で何かが聞こえてくる、あれと同じ感じだよ」

「たとえば、人の話声とか、物音はするのですか」

「キーンというような不快な耳鳴りとは違うのだよ。たまたま音がしなかっただけで、音源があれば、聞こえたような気がする。シーンとしている感じではなく生活音とは違うのだけど、そのような通常の感じかな」

「かさかさ、というように枯葉がこすれるような音に似ていますか」

「それとは違うが、そのようなという意味ではイエスだ」

「両耳から聞こえるのですよね」

「イエス」

「ありがとうございます。自分にも音の体験があったものですから聞きました。あ、それに瓶ビールには何かこだわりがあるんですか」

長老は片手を振って、

「習慣だよ、銘柄も決まっている。それがうまいと思うのさ」

ぼくが話し終えたら自然と雑談が始った。ぼくが鐘を鳴らしたみたいだった。

食べて飲んで喋った。あつという間に時間が経った。

会計を済ませてみんなで外に出た。どうしようかな、そういう意味ではずっと考えていた。話の輪の中で高校生とも二、三言葉は交わしたけど、どうしようかな。どうする、って本当は聞きたいんだけど、それではだめなんだ。みんなに知られないように、ということがプレッシャーになっている。でもそれは、ぼくのためではなく彼女のためなんだ。わかった、どうしてこんな簡単なことに気づかなかったんだろう。

野球部とか飲み足りないみたいで、新宿のなじみの店行くけど、みたいに誘われたけど今日はパス。長老と海保が付いて行った。改札で分かれて、徒歩のぼくは信号渡ったところで電話した。電車乗

る前に捕まえなくちゃ。

呼び出しがかなり続いて、高校生がでた。

「あ、篠崎ですけど」

「ちょっと待って」

何か誰かと話しているのかな。

「ああ、ごめん。行っちゃたからどうするのかと思った」

「あ、そうか、電話するつもりだったから」

みんな電車乗ってしまったから、駅まで来て、ということになってぼくは戻った。まだ八時を少し過ぎたところだった。何も無いんだけど密会って感じだね。

駅前に出てきていた彼女は、ちょっと不安げだった。タイトのスカートに濃い色のアッパードから、いかにも女子大生と言う服装だった。

気づいて二人、手を上げた。

「ごめん、勝手わからなくて」

近くのケーキ屋の奥が落ち着いた喫茶室になっているので、そこへ行くことにした。気まずくはないんだけど、オーダーしたあと、しばし沈黙。

ぼくは、なんだか緊張して落ち着かない。あせってはいけない、と言いつける。

かなり沈黙に対する忍耐力があるから、そのこと自体は苦にならない。

「木村さん。大変なことあったんだね」

高校生は何気なく話し始めた。

「それに比べれば、私の抱えてる問題なんか大したことないよね」

え、高校生つて下の名前聞いたことあったっけ。

わたしは篠崎浩樹、十九歳、あなたのお名前は。

なんかバカなこと考えてる。

高校生はちよつと上目づかいにぼくを見た。

えーえつ。ぼくは高校生のこと何も知らない。

そのミカンの房のような目と、桃の花色の唇と、小ぶりの顔に服から出ているすんなり伸びた指と脚以外は。

注文の飲みものきたので、その間に体勢立て直さなくちゃ。ぼくはコーヒー、彼女は紅茶頼んでいた。

「そのせいで引越したわけ」

ぼくはコーヒーカップ持ち上げながら訊いた。だいたいどたばた喜劇だと、ここでカップひっくり返すんだよね、と、ちらつと思つた。

「そうなの、事情があつてね。まだみんなには言いたくないの。だから篠崎君も黙つてほしいの、隠しているわけじゃないのよ、時期が来れば言うし、まだはつきりしてないこともあるから」

「わかつた、それは大丈夫だよ。ぼく、余計なこと言わないから」

「この間はびつくりした。篠崎君がバイトしてるのは聞いてたけど、まさかあの本屋ではね」

「家近いの」

「そう、明治通り越えて十分ぐらいかな」

「偶然だよ」

「そつだね」

照明そんなに明るくなくて豆ランプで明りとつてるから、かなりいい雰囲気。遠くから見れば、恋人同士に見えるかもしれない。酔つてはいないけど、リラックスしていい気分だ。でも、高校生は問題を抱えてる。

「篠崎君ておもしろいよね。私のこと無視するでしょ」

「えつ、そんなことないよ」

興味がありすぎるのを、抑えているだけなんだ。それに、たとえば高校生に鼻であしらわれたら、耐えられそうにない。だから、傷つかないようにしてるだけだ。

「ちょっとシャイなだけさ」

カッコつけすぎたかな、ついでだ。

「きみって、すごくきれいだから、近づきにくいんだよね」

正直な感想ではあるんだけど、浮いてるかな。

「損だよな、そういう子って。私も自分で意識しちゃう。あ、ごめん。そういう意味じゃないんだよ。自惚れてるわけじゃない。そういう風に見られてたら、やだなって話」

難しいんだろうな、器量の悪い子はそのことで悩み、良い子はそのことで疎外される。それを武器にしたらしいのだろうけど、性格のいい子はそれが負担だ。ぼくだって、彼女の身体への興味が第一なんだから。そんなこと否定できない。でも、そのことを告げたら彼女は自分を見誤ってる、と感じるのだろう。まあ、告げる必要はないんだけど。ぼくは、彼女と二人でいるだけで幸せな気分だった。

それからちよつと空を見上げて、彼女は話はじめた。

「父と別居したの、それで母と私でそこへ引っ越してきたというわけ。私は父親っ子だったけど、母を見捨てることは出来なかったの。どちらが悪いということではないのよ。離婚なんてしない方がいいけど、お互いの事情というのがあるのね。母はすぐ働き始めたわ。私には父親のところに残るといふ選択肢があつたけど、そのほうが楽よ、と勧めてくれる親類もいたけど、母がかわいそうに思えたの、同性ということがあるわね。父を嫌ってた兄が残ってるのは皮肉だけど、近々結婚して家を出るといふから。みんな取りあえずなのよ。意志の固いのは母ね、限界だったらしいの。父の女性関係の話なんか興味もないし、聞きたくもないけど、だいたい悩んだ末の結論だからといってね」

彼女は一气というほどではないけど、ぼくが口を挟む間もなく話していた。ぼくに意見というものなんか、どちらにしてもなかったけど。

「そのことはもういいの。どうも私たちが大きくなるまで育ててくれてありがとう、というほかないのよ。父は寂しくなるかも、でもそれは父が自分で考えることだわ。私は自分をしっかり持って自分の道を行くだけなんだわ」

たぶん彼女は自分の考えを誰かに話したいんだ。それが、ぼくであることはすごくうれしいことだった。なんで、ぼくって気もしなくはなかったけど、ちょっと誤解しそう。とりあえず彼女も辛かったんだな、ということはよくわかった。そして、これからもしばらくこの状態が続くんだろう。長老が一年もさまよっていたショックとは程度がちがうけど、高校生もひどいショックを受けているということだ。

「ぼくもね、二月に母を亡くしたからその感じはいまも残っているんだ。自分がすっかりしなくてはいけないんだってね。逝ってしまった人のことをいつも感じていることは、その人にとっても本意ではない気がしたんだ。ちょっと違うかもしれないけど」

彼女を慰めてあげたい気がした。

「そうだったの、わたしには考えられないけど、それは気を落とすわよね」

しばらく二人黙った。

「ぼくでよかったら、話してよ。また会ってくれる」

「いいわよ、連絡してね」

「わかった、遅くなるから行こうか。送って行くよ」

「ありがとう、でも大丈夫よ」

「全然、帰りは歩いてくるから」

あんまり関係なかったかな、ぼくはうきうきとしていた。「冗談でも言いたい感じなんだ。」

「走って帰るかもしれないな」

彼女は微妙に笑った。あんまりおもしろくないジョークだな。

それで二人で並んで駅まで行った。通勤や通学に電車をつかっている人は慣れているんだろうけど、ぼくはこの騒々しさや、慌ただしさが、どこか別離を想像させて淋しく感じられるのだ。別れを押し殺して、無理に、はしゃいでいるような気がするんだ。さらに言えば、雑踏の中の孤独とでもいえるのだろう。

でも今、横には高校生がいる。ラッシュの時間帯も終えたから、それほどでもないが、やはり酔客が夢想の中に漂っている。彼女を守るように隣に立った。彼女の顔がぼくの肩の方に近づいたが、何も言わずに、視線もからまなかった。そのまま黙ってこの時間をやり過ごしていた。

駅について乗客は、どたどたと連れ立つように降りた。流れに乗って行かなければならない。ぼくはSPのように抜かりなく動いた。ターミナル駅はこの時間でも多くの人であふれていたけど、心もち家路に急ぐ感じが出ていた。

せかせかと歩く人たちを縫って、ぼくたちは東口の方に歩いて行った。

しばらく行くと、確かに彼女がとる進路の先に、ぼくが働いている本屋が見える。彼女がそこに寄る理由がわかった気がした。その前の路地を左に折れ、狭くなった道を進んでいくと、

「あそこのマンションなの」と、彼女が指差した先にかなり高層のといっても、ぼくのアパートに比べればという意味だけど、建物が見えた。前まで行って、

「じゃ、」と、ぼくは手をあげて、引き返そうとした。

「あ、」と言って、彼女はバッグから手帳を取り出して何か書いてぼくに渡した。

「メルアド。電話よりいいかも」

「わかった、連絡するよ」

紙をお互い持ったままだった。それで何かが通じているような気がした。

「さよなら」と、高校生は静かに言って、踵を返した。

「さよなら」とぼくは少し元気を出して応えた。
入り口のドアを開けると、彼女は振り向いて、ゆっくり手を振った。

これが、ぼくと彼女の最初のデートだった。

もしそう呼べるならだけど。それから、ぼくは朝と夜に一度、はるかにメールすることになった。そう、高校生は斎藤はるか、十八歳。

「おはよう、」

「元気かい、」

というような短いのが多いけど、夜時間があるときなんか、ラブレターまがいの長い文章を送ったりした。

「こんばんは。」

「なにしてるの、」

「おやすみ」

そんなメールが戻ってきた。

彼女ときどき買い物には来るけど、ぼくの帰りが遅くなるので、終わってから会うことはなかった。バイトの休みのときとか、前行った喫茶室で、放課後お茶したりした。みんなに隠してるわけではなかったけど、二人だけで会っていた。海保に知られるといやだな、とは思っていた。そのことについては、彼女は何とも思ってたなくて、関係ないよ、という。付き合ってたわけでもなく、超研の仲間っただけだし、とかいうけど、そうするとぼくは会の仲間っただけではないんだな、と思ったりする。

近くで見るとよけい肌の表面が陶器のように白い。それで、つやがあって弾力がある。つい手を出してしまいそうになる。赤ん坊のほっぺ突つくみたいに。彼女は授業には、よく出てるみたいだ。でも女の子とは、いまいち波長が合わない、付属校からあがってきた人たちとは距離があると言っていた。

会長と高橋さんだんだん仲良くなってくね、守屋さんて強いよね、

とか高校生はぽつりぽつり話した。

はなやかな印象を外見から受けるけど、なんかふつうの女の子なんだな、と思う。よくはわからないんだけど、わがままで、きまぐれで、感情的、すぐ怒るって感じるけど、彼女はどちらかという温和な印象がする。

でも、不思議少女であることは間違いないんだ。占いとか好きだし、高尾山でもおみくじ楽しそうに引いてたの覚えている。それに超現象系の雑誌定期購読してるし。

ぼくは実家の信州の町のこととか、中世のお城興味あるんだ、とかの話題。要するに、よくあるそんな話を話してたんだ。あの音楽いいよね、とかそんな本読んでるんだ、とかあの俳優きらいとか、だんだんお互いの趣味がわかってきて、この部分は合ってるなとかへー、そうなんだみたいなのを理解していった。

彼女は紅茶党で、何かあまりわからない銘柄を頼んだりする。さいしょ香りを楽しんでからスプーン一杯の砂糖。

とても優雅に、そこだけはティータイムのレディーみたいに。ぼくはコーヒーオンリー。銘柄とかけっこう試したけど、けつきよくアメリカンタイプのマグカップで飲みたいタイプかな。砂糖もミルクもその時は入れない。でも、甘ったるい缶コーヒーも嫌いじゃない。

実を言えば、この喫茶室は利用したことがなかったんだ。男が一人で入るところではないし、男どうしても浮く感じかな。なにしろ、ケーキ屋なんだから。色とりどりに並んだケーキの大きなショーケースの横奥に喫茶室があった。初めての人は戸惑っても、中に入っ
ていまえば、広い空間が落ち着いた照明に彩られて目に優しい。夜しか来ていないけど、男女のペアが多い。声だかに話す人はいなくて、静かになにやら語らっている。まあ、ぼくたちもその仲間ではあるんだけど。

九時過ぎまで、すぐ時間は来てしまう。ぼくは下を向いたり、視線を逸らしたり、結局彼女の目を見ることになって、そのままじっ

と見てるのに気づいて驚いたりする。彼女はどちらかといえば、話すときは相手の目を見て、みたいな感じにいるからなんだけど。目が輝いて相槌を求めたり、口をすぼめて呆れて見せたり、かなり表情たっぷりに話した。あくまでもぼくに比較して。

それから、やはり彼女を送っていった。別れるときハグしたくなるんだけど、ちよつとどこかに触れるだけにする。彼女も別れがたそうに見つめてから、手を振った。それからぼくはちよつと急ぎ足で、自分の部屋に戻って、彼女に帰宅の報告とお休みのメールを送る。

「おやすみなさい、きょう楽しかった！」

返事が来て、ぼくは寝る準備を始める。

朝は目が覚めればすぐに起きだす。布団の中でぐずぐずはしていない、特に暖かい時は。勉強するとしたらこの時間帯かな。コーヒ―飲みながら単語おぼえたり、動詞の活用、記憶したりする。時には書き物をする。内容はなんでも、雑感ってやつかな。演習のレポートも書く。二、三時間してから学校へ行く。徒歩十分、散歩にしても短い。

ぶらぶら歩いてきて、そのまま部室に行く。鍵は開いていて、いつものように長老がいた。窓を開けて換気する。それから読みかけの本を取り出す。最近メモをとることにした。

気が付けば時間が過ぎ、長老が何か言った。了解するまで間があった。――食事に行こうか。

長老と行くのは、はるかに行く喫茶室の、その先のゲーセンの階上。まったくここは女子がいない。いたずらに時間を潰している人半分寝てる人、照明も暗くて神経を休めるにはいいのかも。BGMもかってるんだか掛つてないのかわからない。長老はそこが好きみたいだ。駅前で立ち食いのそばを食べてからここへきた。決まった時間に決まったことをして、極力変化を感じさせない。それが長老のモットーだった。

なぜぼくを誘うんだろうか。長老は一人で今までしていたはずなんだ。まあ、海保が言うように、ぼくはあまり長老の邪魔にならないのかもしれない。却って気を遣ってるとか、海保は言ったけど、それは考えられないな。誰にでも気をつかうことはない、と断言できる。

海保は薄々ぼくとはるかが会っているのに気が付いたみたいだ。そうだよ、はるかの後ろ、少し前までくっついていたんだもの。微妙に避けているような、会っても何も言わないんだけど雰囲気的に感じる。ぼくから説明するべきなのかな。

「きょう田舎へ帰る」

と、長老が急に言ったのはそのエレベーターを降りて、ゲーム機の間を抜けている時だった。

「みんなに会うと、悲しかったりするからそのまま行くよ。帰ったと伝えておいてくれ」

ちよつと振り返ってぼくが聴こえたのか確認するようにして、そのまま先に立って歩いていった。

ぼくは驚いて立ち止まりそうになったけど、遅れないように追いかけて、長老に並ぶと

「それでいいんですか」と、訊いた。

返事はわかつているけど、聞いとかなくてはいけないことがある。「ああ、頼むよ」といって、長老はそのまま駅の方に歩いて行った。

ぼくは迷子にでもなったように、途方に暮れて長老を見送っていた。

キューピッド

キューピッド

長老がいなくなつて、またぼくは部室で一人になった。前は、もうすぐ帰ってくるだろうという見込みがあつて、不在は一時的なものと認識していたが、今回は違う。

完全な不在を意識しなければならなかった。これは思ったより堪えた。そのせいで、ときどき空白な席を眺めることになった。でも、訪れる人は相変わらずで、それほど寂しいということはない。

野球部とよく話すようになった。二人とも付属からの持ちあがりで、高校の時から同級生らしい。その手の話はその時が初めてだったけど、二人に対する違和感はあるところからきていたのかもしれない。

でも話せば、屈託のない明るい、まあ苦労がないというのだろうが、さっぱりとした気性の持ち主だった。特にセカンドは少し落ち着いてるし、考え方がまっすぐという感じがする。経済的な余裕もあるんだろうが、二人はよく飲んでいた。

合コンまがいのこととするようで、その話で盛り上がっていたりもした。なんだか楽しいキャンパスライフだな、と思わざるを得なかった。気にするわけではないが、そこにはギャップと呼べるようなものがたしかにあった。そのことは彼らの責任でもないし、彼らが鼻にかけてるわけでもなく、かれらは、ただひたすら無頓着なだけだった。この構造はなにか記憶にあるものと同じ感じだった。えーと、なんだつたろう。思い出せない、まあいいか、いつか思い出さう。

ぼくは彼らの生活が全然羨ましくもなく、反対にある種の危うさを感じてしまうのだった。大丈夫か、野球部。ただし結局、彼らと太話を聞くことになって、読書を中断させられる。そうか、長老がいればこういう状況にはならなかったのか。そんな長くいるわけではないから、適当に相槌を打って休憩することにする。ぼくにとっても、それは気休めにはなるのだろう、ほとんど他人の話を聞くことないんだから。

性の話は太っぴらだった。女子の方がすごい、とか言っている。ファーストの一つ違いの姉の話だった。露骨な言葉や隠語で、かなり際どく状況を説明していた。それに親をだます方法とかまじえながら。

ぼくだって性への関心はあるけど、どこか違うな。はつきりはしていないけど。何が違うんだろ。

この二、三日天気が悪い。西の方では梅雨入りしたと聞いたから、そろそろその季節がやってくるのかな。ひどく降るというわけではないのだけれど、どんよりとした空からしとと間断なく雨が落ちてくる。

気温は高く、じとじとしている。ベランダの壁にナメクジがいた。大きいとその子供みたいに小さいやつ。

こっちのが古いタイプで、だんだん殻をつけるように進化したんだっけ、わかんなくなっちゃた。違うよね、こっちのが最新鋭なんだよ。今日は身体がだるくて、動くのが億劫。雨も降ってるし、学校行くの止めた。初めての登校拒否、冗談だけど。うーん、頭もすっきりしない。熱あるのかな。こういうときは眠るに限る。一度起きたけど、また眠った。

次、起きた時は昼過ぎだった。トイレ行って、何か食べなくちゃ、と思って残ってたインスタントのラーメン食べて、また寝た。その次、目が覚めたときはもう日が暮れそうな時だった。さすが腰が痛

くて起きだして、蒲団の上でボーとしていた。あ、今日バイトだった、と思いだして、店に電話した。

店長はひどく不機嫌そうだったけど、初めてのことだし、お大事にとか言われて、電話を切った。

だんだん日が暮れてきて、部屋が暗くなった。なにか栄養をとって、薬飲んだ方がいいかな、とも思ったけど、なんか億劫で、まだ動けなかった。熱はさらに出てきたみたいだ。寒気がして、これはやばい。病気はほとんどしたことがなかった。風邪も、たぶん今日みたいなものほとんど記憶にない。健康保険は持つてるけど、医者には中学生のころから行ったことがなかった。

数少ない経験からいっても、この熱は寝汗をかいて次の日にならなくては下がらなかった。母が、面倒でも汗をかいたら、夜中でも下着を換えるようにと、うるさく言っていた。あつたかいものを食べて、眠ることだな、と考えを決めた。

携帯見ると着信のランプがついている。

そうだ、今朝はるかにメール入れてなかった。二回メールが来ていた。一度目はおはよう、というものだった。二度目は午後、どうかした、と書かれていた。

電話した。コール音、二度めで出た。

「ああ、ごめん。篠崎です」

自分の声がこもって、鼻の奥の方から聞こえる。

「大丈夫、声、変だけど」

それまで気付かなかったけど、ひどく鼻が詰まっていた。

完璧に風邪だな。

はるかには、看護婦みたいに症状を確かめて、今行くからって言った。

「いいよ、大丈夫、明日起きたら治ってるよ」

「そのために薬飲まなきゃ、栄養剤と風邪薬もっていくよ、それだけ。近所にいるし」

「そう、悪いね。助かるよ」

ぼくもちよつと弱気になっていた。

それから三十分ほどしてチャイムが鳴った。ぼくはパジャマ代わりのスエットだし、部屋も散らかってるから、中に入ってもらわけにはいかなないと覚悟していた。ふつうは玄関先の対応の方が失礼かもしれないけど、この場合その方が穏当なのだろう。

少しふらついたけど、急いでドアを開けた。

はるかが心配そうな顔をして立っていた。Ｔシャツにジーンズで、七分のコートを羽織っている。

「これ、薬と栄養剤。それに温めるだけのうどんだから、それ食べながら薬飲んでね」

手提げ袋を手渡された。

初めての訪問がこれだからな、かつこ悪い。

「ありがとう、助かるよ」

ほんと消え入りそうな声で言った。

そしたら、はるかは、手をぼくの額に押し当てて難しい顔をした。そんな顔初めて見た。

「かなり熱あるね、一人で大丈夫」

「平気だよ、移ってもいけないから」

「わかった、暑いけど温かくして寝てよ」

そう言うのと、じゃあという感じで手を振って、戻っていった。

やれやれ。心配かけちゃったけど、親身になってくれたのはすごくうれしい。でも、やはりかつこ悪いな。

アルミの容器のそのまま火にかけるタイプのうどん、あまり味はわからなかったけど、食べたらほっとした。あたたかいし、のど越しもいいし、消化もよさそうだった。それから薬とドリンク剤を飲んだ。あんな真剣なはるかの顔みたの初めて。

あ、そうだ。メールしておこう。

「ありがとう、お休み」

ついでに、「好きだよ」と入れた。熱に浮かれてるかな。

しばらくしてメールが戻ってきた。

「お大事に、お休みなさい」

そのあと「わたしも」と続いて、ハートマークが赤く輝いていた。

ぼくは、完璧に舞い上がって、飛び上がりそうになったが、頭痛がしてやめた。

絶対明日までに治すぞ、と決意して心を鎮めて目をつぶった。頭の中が回転してるような感じがずっとしてたけど、いつの間にか眠ったようだった。

でも、次の日にはまだ熱は下がらなかった。調子も悪かったのもその日もほとんど寝ていた。完璧に治ったのは、夜になってからだった。びしょびしょになるほど汗をかいて目覚めると、熱が退いているのがわかった。

シャワーを浴びて服を着替えた。コイン・ランドリーに行って洗濯をし、コンビニでアイスを買ってきて、そこで食べた。ついでに飲み物を数種類買った。有線の音楽は軽快で、自分の健康を祝福しているようだった。

今までの苦痛が嘘のようで、はるかが来たのも夢のようだった。思わず、携帯を確認した。赤いハートマークは消えてはいなかった。はるかにメールを送った。

「ありがとう、きみのおかげで早く治ったよ」

きみのおかげ、のところ思いきり念を込めた。すぐ返事が来た。

「よかったね、明日会おうよ、連絡ちょうだい」

よかったね、の後にハートマークが付いてた。儀礼的ではあるかもしれないが、今まではなかったことだった。

好きだよ、と告白したわけだから、付き合っただけになるのだろうか。まあ、同じようでもあるし、確認しときたいところでもある。付き合っている、といえば恋人同士ってことになるわけかな。はる

かつて、付き合ってる人っていないよね。ぼくは全くいない。

その話、したことなかった。そんな段階じゃなかったし。はるかから会おうよ、なんて言うてくることなかったな、考えてみれば。えっ、いい方、悪い方。ああ、心臓に悪い。

そんなことを考えながらぼくは結構この状況を楽しんでいたのかも知れなかった。

戻ってきてても、一日中寝てたわけだから、眠くはなかった。妙に興奮していたのだろう。買ってきたサンドウィッチつまんでビールを飲み始めた。といっても、二本も飲めば眠くなってくる。観ていた動画オフにして、眠ることにした。横になつたらすぐ眠ってしまったらしい。

次の朝は快調に目を覚ました。

夏が近づくにつれ起きる時間はだんだん早くなっていた。そのままだま立ちあがり、窓を開けると空はもう明けていたし、雲もほとんどない快晴だった。西に向いているので朝日は見られないが、朝の光を受け町が薄赤く輝いていた。そしてその上に広がる青い空。雨上がりの空は透明に澄んで、その色調が目の奥にしみ込んでくるようだった。都会の空気がきれいとは思えないが、思わずさわやかな冷気を大きく吸い込んで伸びをした。太古からの人の記憶がそこに甦ってくるようだった。

丸二日寝てたんだよね、曜日の感覚がなかった。指を折って数えると、今日は金曜日だね。そうだ、水曜は一限に語学あるから早めに出ようとしたんだけど、断念したんだ。それからがひどく長いような気がした、寝てただけなのに。現実感が少し希薄なんだよね、ふわふわしてる。でも気を取り直して学校へ向かった。二限の演習でてから、部室にとりあえず行つた。

鍵が開いてて、海保がいた。

「やあ」と、声をかけると、

「どうした」と、海保は言った。

えーと、何がどうしたんだろう。

「しばらく、こなかった」

あ、そうだ。それは初めての出来事かもしれない。部室二日半顔を出さなかったのは。

「風邪引いたみたい」

ぼくは、もう治ったよみたいに髪に手をやった。

海保はタバコは吸わなかった。

何してたんだろう。珍しいな、一人で部室にいるの。ぼくは、怪訝な顔をしてたのだろうか。長老がいつも座っていた少し手前のあたりに海保はいた。そういえば、あそこ海保の指定席だった。

「いや君まで、田舎帰ったかと思ったよ」

なんだか微妙な言い回しだな。

実際そんなふうには思っていないんだけど、海保はそういう話し方することある。素朴な言い方ではない。斜に構えるというか、言葉に含みがあったり、とげがあったりするのだけど、そのことで問い詰めたら、いやそんなことない、っていうんだろうな。自分の感情を微妙に言葉にするのがうまいともいえる。それもさりげなくだ。だから、ことばではなくて感情を読まなくてはいけないんだ。

ああ、疲れる。で、ぼくは言葉が返せなくて黙ってしまうことになる。反対にこれは一つの武器で、意識的ではないけど、海保は沈黙に耐えられないから、うやむやになって次の話に移らなくてはならない。いつも人を相手にして生きてるからだ。

「斎藤と付き合ってるって」

我慢しきれなくなって海保は言った。いずれその話題は出るはずだった。海保から言ってくれて助かった。

「そう、最近ふたりで会ってたりする」

言葉にどんな影響があるなんかわからずに、感じたことを口にした。嘘をつかないこと、これは愚直に信じているぼくの処方箋だった。正しいかどうかはわからない。ぼくだって、そうでない方がうまくいく場合があることは知っている。だからあくまでも、ぼくの

態度のことだ。

海保は立っているままのぼくを見上げ、それから視線を下げてテーブルを見つめた。

ぼくは回りこんで所定の位置に座る前に少し窓を開けてからカバンを横に置いて、海保を見た。

「きみが斎藤さんを好きなことは知っている。でもぼくも彼女が好きになってしまった」

海保は手のひらを上にして、持ち上げた。

「でも、ぼくも彼女が好きになってしまったって、どこかで聞いたセリフだね。考えてたの」

またぼくは言い返せない。それを見て海保は続けた。

「わかったよ、ただまだ終わったわけじゃないからね」

そうか、恋のライバルはいくらでもいるというわけだ。

「まあ、きみは気のいいところがあるから許すよ。ただ手加減はしないよ」

これって一方的な宣戦布告ってやつ。ぼくの守り札は携帯にあるハートのマークだけだ。

「なにか変るの」

「斎藤の情報をぼくから聞けなくなるだけさ。それにネガティブな話が出てくるかもしれない」

うーん、微妙な情報操作は海保の得意分野だからな。

「お手やわらかにね」

ぼくは立ちあがって手を差し出した。海保も立ち上がった。握手をしてそのまま出ていった。なんかちょっと嫌な感じだな。ぼくは座ったまま、ぼう然としていた。これも海保の心理作戦なんだよね、と最後切りをつけた。そうでも思わないと、めげてきそうだったから。

「どこにいるの」

はるかにメールした。すぐ、返事が戻ってきた。

「学校。お昼たべようか」

「了解」

校門のところで落ち合って、アーケードの通りを歩いて行った。きょうはアップで帽子のように髪が巻きあげられていた。長袖はもう暑くなってきた。ジーンズにポロシャツで、ぼくは紺、はるかは水色でピンクのプリントがしてあった。昼、食事するのは初めてだ。いつも彼女は女友だちと一緒に、ぼくはそこには近づかなかったから。ぼくは一人で食事するのには慣れていたけど、彼女はそうではないみたいだった。そうだよ、女の子は一人で食事しないね。

長老がいるときは、立ち食いそばか、お決まりの定食屋に行ったけど、今日はそういうわけにはいかないよね。

で、何を食べるのか、どこに行くのか、決まらないままかなり進んでしまった。そのあいだ、そぞろ歩きで、どうだったとか、大丈夫とか彼女は聞いていて、並んで通りを肩をくつつけながら歩いていた。そうしないと話が聞こえないからだったけど、なんとなくいい感じだな。

途中で、ちよつとオープンにした、明るそうなレストランを見つけたのでそこへ入ることにした。

ランチのメニューを頼んで、

「ここでよかった」とぼくは聞いた。

限られた店しかないの、昼時は学生や会社員で一杯になる。でもここまですれば、それほどの喧騒はない。

「うん。平気よ、でもここ来たことないでしょ」

そうなんだ、こういうところって男同士では来ないかも。せいぜい、トンカツ屋とか中華かな。ラーメン餃子っていうのもあるけど。そう言えばこの通りにはファミレスってないね。そうだ、逆方向へ行けば、あつたんだ、今度はそっちへ行こう。

いろいろ話して、海保のことも話題にのぼった。はるか海保の間には何も無いよね。前には会の仲間だって言ってた。

「そう、悪い人ではないけど、私のタイプとは違うわ」

そうだよ、なんだかんだって言ったって、はるかの問題なんだから。でも、はるかがぼくに対して猜疑心を持ったらどうなるんだろうか。どうもマイナス思考だな。完全に海保の作戦にはまっている。しかし、ぼくはそのことを彼女に告げられない。どうもぼくの主義に反しているからだ。その次元に立ってしまったら海保と同じになってしまう。スパイ大作戦になっちゃうんだ。

「海保が変ななうさを流すかも知れないから気をつけてね」

と、はるかに告げてしまいたいけど、それをしたらぼくは負けなんだ。自分に負けてしまうんだ。主義といったけど、それほど確かなものではない。勘みたいなものかもしれない。ええっ、ぼくは何を信じたらいいいんだろう。

「付き合ってくれるね」

食事の後、はるかに言った。コーヒーを飲んだときだ。

「どうしたの、付き合っているじゃないの」

やはり、そうなんだよ。確認するまでもない。さらに他に付き合ってる人いるの、なんて言ったら、バカにしてるのと怒るだろうな。当然だよ。

「篠崎くんて付き合っている人、他にいないの」

これは何かシビアに聞いてきたな。あれ、おかしいな。これはぼくが言おうとしていた意味とは少し違うな。

ぼくは誰とも付き合っていないし、付き合おうとした人もいない。過去を探っても、一時の恋みたいのはあつたとしても、それはそれだけのことだった。その季節の経験にすぎなかった。こっちが進もうにも相手にされなかったともいえる。だから、付き合った経験もなかった。いままで特定の恋人はいなかった。

「いないよ」と、ぼくは言うしかない。

他にどういえないんだ。

「そう」と、はるかは、言葉を飲み込むようにつぶやいた。
だめだ、だめだ。

何かおかしい。何か言わなくちゃ。

「そうだ、なにか用があつたんじゃなかった」

こんなこと聞いて何になるんだ、ああ嫌だ。最悪。

「もう、いいの」

なんか気まずいな。ぼくが付き合つて、と言つてからなんだよね。あれ、ジョガーかな。ジョガーのことを言つてるのかな。あのキユーピッドか。あれはぼくとはるかを結びつけた矢だったのに。

「菅原さんのことなら誤解だよ。それは何度か二人で話をしたけど、そういう関係とは少し違うんだ。彼女はぼくのことなんか相手にしていない。彼女は超能力者なんだ」

それからぼくはジョガーと、会長と前の彼女のことをはるかに話した。はるかは目を見張つてぼくの話聞いていた。彼女はかわいいな、きょとんとした丸い瞳はユーモラスでもある。少し口を尖らせてみせる表情はさらに心ひかれる。彼女に憂いの翳を与えてはいけない。彼女がほほ笑めば、ぼくは幸せになれた。

ジョガーよりはうまく話せなかっただろうけど、会長の悲劇ははるかも心打たれたと思う。目が潤んできたのがわかった。ぼくははるかの手をとった。外国の映画でよくするように。彼女の細い指はなめらかで、しっかりぬくもりが伝わった。話し終わってぼくは手を離し、はるかは遠くを見ていた。

ぼくらはひどく親しくなつたような気がした。その後はるかは教室へ、ぼくは部室に向かった。

なにか予感がしてたんだけど、やはりジョガーは現れた。それでまた、図書館の前のベンチに座った。今日は大忙しだ、みんながぼくを探している。本当はぼくの方がジョガーに一杯聞きたいことがあつて、それを察してジョガーが現れたんだ。彼女はぼくのことなんか相手にしてないけど、それにも増してぼくは彼女の何を知ってるんだろう。

彼女はぼくに何で興味があるんだろう。だって、ぼくは彼女のこ

とを何も知らないのに、彼女はぼくのことかわかっているから。もちろん情報収集したのではなくて、彼女にはわかってるんだ。そのメカニズムは知らないし、万能でもないと思うけど、とにかく彼女は何かを察知することができる。

あの日、はるかには来るようにしてぼくのバイト先に現われたけど、幾分かはジョガーが見たキューピッドに関連しているとぼくは思う。暗示のように感じているんだ。そうでなければぼくは彼女に声を掛けられなかったんだ。何かが閃いて、会おうかとぼくに言わたのはその暗示なんだ。その暗示をかけたのはジョガーだった。

「ひどく久しぶりの感じがするね、なんだか一季節が過ぎてしまったみたいだ」

「それはよかったわね」

ジョガーは笑いながらだけれど、クールに言った。

え、何が良かったんだろ。やはりはるかのことだよ、それしかない。ぼくは知らない振りして、

「合宿行くんですか」って、訊いた。

「だって、私の実家に泊まるのよ」

えっ、どういうこと。やはり、ぼくは何にも知らないんだ。

彼女は由緒ある、修験者なども来る大きなお寺の娘だった。その宿泊所で合宿をとり行うというわけだった。高尾山みたいな感じなのかもしれない。もしかして飯綱権現、なわけないか。でもそれに近いかも。

「修行したんですか」

「それなりにはね、でもほとんど体質みたいなものよ」

「ぼくなんか全然わからないけど…」

「近視の人とか、遠くがよく見えるとかと同じなのよ」

そうだな、それは聞いたことあった。アフリカの狩人がすごく遠くが見えるように、

彼女も普通の人の見えないものが見える。でもそれはそれだけのことだ、と彼女は言うのだ。

いまいち納得はできないんだけど、説得されちゃうかも。超一流の選手の能力って、超・人であるし、超・能力だよ。一般じゃないということだよ。自閉症の人がすごい記憶力を持っているとか。ただ、偽物も多いから気をつけなくてはね。

それでもうその話は終わってしまつて、二人でまた空を見ていた。この季節には珍しく澄んだ感じで、そうか、雨しばらく降ったからね。木々の緑がより深くなったみたいだ。空は高く、刷毛で塗つたような薄い雲が浮かんでいる。気持ちのいい天気だった。

「高橋さん、会長とうまくいくんですかね」

ぼくは言つてから、そんなことより自分の心配をしろ、みたいな気にはなつたけど。

「彼女だつて、見てたはずだし、却つて惹かれたこともあるかもしれないよ」

そうなのかな、ハードル高そうな気がするんだけど。違うんだろ。うな、ジョガーの言う通りなのかもしれない。

易きにつく人は多いだろうけど、そうでない人もいるんだ。そういうもんだよね。

「菅原さんっていつも何してるんですか」

ひどく素朴な質問。訊かれた人もイヤかも、でも言っちゃうんだな。

「学生だよ、勉強して走つて、心身を鍛える」

そんなふうにしてたら、やはりすごいな。なかなかそう言えない。そうだよ、ぼくだつて鍛えなくちゃいけないんだ。うーん、そうか。「なんか、緩むことないんですか」

「きみに会うことかな」

あちゃあ、なかなか癖のあるいいかたなんだな、ジョガーは。でも、ぼくの質問がいけないわけだからお返しなのかな。きつい冗談だけど、実際そうなのかもしれない。ぼくと会うことは彼女のリラックスの方法というわけか。それなら、なんとなくわかる気はする。ぼくも変に考えることもない。

「どういうことですか」

なんとなく、とぼけて訊いてみる。ぼくは一年生で、みんな先輩のわけで、後輩の役割をしてるわけだから、こういうきき方も許されるはずだ。ジヨガーがある程度ぼくをからかうんだって、自分が先輩だと思っているからなんだ。ぼくは、運動部にいたからこの感覚は身についてる。会社でいえば、上司みたいなものなんじゃないかと思う。

先だちはあらまほしきものの的な部分と命令指示関係かな、むやみに威張ったり、ハラスメントにならなければ、ある種の意味がある気はする。

「全く言葉通り、きみといるとリラックスする」

これ微妙です。誉められてる気はするけど、そういう自分の位置がよく理解できない。ぼくはなにか、ためにしてるわけではないから気にする必要はないのだけど、「ぼく」と呼ばれている後遺症がまだ抜けない。このこと訊いてみようかな。

「どうしてですか」

ジヨガーはぼくがわざと聞いているのに気付いているだろう。でも親切に答えてくれた。

「それは、きみと私の前世からの因縁なの」

そうか、そういう答え方ってあるんだね。もともと説明なんかできない類なのかもしれない。

そう言われたらどんなと訊きたくはなる。でも、訊かなくてもわかる気がする、だって、ぼくはいつもそう感じていたからだ。やっとなかったの、みたいな顔してジヨガーはぼくを見ている。

うーん、なんだか認めたくはない。

「安寿と厨子王、知ってるでしょ」

えっ、そこまでくる。

「そういう関係であつたのよ、彼らではないけど。お話にまとめられる前のたくさんの人たちのうちの一組。離れ離れになった姉と弟、会えばほっとするのは当たり前よ」

ぼくは何とも言えなかった。そんなふうに説明されれば、そんな気がするけど、前世なんて非科学的だみたいな考えもわかる気がした。どうなんだろう。

「理解できなければ、比喻だと思えばいいわ」

これは、声には聞こえなかったジヨガーの言葉だ。僕の目を見てちよつと悲しそうにした彼女の表情がそう言っていた。本当はジヨガーの言葉をぼくは信じるべきなんだ。彼女はぼくのことを可哀そうだと思っているのだろう。彼女の目は慈愛に溢れているし、それは気づけば、肉親の情ともいえる。ぼくのが心配なんだ。実の姉よりも強い思いだった。

それは、盲目的な愛といえるのだろうか、それは彼女の中の確信だからなのだろう。純化された肉親の愛。同身といえるのだろうか。はるかにぼくが感じる愛は、もっと肉欲的なものだ。それがなければ男女の愛とはいえないだろう。動物的と言っている。においをかぎ合うような、ひどく野蛮な行動スタイルだ。はっきり言えば、そんな本能がなければ子孫が絶えてしまうから、定められ、与えられた存在の条件なんだ。そういうものに規定された生存なんだ。前に野球部たちの話に違和感を覚えたのは、このことに関係している。彼らの方が正直だというのだろうか。

いくら上品にしても、トイレに行くのだろう、というような話と似ている。トイレには行くが強調することではないだろうということだ。そんなことは当たり前なのだから、取り立てて言うほどのことではないだろう、という考えだ。否定することはないが、強調することではないと。話をするときに何を選ぶのかはその人の裁量であって、それによってその人のあり様が規定される。で、それによって彼らから何を読み取るのだろうか。反対に言えば、掴んだものは何かという問題だ。

性行為はある種、崇高な行為でありうる。一方、惰性に満ちたひどく日常的な行為でもあるし、怠惰で肉欲的な快樂の満足でもある。果たされた行為は、精神の消耗でもありうるし、罪悪感や空虚さを

もたらずものでもありうる。相手を貶めたり、自分を損ねたりすることもある。だから、すべての行為と同じように動機に正当性や妥当性を求められる。文化による洗練さが求められるというわけだ。ある種、民主化の要求に似ているかもしれない。

世の中は、下司な勘ぐりや下卑た物言いに溢れているし、罵倒や恫喝、詐欺や揶揄、相手をやりこめ自らの憤懣のはけ口になっている。要するに、欲求不満の人々が蠢きあい、他の人を傷つけようと手ぐすね引いて、待っている状態だ。そんなところへ、わざわざ落ちていくことはない。その中に巻き込まれることはあるだろうけれど、それもうまく切り抜けて、それ以外の地平に戻ってこなくてはならない。

たぶんそれがぼくの生きる道なんだ。僕の生き方だと思う。ジョガーという、空を眺めながらぼくはそんなことを考えていた。ぼくは自分がどう生きたいのかで、悩んでいるのだと思う。それが問題なんだ、きつと。

「会長も悩んでいたわ。自分の分身を亡くしてしまって、生きる張り合いがなくなりそうだったの。食事もほとんど義務的に口に入れるだけ。あらゆる欲求が霧散してしまったの。動作も緩慢になつて、このまま徐々に死んでいくのではないかと、考えたそうよ。それからそれでいい、そこへ向かって行く道なら、自ら断つことはなくとも導かれるままだと覚悟したの」

「それは魔の領域ね。エアポケットのような陥りやすい黄昏ときだわ。そこに迷い込んで抜け出せなくなるの。医者が言えば、ASD（急性ストレス障害）やショック性の鬱、PTSD（心的外傷後ストレス障害）と診断するかもね。でも、そんなこと何の役にも立たない。知ることは意欲には結びつかないの。彼は、彼女と行くはずだった地に立って、自らに決別しなくてはならないと心に決めたの、それがターニングポイントね」

ぼくは、彼女の話の前を向いて聞いていた。大きな木が枝を伸ばしている。手を広げて、さあ、おいでとでも言うように。

「電話が、あったの。よほど辛かったんだと思うの、めったに泣き言なんかいわない人だから。私は黙って聞いていただけ。話すことによって掴んでいくものなの。私を通して何かを見てるの。それは神のように、あるものではなくて、ないものなの。混沌として無定形な何か。比喩的に言えばビッグバンの前の世界。仏が未明といったような何かなの。その中で掴んでいくものは、明るい光の世界ではないわ。かといって二元的な陰の世界でもない。光と影が混ざり合った力オスの中の無の世界。そこで小さな意識が芽生えるの。それが生きる力なの。私を通して見えるものの正体はそれよ」

ぼくは、上手く理解はできなかった。でも、それはいつかぼくも遭遇する領域のようにも思えた。そのときぼくもきつと理解するに違いない。

ジョガーはまた、名残惜しそうに話を終えた。突然、停止の指令が出たみたいに。

それで、ぼくたちは立ちあがり、並んで再び歩き始めた。

はるか

はるか

梅雨が始まったが、三、四日雨が降った後、晴天の日が続いた。今年は空梅雨になるのでは、とラジオで言っていた。どのラジオかといえばカーラジオだった。はるかと初めてのドライブ。車は小型のレンタカー、色は薄いワイン色。

「隠してたわけじゃないけど、ぼくは高校を卒業してから一年家にいたんだ。夏期講習とか、予備校にも顔を出したけど、ほとんどフリーターって感じだったかな。受験にも熱心じゃなかったし、目標もなかった」

天気は良くて空はどこまでも高いけど、少し暑いし、湿気を含んでいる。

「山、海」って聞いたら、すかさず海とはるかは答えた。

ぼくも海に行きたかった。湘南の海ってやつを見たくもあった。

ほとんど初めて。必死でルートや地図を頭に叩き込んだ。あのコンビニの角を左に曲がること、エトセトラ、エトセトラ。

結局、いいカーナビがついていてほとんどノープロBLEMだった。

十一時にしようか一時にするか、出発の時間で迷った。はるかのいつも家に戻る時間を基準にして、いろいろシュミレーションしてみた。ほんととは長く一緒にいたいけど、午後からにすることにした。最初のドライブだから。

池袋から首都高に乗って、東名高速を使うことにした。

ネットの案内の最初にも乗っていたし、カーナビの設定でもそうだった。横浜町田で降りて保土ヶ谷バイパスに乗る。そのあと横浜新道、ここがややこしかった。そんな熟練者じゃないし、道も不案内なので、少し心配していたのは事実だった。ちよつと緊張気味かな、そういうのって伝染するよね。はるかもなんだか落ち着かなかった。

大丈夫だよ、って感じで手を握った。カーブがくると、すぐ離れたけど。

「私は、普通の都立の高校。どちらかといえば女子の多い進学校。父はそれで国立の大学に入れば喜んだかも。堅実な銀行員よ。それがなぜ、って感じなの。もう本当はあまり考えたくないの。済んだことにしてしまいたい、しばらくの間は思いだしたくない」

くりかえし、繰り返し疑問やら懷疑やら、わけのわからない感情やらが湧きあがってくるのだらう。はるかは混乱していてそのことに關しては、了解不能になっている。十分傷ついて、許容量をオーバーしていた。

たぶん、幸せな家庭と家族であったのだと思う。それほど満たされていたということだ。その反動があつて、だれの責任なの、と言いたい気持ちを抑えている。

ぼくはそれほど満たされた家庭生活は送っていなかった。微妙にずれていく自分を意識していた。これは自分の責任だと思っていた。ぼくだけが浮いているんだ、と。

はるかが一番の関心はこの家族の問題だった。それ以外はあまり興味を持っていないようにも思えた。

江の島は橋の向こうにあった。イメージとは違った。何度も画像で観ていて、間違いはないけど想像していたものとは違う。ひどく古ぼけて、どこかの寒村へ来たようだった。まだシーズン前で人が少ないせいかもしれない。

車を停めて、サザエが並んでいる土産物屋を眺めながら、階段を

上つていった。手をつないで、そぞろ歩きで気分は良かったが場所への違和感が収まらない。はるかは何度か来ているようで反対に案内してくれた。ぐるっと回って、そそくさと車に戻った。空は高く、日が輝いて潮風が顔に当たった。

橋の上から浜を見ていた。サーフボードで遊んでいる人が遠くにはいた。少し落ち着いてきた。

車に戻って、はるかにキスをした。

初めてのキス。

シートベルトをする前に、はるかに向き直って、目を見つめて顔を近づけた。彼女は目を見張って、それから目を閉じた。まつ毛が震えて、柔らかい唇が感じられた。

舌で淵をなぞった。

かすかに唇が開いて、舌先が触れた。甘い水をなめたようだった。手を下げたままなのに気付いて、はるかのひじをとった。

それから左腕をシートの後ろに回して、少し抱きしめた。

はるかの唇は触れたり、押しつけられたり、吸われたりした。柔らかくて、とろけてしまいそうだった。

もつとキスをしていたかったけど、苦しいといけないと思って離れた。

手はそのままだった。というより、左腕ははるかの肩を抱いていた。

何か言おうとしたけど、その前にまた唇が動いて、はるかの唇をふさいだ。

さっきよりもっと激しく舌が触れた。

甘い水が流れ、うつとりとした時が流れた。
今度は意識しないで腕を放した。

「ごめん、びつくりした？」

はるか首をゆっくり振った。握られていた指に力が入った。無意識に動いているようだった。

ラジオから音楽が流れているのに初めて気づいた。

エアコンは動いていたのに、ひどく上気していた。ぼくは手を握り返した。

はるかが前を向いて黙っているの、そのまま車を動かした。のろのろと駐車場を出て、さてどこへ行こうか、と思った。

「左にする、右？」

「どちらでもいい」

「早めの夕食でもいい」

「そうして」

それで、右にハンドルを切った。

稲村ヶ崎に海が見えるレストランがあるはずだった。

バイトの時、雑誌の特集で見た場所だった。混むみたいだけど、予約とかは入れなかった。だめなら他を当たればいい。陽はまだ海の上の方にあつて、きらきらと反射していた。

五時前に着いたせい、窓側から二列目の海が見える席がとれた。大きな岩に波が砕けて、盛大に白い泡が舞っている。水しぶきの音が、聞こえてくるようだった。

簡単なコース料理を頼み、飲み物はノンアルコールのビールを注文した。ワインとかの方が、適してると思うけどここは我慢。はるかもぼくに付き合った。

「乾杯！」

二人の未来に、とぼくは心に刻んだ。

「えー、何に乾杯」

とはるかは言っている。

「二人の初ドライブを祝して」

はるかは家族でよくドライブをしたそうだ。助手席には母親が乗ったり、彼女が乗ったりして、小さい頃は兄や愛犬も連れて出たと湘南、箱根。中央高速や東名で日帰りできるところはほとんど行ったと言っていた。

それが、今考えれば家族への罪滅ぼしで、カムフラージュの可能性もあったなんて、とまたその話に戻ってしまう。

ただ、はるかはくどくその話をしているわけではないんだ。話の行きつく先がそこになっていまうということなんだ。

ぼくはそのことには触れずにそうだね、と相づちを打つことにしていた。彼女はぼくの論評なんか欲していないし、ただ聞いてくれることだけが彼女の望みなんだ。

そうして徐々に痛手から回復していく、とぼくは理解していた。

「実を言うと、今月が誕生日で二十歳になるんだ」

「あ、そうなの——私は九月。何かお祝いしなくちゃね」

誕生日に特別な記憶はなかった。なにかプレゼントをもらった気がしたが忘れてしまった。おもちゃとかゲームだと思うけど、クリスマスとかとごっちゃになってる。

ケーキとか誕生会は、一度、誰かのお返しみたいに開いたけど定着しなかった。記念日みたいなのはどこか照れるみたいな家風だったのかもしれない。言い方、大げさだけど。父が地味な性格でそういうのを好まなかったんだろう。はるかは違うイメージをもっている感じだった。

得てして女の子は記念日好きだけど。

友だち呼んでワイワイというプランも出たけど、やはり僕が気後れした。

「そついうの慣れてないな」

二人だけの誕生会、の方が断然いい。

はるか少し考えているふうだった。

彼女はぼくのこと、どんなふうに思っているんだろう。

ぼくは概して女の子との社交が苦手だ。慣れてないし、気づまりだしどこか偽善的だ。こういう言い方はおかしいのかもしれない、女の子一般ってものがあるわけではないからね。だからその内容なんでしょうね。はるかが付き合ってる女の子たちの問題なんだ、きつと。

彼女はどんな子と一緒にいるんだっけ。ぼくは結局、何も知らないで気後れしているだけなんだろうね。

超研のメンバーが誕生会するのはどうも考えられないけど、ぼくはそこでなら、素直に喜べるし、感激するかもしれない。彼らのことはよく知っているし、祝ってくれたらすごくうれしい。

「まかしておいて、少し考えてみる」

はるかって、こんなふうに言う子なんだ。なんだかびっくり。腕や脚が長くて、顔が小さいから成長期の子に思えるんだよね、それで高校生みたいだと。

「スポーツやってたの」

「よく言われるけど全然、歩くのは練習したけど」

歩くのって練習するんだ。考えたこともなかった。そういえば、背筋伸びてるし、腰から歩いてくる感じあるね。競歩の選手とは全然違うけど。うーん、誰も教えてくれなかったな。走るのはコーチについてたけど。

「ヨガみたいなストレッチとかも」

「それは、わかる。高一の時、体育の教師が体操の元選手で全一年生に、徒手体操の競技をやらしたんだ。よく試合の規定種目みたい

な感じで、全員同じ演技をするんだ。それもかなり難しい。倒立とか前方宙返りとか、手は付いてもいいけど。マットの上で跳んだりバランスをとって静止したり、2分ぐらいだったのかな。面白がつて、みんなで練習した。点数とかつけたかも知れないけど、それは覚えていないんだ。そのとき、ストレッチはけがの防止と、整理体操。ヨガのポーズみたいのもあったよ」

「呼吸法なの」

それも、深呼吸しか知らないな。腹筋運動とか腕立て伏せとか、よくやったけど、その時息止めるな、みたいなことよく言われたね。そのことかな。腹式呼吸のことかもしれない、今いちわからない。

「スポーツではないけど、運動はしているということ」

「そういうのを運動というなら」

「高校の時なんか部活、入っていたの」

「吹奏楽部」

「何やるの？」

「恥ずかしい、うまくないもの。挫折組、でも聴いてるのは好き。

篠崎くんは？」

「ぼくはバスケやってたんだ。身体動かすの好きで、準レギュラだったけど。とにかく走ったり、跳んだりしてればよかった。今考えると、バスケのことも、よくわかっていなかったな」

「どういうこと？」

「ぼくはポジションがフォワードだったんだ。それがなぜ決まったのかもわからなかったし、跳んでシュートを打つ練習をしていたけど、なぜそうしなければいけないのかもわからなかった。バスケットそのものに興味がなかったのかもしれない。野球とかサッカーの方が好きだったし」

「じゃあ、なぜその方をしなかったの」

「それには、理由があるんだ。部活の練習を見にいつて、唯一まと

もな練習をしてたのがバスケ部だけだったの。そのクラブだけが県大会でも上位になっていたから。上位に重点があるんじゃないくて、上位になるためにはそれなりの練習が必要だったこと。ぼくはただ、身体を動かしたかっただけなんだ」

「ジムに通うみたいに」

「そうそう、かなりハードな練習をほとんど毎日やってたから。それと今、気づいたけどコーチはしごきタイプの指導者ではなかった。温和で説明もしてくれだし、練習は熱心に見ていた。怒鳴り声なんか聞いたことがない。反対に言えばそうでなければぼくが續くはずがないから」

「ひどい先生たくさんいるものね」

「だんだん思いだしてきた。教育的配慮だと思っただけど、練習試合の時は後半の10分ぐらいになると控えの選手を使ってくれるんだ。ぼくはその一番手なんだけど、どうもミスをしちゃうんだ。当然かもしれないけど、何をしたらいいのか理解してないからなんだ。ただ、ぼくは足が速かったり、ジャンプを高く跳べたりするからボールに触ることは出来るんだ、いいところまで行くんだけど結果が出ない。才能がないんだね」

「あまり楽しそうじゃないわね」

「いや、結構その中で冗談を言ったりして仲良くやってたよ。今は連絡もしないけど、当時は毎日会っていたわけだし、そうそう、最初30人ほどいた部員は2年の時には10人になっていたし。残った連中は仲がよかったんだ」

「私は今、読者モデルみたいのをしてるけど、将来は記者みたいのに憧れてるの」

「いつも買ってたやつ」

「そうそう、あの手の雑誌よ」

「マスコミ関係のレポーターとか」

あれ、ぼくは何がしたいんだろう。

夕陽の海岸を背にぼくたちは出発して、逗子から横横へ出て、歸路についた。最初の海沿いの道路こそ渋滞していたが、あとはすんなり、順調に進んでいった。車にも道にも慣れて少し余裕は出てきていたけど、ぼくは帰るまで気を抜かないように、と言い聞かせながら運転していた。行楽の事故は、帰りの自宅に近づくころが多いそうだ。

お腹も満足はしたし、辺りも暗くなって、車内はなんだか濃厚な雰囲気になってきた。疲れとか興奮とか、様々な刺激が静かに淀んで二人の間に漂っている。はるかには黙ってくつろいだように前を向いている。テールランプが揺れて、道しるべのように瞬いていた。

ぼくは低速レーンでトラックに続いて走っていた。制限速度は80キロだよ。手で探ってはるかの手をとらえた。彼女は心持ちこちらに傾いた。

絵に描いたように幸せだな。ぼくは満たされてうつとりしていた。ラジオではカリブの音楽が流れてる。キューバ行ってみたいな。

なんとなくそんなことを思った。

「バックパッカーもいいよね」

ぼくは、はるかの手をまさぐりながら言った。

「男の子はいいよね、そう思ったらそうできるものね」

ぼくは黙った。いつかそのことは考えたことがあった。海外の女の一人旅は危険だ、ということだ。男だって危険な場所はあるけど、だから、止めとくべきだとその時は思った。引き換えにすることの代償が大きすぎるからだ。

いつかマスコミが自己責任をひどく歪めて使った例があった。用意周到であるべきだ。引き返す勇氣も必要だ。十分な準備と細心の注意、大胆な決断。事故が起きたら仕方がないということかな。

やめなよ、と言えても、絶対だめだとは言えないのかもしれない。今は何となくそう思えてきた。人の世話にならないで、生きてくことなんかできない。できるだけ人に頼らないで生きていこうという

ことだね。

首都高に入って、道が狭くなったのに、みんなやけに飛ばしてるね。ぼくはかなり神経を使って運転していた。もう少しだ。都会の夜景が流れていく。白い光の中に橙の照明、赤い車のランプが点滅したりして、速度の中で、幻想的な影が行き過ぎた。

池袋のランプを下りたときは、正直ほっとした。ちよつと、もたもたという感じで明治通りをはるかの家の方に曲がった。

少し前の街路樹で陰になっている場所に停車して、目を見つめあって、そして軽くキスした。今夜のお別れのキスかな。

「楽しかったね、また行こうね」

はるか降りに際そう言った。

ぼくは、送るよと言って外に出ると、手を引いて、はるかを抱きしめた。はるかの身体の輪郭がわかるくらいにくっついた。手はしつかりはるかの背中に回っていた。はるかもなんだか腕を挙げて肩に手が伸びた。

いい感じだな。映画だったら、彼女の脚は片方上がってるね。

そのまま手をつないでマンションの前まで行った。いつものように彼女は手を振ったが、より親しみを感じたのはぼくの気のせいだろうか。彼女の身体の感触がまだ残っていた。

残されて、ぼくは車を返しに行った。それで今日のデートは終わったんだ。

田舎の方ではエアコンのある家は稀だった。当然、実家にもなかった。どうしてたかと思うが、扇風機で十分だった。それは、暑い日もあって汗もかいたが、じめじめとした感じはなかった。昼間、太陽が照れば温度も上がるが日蔭は涼しいし、朝夕は風が吹いた。要するに空気が乾燥していた。

ところが、東京の夏だ。まだ盛夏には遠いというのに、空調なし

では暮らしていけなかった。空気は淀んで流れる風もない。

部室からも避難した。そこには空調が用意されてなかった、なにしろプレハブなのだから。木々が日を遮って最初ひんやりとしても、段々蒸し風呂のようになって、長時間そこにいるのは無理だった。裸になれば別だろうが。

ぼくの居場所は図書館に移った。そこは涼しくて快適なのだが、どうも人の蠢く感じが気になった。落ち着かないのだ。

でも最後、レファレンスルームが最適なのを発見した。

ただここは椅子が限られていて名前の記帳が原則いるし、時間制限もあった。でも実際は利用する人は限られていて、ぼくはすぐ係の人と顔見知りになった。出来るだけ調べ物をするようにした。それで、近世の資料を少しずつ調べていった。

ぼくは何をしてるのだろうか、と時々思うことがある。

こんなことして何か役に立つのだろうか。学者にでもなるつもりなのかな。それはそれで大変なのだろうし、その時にならないとわからない。今はただ興味があって楽しいからそうしてるだけなんだろうね。そう考えると、どうもいつもぼくは目的意識が足りないんだよね。

まあ、そのことはあまり考えずに過ごそう。

だいたい授業のとき以外はそこにいて、夏休み中も開館しているというから、秋までそこがぼくの居場所なんだろうね。でも、午前中か午後どちらかで、そこに通してはいられなかった。係の人は林という男のひと、小泉という女のひとだ。ネームプレートしている二人とも30歳ぐらいなのかな、長老より年は上だろうがもっと若く見えた。というより長老が老け過ぎていたんだね。もう四十歳に近く見えたもの。どうしてるかな、うまく進んでるといいのだけど。

昼ははるかとお腹が空しくなってきた。役所の先のファミレスが

いつもの場所だった。連れだつて行くこともあつたけど、メールで連絡してそこで落ち合うことが多いかな。ドリンク飲んで待っていれば、彼女が顔を出す。

窓際の席なら彼女が歩いてくるのが見える。

うーん、あれが練習した歩き方か。やはりモデル歩きだね、あるいはアメリカ映画に出てくるキャリアウーマン。弁護士とかFBI捜査官、スーツ着たらね。

今日はブルーのレギンスに紅めのミユール。上は明るい半そでのシャツ、肩から大きめのバッグを提げている。

入り口を入って、さつと見回して、ぼくを見つけると手を挙げる。花が開いたように笑みを浮かべている。

ぼくはあんな風には笑えない。ちよつと顔を引いてほほ笑むだけだ。

近づいてきて首をかしげ、待った？　みたいに目を輝かせる。ぼくは手を広げてから、座つて、みたいな合図をする。

彼女が歩いてくるのを眺めたくて、わざと遅めに連絡して待っていることもあつたんだ。

彼女はぼくの半分ぐらいしか食べないかな。ぼくが食べすぎるということもあるけど、一人前頼んでもぼくに半分くれたりする。それがとってもいいんだって。食べたいものはあるけど、残したくない、と考えると、注文できないメニューがあるらしい。その分ぼくが食べれば、問題は解消するし、ぼくもお腹いっぱいになる。

ダイエットとは言わないけど、あまり量は摂らないようにしているんだって。その方が精神的にも肉体的にも調子がいいらしい。

「吉田君、最近学校来てないみたいよ」

あれから海保には全然会っていなかった。きみには、情報が届かなくなる、とか言ってたけど、気にもしてなかった。というより忘れていた。あのとき、はるかになにも言わなくてよかった。

で、はるかはどこから聞いてきたんだろう。

「守屋さんが、吉田君がいなくて騒いでたの。」

どうしたんですか、と訊いたら何かトラブルがあるらしいって」

「策におぼれたかな」と、ぼくは少し冷淡に言った。はるか目は浮かせたけど、話を続けた。

「右翼か過激派かわからないけど、その手の人に睨まれているってえ、どっちなんだろ。」

「どこかの集会で、やじつたらしいの。それもかなりしつこく、そうしたら、追いかけて連れて行かれちゃったらしいの」

「学校の中で」

「そうなの」

「いつの話なの？」

はるか口調はあまり現実感がなかった。

「ええっ、今よ。ここに来る途中で守屋さんに会ったの」

「そうじゃなくて、連れていかれたの」

「二、三日前みたい」

そうか、そのころ通用門のグラウンドよりのところで、政治集会やつてた。海保は時々顔を出していたみたい。彼の情報活動の一環かもしれない。そんな派手な動きはしないはずなんだけど。

まだ長老がいるときだけど、長老は彼の情報源は学生課がらみじゃないかと言っていたんだ。学校の事務局に知り合いがいるらしいということだ。だから、学内の情勢を探っている。その見返りに情報をもたらう。

彼は徒党を組まないから党派性はない。彼独自の考えで動いているんだ。そこが彼のいいところではあるんだけど。

彼が拉致される理由があるとすれば、スパイ行為と疑われたのだと思う。でも、それほど大それたことではないはずなんだ。まあちよっと脅かされるかな、自己批判しろみたいに強要されるか、ただ拘束はされるだろうな。

怖い話ではある。

解放されていると思うけど、しばらく彼は姿をくらます、というわけだ。こけし捉まえて話きかなくちゃ。

でも、ひとりで野次るなんて海保、勇氣あるな。ぼくなら絶対ビビる。

こけしは違う用事で海保を探していたみたいだった。

それで連絡がつかないので、ヤキモキしていたということだ。事情を知っていたのは卑弥呼だった。

卑弥呼は現場に居合わせたらしい。海保と男たちでやりあっていたら、もうすでに海保は取り囲まれてしまったらしい。

それで、連行されそうになったので、周りにいた人と小競り合いがあっただ。そのとき、卑弥呼が通りかかったということだ。彼女が割って入ると、海保は殴られたみたいで、口から血が出ていたという。それで、くっつかかったんだけど、海保は引きずられていったらしい。

彼女がそれほど行動的だとは信じられないんだけど、すごいね。

それですぐ、会長を呼んだ。彼は自治会の幹部だから、顔が聞く交渉にあたってもらったらしい。

もともとは誤解なのだからと言って、会長が身元の保証をするということで解放してもらったようだ。もともと学内のことだからと押したらしいが、発端は部外者だったみたい。外人部隊がいたらしいんだ。

ほんと危なっかしいよね。

それで、その場所がプレハブの部室というから驚き。超研の部室のすぐ近くだ。イスに縛られ、猿ぐつわというから、海保もトラウマになるかも。

何考えているのか、彼らも妄想系だから。パライア入ってたら超危険。会長、すぐ捉まって良かったね。

そのあと、いろんな情報が入ってきたけど、ぼくは興味がなかっ

た。たぶん、そのサークル「政治研究会」に関わり合いになることもないだろう。

ぼくはちよつと注意ぐらいの警報で済ましてしまった。

次の次の週には海保を見かけるようになった。こけしに言わせると、ぜんぜん変わってないって。でも、遠くから見ても警戒するように見えたりするけど。意外とわざとやってるかも、海保なら次に見かけたとき、海保はぼくの方に寄ってきた。

近くで見ても、とりわけ変わったふうには、確かに見えない。そのときぼくは、ピンときた。海保は全然ビビったりなんかしてないし、トラウマのかけらもない。ただ、口が切れたり、腫れてたりするのが治るまで待っていたにすぎないんだ。

「うまくいつてそうだね」と、海保は言った。当然はるかのことだ。

まあ、ともいえないんで黙っていると、

「諦めたわけではないけど、やることが一杯あるのでしばらく休戦だ」

「ひどい目にあつたみたいだね」

「きみにはわからないよ」

ぼくにはどうわからないんだろう。

「きみには影がないからぼくのが理解できないんだ」

ニキビ跡の顔を少し傾けて海保は言った。黒ぶちの眼鏡、微妙に前のと違う。彼は確実に、僅かな時間だとしても拉致されたんだ。

「とにかく、無事でよかったね」

本当は彼はナイーブだから、ぼくは彼を刺激しないようにいつも話している。

「じゃ、また」

彼は寄ってきたときと同じように去っていった。

はるかば母親と夜一緒にいることに意義を見つけていた。だから外泊することか、夜遅くなることには抵抗があった。合宿とか、旅行の予定があれば別だろうけど。

その心理はぼくにもわかる。ある期間だけでもできるだけ母親と一緒にいてあげたいのだ。そうすれば、母親は自分の生活を始めるだろう。それが目的でもあるのだから。何十年続けてきた生活を変えていくのには時間と覚悟がいる。はるかばもそれで、その生活に慣れようとしているのだ。お互いにそこから親離れ、子離れをしていくことになるだろう。

ぼくたちの身体の接触は、ぼくはすごく望んでいるけど、ひどく緩やかなものだった。それに、はるかばはそのことに奥手であった。ぼくは、焦るなと自分に言い聞かせていたし、はるかばの気持ちを大事にしようと決めていた。

猜疑心って止まるところがないね。自然に、というのがぼくの信条だから、そこから外れないようにしないと。男女の性愛は自然だから、それに逆らう必要はないんだ。（避妊しないとかいうのは違う話だよ）

だからお互いが楽しくなければ意味がない。ぼくたちはいつか結ばれるだろう、とお互いに思っているはずだった。それであれば、ぼくはいつまでも待てる気がしていた。

でも、あっけなくぼくたちは結ばれたんだ。勢いということだし、抑えきれないものなんだろうね。それは素晴らしい体験だったし、ひどく気持ちのいい思い出になった。

はるかばが愛おしくて、ぼくは有頂天だった。何もかもが素敵だ、とぼくは大きな声で叫びたかった。

はるかばがぼくと同じに満足したかはわからない。

聞いても、正直には答えないだろうし、実際答えられないかもしれない。

まったくそのことに意味はないのだが、はるかは初めてではないような気がした。なんだか意外な気がしていた。

でも、全然思い違いかもしれない。

ぼくは浮き浮きとして、顔も晴れ晴れとしていたと思うけど、はるかはそうでもなかった。うつむいて、なんだかじつと黙っていた。それで声をかけるのは、少し憚られる感じだった。こんなとき、下手に想像力を試すと、碌なことにならなかった。

土壺にはまって、とっぴんしゃん、だ。

何も考えない。これは、ぼくが会得した対人関係の法則だった。とうぜん自分のことも考えない。よかったとか、悪かったなんか気にしない。もし必要があるなら、どこからか矢が飛んでくる。そこから考えた方がましな考えが浮かぶ、ということにしていた。それで悪い結果が起きたとしても、それだけのことだ。

縁がなかったと諦める。

抜けたら、どんどんこしょ。あれ、土壺がどうして茶壺になったんだろう。

ずいずいづところばし、ごまみそずい。

何かこのメロディーが頭の中を駆け巡っていた。どちらにしても、ぼくは上機嫌だったんだ。

ぼくたちは並んで腕をとるように歩いていたら、はるかのそくさという速度も、一本明るい通りに出ると、緩んでいた。それで、手をつないで、なんだか幼稚園児の行進の感じになってきた。それが、さらに大きな通りに出て、そぞろ歩きのようになった。

「なんだか、お腹すいたきた」

はるかの久しぶりの発言だった。その前なんて言ったかな。

「わたし、前から行列のできるラーメン店入って見たかったんだ」
たぶん、その店はこの近所で、路地を曲がればあるはずだった。
「行ってみようか」

ぼくは手を引いて、前に進んだ。はるかは、独りでラーメン店に

行ったことはないし、家族でもラーメン屋というのは行かなかったらしい。それなら中華料理店みたいな感じだった。

自慢じゃないが、ぼくは東京に来て、有名店ももちろんだけど、チエーンの安売り店でも、どこでも、かなり場末のところにも足を運んでラーメンを食べてきた。当然大盛り、あるいは何かのセットメニューで。自分でも即席の作るから、ほとんど主食と言ってもいい。

その店も一度行っていた。実を言うと、ぼくはラーメンにあまりこだわりのない。だから反対に行列してまで食べたいとは思わない。たまたま並んでしまうときは仕方ないけど。

もちろんそこも並ばずに席についた。頼んで、料理出てくるまでが、ワクワクするよね。給食の前の子供みたいに、手を下において二人並んで待っていた。

カタッとカウンターに器が置かれるまで、ぼくは白日夢の中にいるようにボーとしていた。はるか夢の中にいたわけではないだろうが、じつと前を見ていた。

そこそこ店内は混んでいたから、身を潜めて静かにラーメンを食べた。まあまあだけど、少し値段が高い気がしていた。

「おいしかった、ありがとう篠崎くん」

会計を済ませて外に出ると彼女はそう言った。ぼくは手を振って先に立った。財布の中身はほとんどなくなった。給料前借りできるかな、誰か店長に頼んでいたのを思い出した。

浪人している間、これ表現が古すぎだけど、変わりに使える言葉がない。仕官してない状態とは関係ないけど、遊学というのが実際かな、予備校に所属してれば、それも使えるけど、夏の間、市民プールに通っていた。

出来たばかりの体育館の中であって、知られていないのか、いつ

もガラガラだった。午前中、近くの図書館で勉強、これが微妙なんだけど、何の勉強かといえば、受験勉強とは何の関係もないものだった。とにかくそこで本を読んで、ノートをとったりして、その後プールに繰り出した。

とにかく冷たい水は気持ち良かった。

そのとき、いろんな小説やら哲学書やら入門書を手当たり次第、読んでいたね。その言葉が頭の中を駆け巡ってた。頭がぐるぐる回って、冷たい水に飛び込む。がむしゃらに身体を動かしたり、浮かびながら空をみていたり、飽きたら上がって日光浴だ。

夏の間真っ黒になったね。

今考えると不思議だけど、ぼくはいつも一人だった。

まあ、反対に当然なのかもしれないが、ぼくに付き合おうとする人はいなかった。陸上をやった人はわかるけど、

抜かされるときはどうにもならないんだ。それが加速の問題だと気付いたのはだいぶあとだけれど、もがいても、あっけなく抜かされてしまう。

能力の限界を悟る瞬間なんだ。それには周到な準備やら、練習が隠されているとしても、到底追いつかないナ、と感じてしまうんだ。ぼくは受験勉強にそんな考えを持っていた。

とりあえず、受験生なので受験について考えることがある。これは本来サイコロでもいいのじゃなくと、思い始めていた。能力のある人はどんなことをしても現れてしまうような気がする。その人を探すゲームなのだろうか。その人の能力とは果たしてなんなのだろうか。社会が必要とする能力ともいえる。どちらにしても差別化されなくてはならないんだ。

でも人にはいろいろな能力があって、それを一つの基準で判断することはできないはずだった。もちろんそんなことはわかってはいるはずなので、科挙のシステムと同じ方法をとることにしたんだ。よりよい役人になるための素養とか、技術者になるための知識だ。

ぼくはその競争を放棄してしまった。

たぶん先頭を走っていた自分が嫌になったんだ。一生このまま走り続けるモチベーションがみつからなかった。たぶん才能のある人はそんなことを考えずにコースを回るように思える。

それがさつき考えた能力の限界を悟る瞬間なんだ。

同級生でも、どうしてもその大学や学部に入らなければならないと覚悟した人は、多くがその目的を達するように思える。よいとか悪いとかではなくて、その選択肢しか残されていないからだ。そしてそれに挫折してしまったら、それは深い傷を残す。一生のトラウマになるだろう。

失恋に似ているかな。

人の人生なんてどれだけのものだろう。傷を認めて乗り越えられることもまた一つの才能だ。

で、ぼくはぼくらしく生きるためにはどうしたらいいのかを考えていたんだ。

たぶん様々に言われるだろうし、蔑視されるかもしれないが、ぼくはそのコースを外れてしまったんだ。

コース・アウト。

失格だ。誰にも相手にされない。でも自分で決めたことだ。

そのプールで紅い水着の理沙に会った。

何度か顔を合わせるうちに関係ができた。

ぼくは初めての経験で、当然のように彼女の身体に溺れた。が、急に彼女はプールにこなくなって、ぼくたちの関係はあっけなく終わってしまった。初めから彼女に会う手だては残されていないかったんだ。もともとそのつもりであつたろうし、関係が深くなる要因がなかった。

今考えればそう思えるが、当時はまだぼくに未練があつて嘆いたものだった。

秋が来てぼくもプール通いを止めた、ほんとにある夏の経験だっ

た。

それがあつたからか、子供のころ近所に道場があつて、遊びのよ
うに通つた経験があつたからか、秋からその体育館で空手のコース
に参加した。結局、型をやっただけで終わってしまったけど、身体
を動かしているのは楽しかった。そのときは頭が空白でそのことに
没頭できた。

ひどいプレッシャーがあつて、時々押しつぶされそうになる。

何からなのかわからなかった。

一人で立ち上がるうとするこゝへの重力のようなものなのかもしれ
ない。受験生だったけど受験に対する不安は少しもなかった。前
年も実際ぼくは試験を受けていなかった。全くばかげた考えだが、
受けたふりをしたんだ。家族の手前、そういうふうにしてたけど、
失格の確信犯だった。無理しなければ合格する自信はあつた、確率
の問題だけど。

だからぼくは違うものと戦っていたんだ。

たぶんそれは、エスタブリッシュメントみたいにいわれる、出来
上がった体制や考えだったんじゃないだろうか。

簡単に言えば、ぼくそのルール知りません、という立場だ。い
までもルールが知らないうちの作られることに我慢がならなかった。
人間の歴史がそれを巡って動いているのかもしれない。そしてそれ
はみんなのためじゃないんだ、そういうふうに仮託されているとし
ても。

ぼくが嫌いなのはそうすることではなくて、そう仮託することな
んだ。カレーが食べたいならそう言え、といたいんだ。みんな
のためにカレーを食べるんだから、とか

どうしてもカレーを食べなくてはいけないとか、理由をつけてカレ
ーを食べさせるのは止めてくれ、と叫びたい。ぼくは、うどんが食
べたいんだ。

たぶんぼくは孤立しすぎてしまったのかもしれない。伝達を遮断
されたように自分で感じて、世界とうまく接触できなくなってしまう

ったんだ。自分でそれを望んでいるにも拘わらず、その孤独に押しつぶされそうになっている。

解決法は簡単だ。ぼくが手を挙げるか、手を広げればいい。降参するか、諦めればいい。

それに夢のように空に浮かんだ希望がなかった。それが見えれば、それに向かつて努力ができる。細かな技術に磨きをかけられる。くには目指すべき何もなかった。

ぼくが自殺という考えに一番近づいた瞬間に違いない。

もちろん自殺をするつもりはなかったけど。あるいは宗教的分野に入り込みそうな時期であつたのかもしれない。

それらはなにか自意識のようなフィルターがそれを許さなかった。ぼくはだから自分の中のそのフィルターだけが頼りだった。それはぼくらしさであり、ぼくであるための根拠だったし、そういう意味でいえば、磨かれるべき能力だった。

今となつてはわかるが、そのときは丸ごと世界を飲み込めるような考えを夢想していたんだ。科学が絶対であるような、哲学でも、経済でも、なんでもいいんだけど、そうなるをやっぱ宗教的感覚かな。あるいは自分が絶対であるような。

でもぼくは夢想家の資質があまりない気がする。それに自分は享乐的だと思つし、生活も楽しめたかつたりするから、この時期の危機は知らないうちに乗り越えてしまつたんだ。結果的にそれはそれでよかつたような気がした。自分を追い込み過ぎてちよつと辛かつたから。

金欠でもあつたし、簡単な試験があつたりして、はるか二、三日会わなかつた。もちろんメールの交換はいつも通りだつたけど。本当の理由を言えば、ちよつと照れくさかつた。

どこかで、偶然あつたりしないかなと思つてた。

偶然ではないけど、三日目の夜、店にはるかがやつてきた。週に一度は買い物に来るから、現れるのはふつうだった。

やあ、って手を振って入ってきた。ぼくはドキンとした。ちょっと上がつちゃう感じだった。

ふわふわなワンピースに七分のパンツ。さっ、さっさっ歩いてくる。棚から雑誌、取り出すとぼくのところへ、
まあ、レジがあるからなんだけど。

「終わったら、家に寄ってよ」

ぼくは、きよんとしていた。

「ママが、誕生祝いやろうって」

ぼくは自分の誕生日を忘れてた。

「私も手伝って料理用意するから。帰るとき連絡してね」

ぼくが、もごもごしてる間に、

じゃ、と言って行ってしまった。

サプライズなら完璧に成功したね。誕生日のこと最近全然話題にならなかったから。前から準備してたんだろうか。

そうなんだろうね、彼女の母親にどう接したらいいんだろう。

わー、マジ怖。

それからの時間、ぼくはドキドキしながら過ごすことになった。

ぼくはあまり自己主張をしない方じゃないかな。

多く黙っているからその機会もないということかもしれないけど、でも聞かれれば、意見だつていえるよ。ただ慎重だし、言った言葉にこだわるかもしれない。ういうの日本的っていうのかな。東洋的ってあまり分らないんだけど、違う気がするな。島国根性なんていわれたけど、日本人の美徳みたいなのあるよね。ぼくが勝手に思っているだけなんだけど。

義理と人情系とは異なるもんだよ。

それってどこから来てるのかな。お祖父ちゃんかな、あるいはその上の年代の人。そういうのって、本とかではないところからの気がする。摺りこまれてるっていうのは信じないけど、ほんとどこ

から来るのかな。

言葉っていうのは重要だよ。思考パターンとか考えの内容まで規定されてる気がする。その上に乗っかって考えだって進んでいくんだ。それはすごい時間がかかって形成されてきたんだね。そこから逃げられはしないんだ。引き受けなくてはならないものなんだ。

ナショナルなものって、かなり気恥ずかしいし、熱くなる人って相手を貶すから好きじゃない。フェアっていうのが基本にあって成立するような気がする。それに夜郎自大じゃないけど、客観的な認識も必要だよな。

気を紛らすためにぼくはそんなことを考えていた。

きょうは暇な日だった。雑誌の発売日によって来客数が違った。

土、日は週刊誌も発売ないし、配送もほとんどないから静かな夜だ。酔っ払いの客も来ないし、学生も少ない。

ぼくは派手なことはそんな好まないけど、非社交的ではないと思っている。

母親は社交的な人だった。

ワイワイするのが好きだったし、ボス的に振舞うのが似合っていた。ぼくは少し苦手なんだ。気に障るといふのは違うんだけど、無理するなよ、みたいに見えるときがあった。でもうまく根回しをしたり、基本明るくて磊落な人だから誰からも好かれたし、華があった。母が現れると座が盛り上がるし、話もうまかった。みんなを楽しくさせるコツを知っていた。

連絡して出かけると、はるかは玄関のホールまで向かいに出てきてくれていた。少し面倒なの、とオートロックの解除をした。

さあ、どうぞ、と言ってエレベーターに乗り込み、八階建ての六階に案内された。その間、ぼくは居心地悪そうに扉を見ていた。

下りて右手に出て、三つ、四つ先がはるかの部屋だった。通路の回りにも建物があって、見晴らしは良くない。

ドアチャイムを鳴らして、はるかは振り返りニコツと笑った。準

備オーケー、みたいな感じだった。なんだか初舞台に上がる役者みたいだな。

「やあ、いらつしゃい」と、にこやかに出てきた人は、
ぼくの想像より若々しかった。すこしお世辞ぎみにいえば、姉妹
という感じだけど、はるかがすごく似ているわけではない。そうす
るとはるかは父親似なんだろうね。

「おじゃまします」と、ぼくは努めて明るく言った。

大丈夫、このテンションでいけそうな気がした。

すぐテーブルに着いて、晚餐が始まった。

さまざまな料理が並んでいた。刺身の盛り合わせもあったし、オ
ードブルのような前菜、つまみが色とりどりに並んでいた。

まずはおめでとう、ということでシャンパンで乾杯。

「適当につまんでよ、」と母親は言って席を立った。

ぼくは、はるかと顔を見合わせ、食べはじめた。

それからメインのローストビーフが出て、お酒もワインと、ビ
ールが運ばれた。

まずは腹ごしらえ、おいしかった。久しぶりの家庭での食事とい
う気持ちもしたし、さりげなく気を遣ってくれているのが心地よか
った。

恐縮しながらも遠慮はしない、食べ方だったかな。少し恥ずかし
いけど。いろんな話をして、微妙に避けてる話題はわかった。

動物の話は受けた。

飼っていたイヌやネコの話で盛り上がった。このマンションでは
ペットの飼育は禁止されているようだった。

はるかがママと呼ぶので、ぼくも、どうしても言わなくてはいけ
ないときはママを使った。ぼくは、ママと呼んだ経験がなかった。
母親に直接呼びかけることはほとんどなかったけど、強いていうと

きはお母さんと呼んだ。すごく古風かな。父がお母さんと呼んでいたから、それほど不自然ではなかった。

外では父、母でふつうに使っていた。

そのママだけど直接使うんじゃない、たとえば

「そのとき、ママなんて言ってたの」

みたいに、はるかに何か聞くときそう言った。別に相談したわけではないんだけど、ついでに誕生祝いの話が出たとき、ママが、

「来てもらってここでお祝いしましょうよ」

と、言ってくれたという。

はるかには、そのプランは頭に浮かんでなかったなので、ママの顔を覗き込んだらしい。

最近よく会っている彼、というのがぼくのことだ。

やはり心配だろうから、一度会っておくべきだと判断したのだろう。遅く帰ってきたときもあるし。

ぼくがママのテストに合格したかはわからない、

たぶんそういうことを直接いったり、表情に出したりする人ではないみたいだ。ただぼくが楽しくて、感謝したことは間違いない。

はるかも外で見るときより、落ち着いて心持ち静かな、淑やかな印象があった。それがママのせいなのか、自分の家のせいかはわからなかった。

礼を言っただけ辞去したあと、はるかが見送り出てきてくれた。

外に出ると反対にむっとするような熱気があった。

はるかから抱きついてきたのでびっくりした。ママの手前、手も握っていなかったから。

ぼくたちは慣れたようにキスをして、お互いの身体を感じていた。お酒の酔いも手伝っているのか、いつもより長く、濃厚であるような気がしていた。

それから手をつなぎ、肩を抱くようにして下に降りて別れた。

ぼくの二十歳の誕生日はこんな形で終わった。
そして、未成年のぼくの時も幕を閉じたのだった。

第一部 ぼくの時 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9726k/>

ぼくの時

2010年10月8日13時48分発行